

富田林市埋蔵文化財調査報告10

中野遺跡発掘調査概要 V

1984.3

富田林市教育委員会

はじめに

ここに報告する中野遺跡は、石川西岸の河岸段丘上に位置し、金剛・葛城・二上の山々を東に眺望できる景勝の地にあります。

過去4年間国庫補助を受け、富田林市教育委員会が中心となり発掘調査を実施してまいりました。その結果、遺跡の範囲確認をはじめ、従来から言われていた弥生時代中期の集落址としての性格を解明する貴重な資料を提供してきました。

本書は、弥生時代中期の一括した貴重な土器を中心と報告するものであります。また、本書が南河内における弥生土器研究の一助となり得ることを期待するものです。

最後に、調査および本書作成にあたりご協力賜わりました方々に厚くお礼申し上げます。

昭和59年3月

富田林市教育委員会
教育長 福田治平

例　　言

1. 本書は、富田林市教育委員会が昭和58年度に国庫および府費の補助を受け、発掘調査を実施した大阪府富田林市所在の中野遺跡の調査概要報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課中辻亘を担当者とし、昭和58年4月1日に着手し、昭和59年3月31日に終了した。
3. 調査を実施するにあたり、下記の諸氏から格別の助言や援助を受けた。記して感謝の意を表します。

北野耕平（神戸商船大学教授・富田林市文化財調査会委員）・玉井功・山本彰・小林義孝（以上、大阪府教育委員会）・竹谷俊夫（天理大学附属天理参考館）

4. 本書の執筆は、遺物については忍薰、遺構については中辻亘が行なった。
5. 本書の編集は中辻が中心に行なった。また、製図については、遺物を忍薰、遺構を白江和弘が行なった。
6. 卷末には、個人住宅建設予定に伴う事前調査を実施し、新規発見した古墳時代前期の宮林古墳墳丘実測図を載せた。

調査参加者

忍　薰・白江和弘・岡本武司・高橋修美
村井正幸・大石　聰・杉山泰敏・木村泰
雄・池田雅俊・打田雅彦・堀　智子・田
川友美・大橋圭子・本並俊哉・本並宏介
浅野隆志・北野　昇・奥田正己・畠山秀
夫・山田道司・岡嶋智美・仲井和代

本文目次

はじめに

例　　言

I	調査に至る経過及び概要	3
II	概往の調査	4
III	調査の成果	6
1	調査に至る経過	6
2	層　　序	6
3	遺　　構	7
IV	出土遺物	13
1	土　器　類	13
2	石　器　類	42
3	土　製　品	48
4	瓦	48
5	小　結	50
V	まとめ	52
付	遺物観察表	

挿図目次

挿図1	中野遺跡周辺地形図	1
挿図2	中野遺跡発掘調査地点地域図	2
挿図3	1982年10月調査区試掘時出土土器	5
挿図4	東側断面図	6
挿図5	溝1平面図	7
挿図6	溝1西側断面図	7
挿図7	溝2遺物出土状況図	8
挿図8	井戸平面図・断面図	9
挿図9	土壤1平面図・断面図	10
挿図10	遺構平面図	12
挿図11	溝1(第5層・第6層)出土土器	17
挿図12	溝1(第5層)出土土器	19
挿図13	溝1(第4層)出土土器	21
挿図14	溝1(第4層)出土土器	23
挿図15	溝1(第4層)出土土器	24
挿図16	溝1(第3層)出土土器	26
挿図17	流水文拓影	27
挿図18	溝1(第2層)出土土器	29
挿図19	溝1(第2層)出土土器	31
挿図20	溝1(第1層)出土土器	34
挿図21	溝2出土土器	36
挿図22	土壤1出土土器	37
挿図23	土壤2~5、井戸1、建物4・5出土土器	39
挿図24	ピット1~9出土土器	40
挿図25	堆積層、表採土器	41
挿図26	溝1出土石器	43
挿図27	溝1出土石器	44
挿図28	その他の遺構・堆積層出土石器、表採石器	46
挿図29	溝1出土紡錘車	48
挿図30	瓦	49

表目次

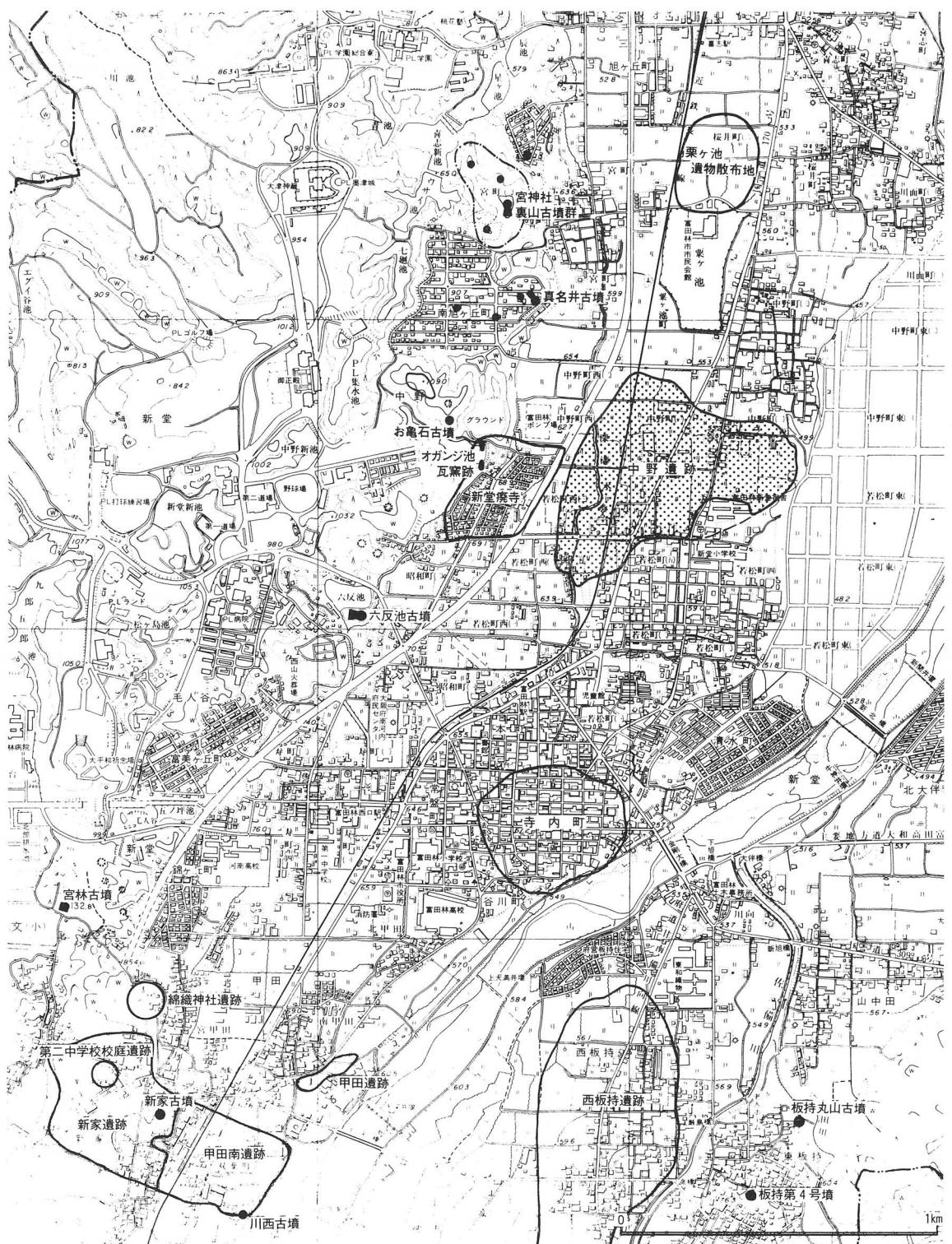
表1	建物一覧表	11
表2	出土遺物一覧表	14
表3	出土遺物一覧表	15

図版目次

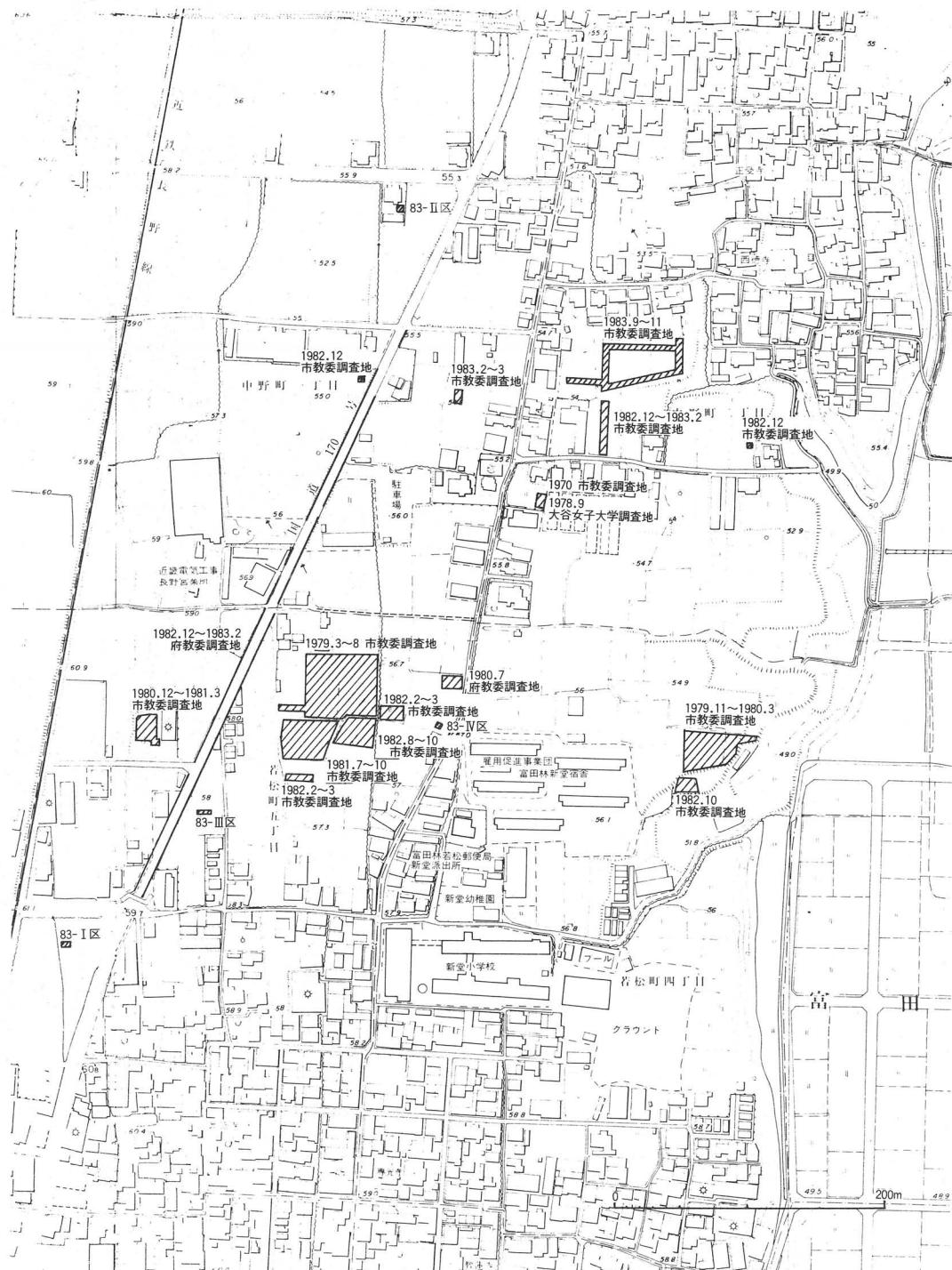
図版1	中野遺跡航空写真
図版2	(上) 調査区近景 南より (下) 遺構全景 東より
図版3	(上) 溝2遺物出土状況 南より (下) 井戸 西より
図版4	(上) 土壌1 北より (下) 土壌1遺物出土状況 北より
図版5	(上) 溝1掘り込み部分全景 東より (下) 溝1西側断面 東より
図版6	試掘時溝1出土土器、溝1第6層出土土器
図版7	溝1第4・5層出土土器
図版8	溝1第4層出土土器
図版9	溝1第3・4層出土土器
図版10	溝1第1・2・3層出土土器
図版11	溝2、土壤1、建物4、建物5、ピット5出土土器
図版12	溝1出土石器
図版13	その他の遺構・堆積層出土石器、表採石器
図版14	溝1出土石器・紡錘車、溝2、土壤3、土壤1出土瓦

付図目次

付図1	宮林古墳墳丘測量図
-----	-----------



挿図1 中野遺跡周辺地形図



插図2 中野遺跡発掘調査地点地域図

I 調査に至る経過及び概要

83 - I 区

富田林市若松町 5 丁目 1417-1 番地先において、個人店舗建設に伴い昭和58年4月7日付けで発掘届出書が提出された。これを受け昭和58年6月18日に調査を実施することとなった。調査は南北約1m、東西約2mのトレンチ掘りで実施した。その結果、地表下約80cmが盛土で、盛土下には旧耕土(約20cm)、濁黄灰青色粘質土(約10cm)の順に堆積する。遺構は認められず、遺物は濁黄灰青色粘質土中に弥生土器片1点が出土したのみである。

83 - II 区

富田林市中野町 1 丁目 1473-1 番地先において、個人住宅建設に伴い昭和58年7月25日付けで発掘届出書が提出された。これを受けて昭和58年9月7日に調査に着手し、昭和58年9月9日に調査を終了した。

調査は2m×2mのトレンチ掘りとした。表土下約60cmで地山を確認した。地山は東に傾斜しており、周辺がゆるやかな谷地形であったことが推測される。遺構は認められず、整地層からサヌカイト片、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、羽釜、瓦が出土した。

83 - III 区

富田林市若松町 5 丁目 1438-1 番地先において、個人住宅建設に伴い昭和58年12月7日付けで発掘届出書が提出された。これを受けて昭和58年12月22日に調査に着手し、昭和59年1月11日に終了した。

予定地は国道170号線に隣接し、道路面より約1m低い耕作地である。設計上盛土工法となるため、便槽部分を中心にして2m×3mのトレンチを2箇所設定した。堆積土は上から順に耕土(25cm)、床土(5cm)、灰黃褐色粘質土(30cm)となる。地山上に土壙及びピットを検出した。遺構には弥生土器・土師器・須恵器を含む。

83 - IV 区

富田林市若松町 5 丁目 631-6 番地先において、個人店舗・事務所建設に伴い昭和58年12月26日付けで発掘届出書が提出された。これを受けて昭和59年2月9日に調査を実施することとなった。

予定地はすでに盛土された土地であったため、便槽部分に南北約1m、東西約2mのトレンチを設定した。断面観察では地表面より、盛土(50cm)、旧耕土(20cm)、旧床土(10cm)の順で堆積する。地山は段丘礫層で、2箇所ピットを検出した。ピット中からは弥生土器・土師器・瓦が出土した。

II 概 往 の 調 査

中野遺跡における本格的な発掘調査は、1970年に富田林市中野町2丁目に温室ハウスが建設された際に実施された。^(注1) 小規模な調査ではあったが、壺・甕・鉢・高杯などの弥生土器の破片を含むV字溝が検出された。これらの弥生土器が弥生時代中期に属することが判明し、この調査が中野遺跡の年代を決定づける試金石となった。

1978年には大谷女子大学教授中村浩氏によって1970年のV字溝の延長部を確認する調査が行なわれた。これらの調査を機に周辺の遺物散布状況を把握した結果、中野町を中心に東西200m、南北300mの広さをもつ集落址と推定されるに至った。

1979年になって、民間の宅地造成が相次いで行なわれるようになつた。こうした調査原因にもとづいて、^(注2) 1979年3月から8月に大規模な調査を実施した。この結果、弥生時代中期の堅穴住居址等が検出され、集落の範囲を知る貴重な資料を提供した。その後、1979年12月から3月にかけては、段丘東端にあたる箇所で調査する機会を得た。この調査では、弥生時代中期の土器、サヌカイト製石器、剝片等を伴った溝を検出し、集落の範囲を着実に把握する結果となつた。更に、平安時代から室町時代に至る遺構を確認し、遺跡が弥生時代中期から中世に至る複合遺跡であることが判明した。

1980年12月から1981年3月にかけて、国道170号線西側において初めて調査することとなり、^(注3) 6世紀後半から7世紀中頃に至る遺物を伴う遺構を確認した。同年7月には、東高野街道沿いで、大阪府教育委員会によって調査が実施された。この調査では弥生時代の遺構が検出されるとともに、縄文時代後期に属する土器が、周辺に同時期の遺構の存在を推測させる結果となつた。

その後1981年から1982年にかけて、国道170号線歩道設置に伴い、延長800mにおよぶ調査^(注5) が大阪府教育委員会によって実施された。この調査では、奈良時代の掘立柱建物等が検出された。なかでも注目すべき点は、6世紀前半の築造と考えられる新堂古墳の発見である。周溝内から埴輪、土師器、須恵器が出土した。この結果、周辺地域に同時期の古墳が存在することが想定されるとともに、平地における古墳のあり方を検討する資料を提供したと言える。

1981年から1982年にかけて、富田林市教育委員会が一連の調査を実施した。1979年3月から8月に実施した南側にあたり、調査の結果、堅穴住居址を3棟検出するとともに、溝内に大量のサヌカイト剝片及び石器が出土した。このことは、中野遺跡が、北方約2kmに所在する喜志遺跡と同様に、石器の生産にかかわる集落址であることを裏付ける結果となつた。また、^(注6) 西側においては、6世紀後半の遺物を含む南北方向の大溝を検出した。この大溝から以西では

古墳時代後期の掘立柱建物群を検出した。この一連の調査で、弥生時代集落の南西隅を把握することができ、古墳時代集落が遺跡の西方に広がることが判明した。

1982年10月には、1979年12月から1980年3月にかけて調査した南側で、約3mの比高差をもつ低位段丘で調査を実施した。中世の溝、土壙を検出したのをはじめ、東西方向に延びる幅3mの弥生時代中期の一括した土器を含むV字溝を検出した。また、同年12月から翌年1月にかけて実施した遺跡の北限と推定される中野町2丁目の調査では、幅約7mを測る東西大溝を検出した。この調査では大溝以北では弥生時代の遺構は検出されず、中世の建物跡が検出された。この結果から判断して、この大溝は弥生集落を区画する北限の環濠的性格を持つものであると推測される。

1983年には、上記の北側延長部を調査する機会を得た。調査の結果、中世の溝、建物跡を検出し、中野遺跡が北に広がることが判明した。

(注1) 北野耕平『富田林市史』第4巻史料編1(1972年)

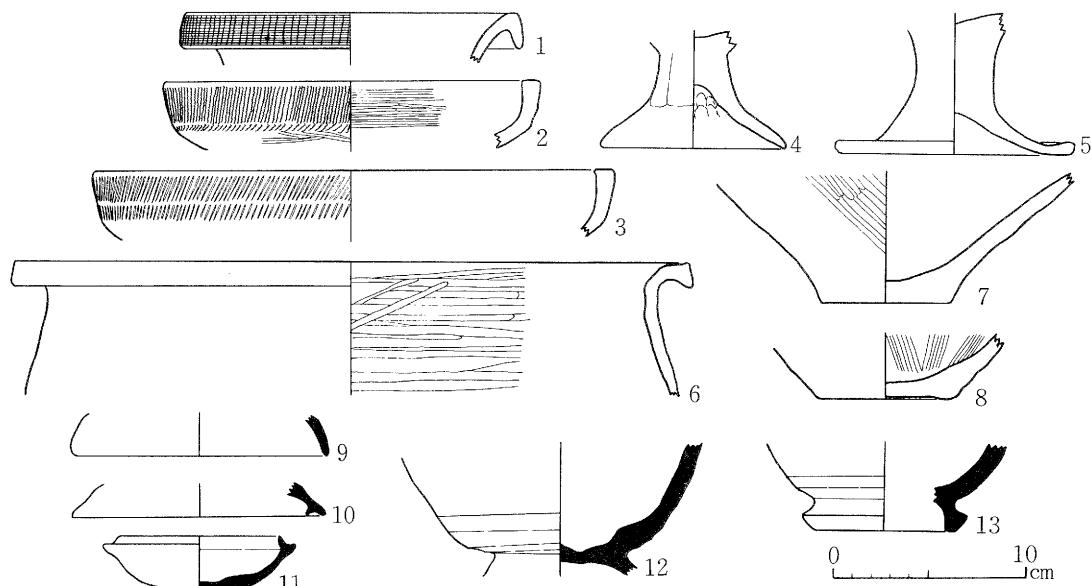
(注2) 中村浩編著『中野遺跡発掘調査報告書』富田林市教育委員会(1979年)

(注3) 富田林市教育委員会『中野遺跡発掘調査概要II』(1981年)

(注4) 尾上実『中野遺跡発掘調査概要』(『節。香。仙』大阪府文化財調査速報第32号 1981年)

(注5) 玉井功『中野遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会(1982年)

(注6) 富田林市教育委員会『中野遺跡発掘調査概要III』(1982年)



挿図3 1982年10月調査区試掘時出土土器

III 調査の成果

1. 調査に至る経過

富田林市若松町4丁目569番地先において個人住宅を建設するため、事前に埋蔵文化財の包蔵地の確認の際に、当該地は中野遺跡に隣接するため、発掘届出書の提出を求めた。昭和57年7月27日付けで発掘届出書を受理した。

これに基づいて申請者と協議を行ない、地下の状況を知るため昭和57年8月23日に試掘調査を実施することになった。

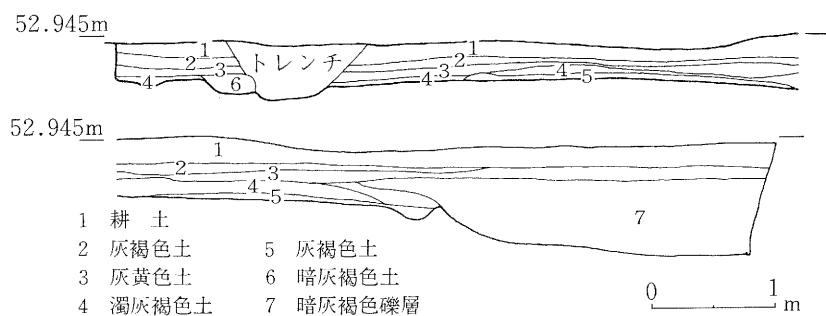
予定地内に南北方向のトレンチを3箇所、東西方向に3箇所設けた結果、東西方向のV字溝と南北方向の溝を確認した。V字溝内からは弥生土器が出土した。

この調査結果から、本格的な調査が必要であると判断し、再度申請者と協議を行なった。

工法等を検討した結果、地下遺構に影響を及ぼす部分について調査を実施することとし、昭和57年10月4日から調査を開始した。

2. 層序

基本的な層序は、上から順に耕土(約15cm)、床土(約10cm)、灰黄色土(約7cm)、濁灰褐色土(約10cm)の4層となる。北西部では、床土直下が地山となり、北から南にかけて序々に灰黄色土と濁灰褐色土が厚く堆積する。地山は黄灰色粘土で、ゆるやかに南東方向に傾斜している。



插図4 東側断面図

3. 遺構

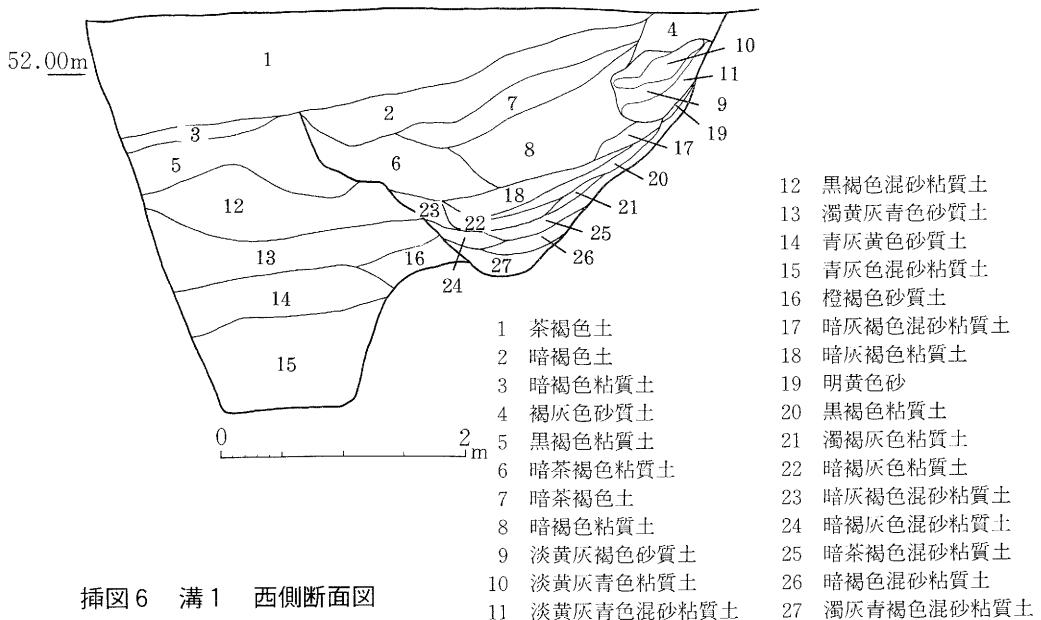
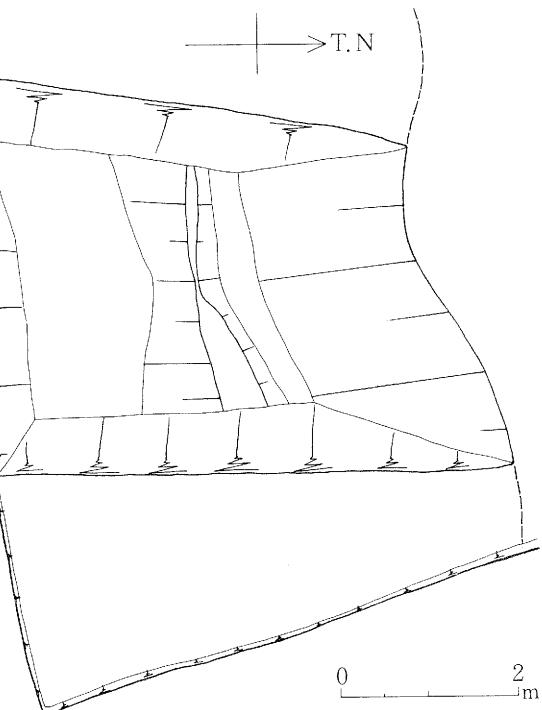
溝 1

調査区南半部で検出したほぼ東西方向の溝である。全体の幅は調査範囲外に一部あるため不明である。幅 5.3 m 分を検出した。また、工事の都合上、長さ約 4 m 分を掘り下げたにとどまった。深さは約 2 m を測る。溝内堆積は大きく分けて 6 層になる。第 1 層及び第 2 層（厚さ約 1 m）中には、6 世紀末から 7 世紀初頭の遺物を含む。第 3 層（厚さ 50 cm）・第 4 層（厚さ 35 cm）・第 5 層（厚さ 25 cm）・第 6 層（厚さ 20 cm）中からは弥生土器およびサヌカイト製石器が出土している。いずれも弥生中期に限定される。なかでも第 4 層中から大量に出土している。

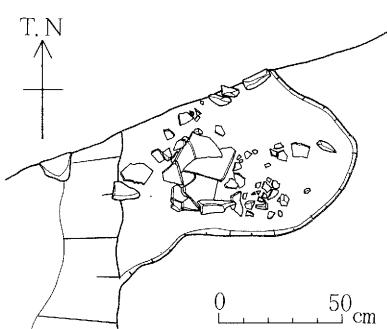
弥生時代中期には断面 V 字状を呈する溝

插図 5 溝 1 平面図

としての機能をもち、埋没後古墳時代後期には幅を広く保ちながら東流していたと思われる。



溝 2



插図7 溝2 遺物出土状況図

調査区東半部で検出した南北方向の溝である。長さ約10m分を検出した。幅3～6mを測る。北側にラッパ状に広がる。深さは20～50cmを測る。南端部底では3条に細く分岐する。埋土は灰褐色土である。遺物にはサヌカイト片、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦の他に鉄釘がある。

溝 3

調査区北東部で検出した溝である。長さ約4.2m分を検出した。幅24cm、深さ2～5cmを測る。

北側で直角に西方向に曲がる。埋土はやや砂っぽい灰褐色土で、土師質及び瓦質土器の他に青磁、瓦を含む。

溝 4

調査区南端部中央付近で検出した溝である。長さ約6m、幅20cm、深さ5cmを測る。東西方向に走り、西側で直角に南に曲がる。埋土は溝3と同じく灰褐色土である。サヌカイト片、須恵器、土師質及び瓦質土器が出土する。

井戸 1

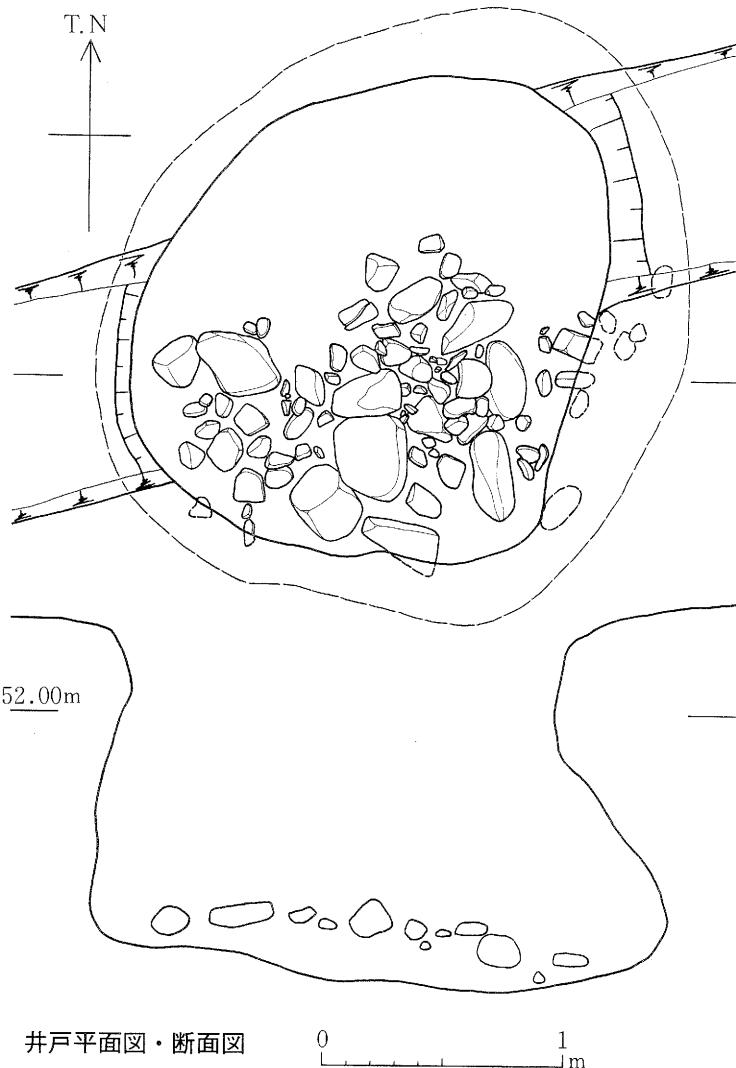
調査区北東部溝2の底面で検出した井戸状遺構である。ほぼ円形で、直径2m、深さ1.5mを測る。下ぶくれの状態に底部側壁がえぐられている。灰青黄色のシルト質の粘質土に混じって5～30cmの円礫が底面近くに広がる。一部の礫の表面には火を受けた痕跡が認められる。遺物には須恵質土器と瓦質土器がある。

土壙 1

調査区西半部で検出した。南北2m、東西1.1mの長方形を呈している。深さ70cmを測る。埋土は6層に分けられ、上から順に、砂質っぽい灰褐色土(厚さ20cm)、灰褐色土が混じる黄灰色粘質土(厚さ10cm)、灰褐色混砂礫土(厚さ10cm)、黄灰色混礫砂質土(厚さ10～15cm)、ブロック状に黄茶色砂質土が混じる灰青色混礫砂質土(厚さ12cm)、炭を含む暗灰褐色混砂粘質土(厚さ3cm)となる。下層の礫混じりの砂質土から瓦質土器が出土している。他の遺物としてはサヌカイト片、弥生土器、須恵器、土師質土器、陶器、瓦、焼土塊、炭片がある。

土壙 2

土壙1の西側に位置する。南北1.7m、深さ7cmを測る。東西幅は土壙3によって切られているため不明である。ブロック状に黄色砂が混じる暗灰褐色混砂礫土中に5～15cmの礫とともに、サヌカイト片、弥生土器、須恵器、土師質及び瓦質土器、瓦器、瓦を伴う。



挿図 8 井戸平面図・断面図

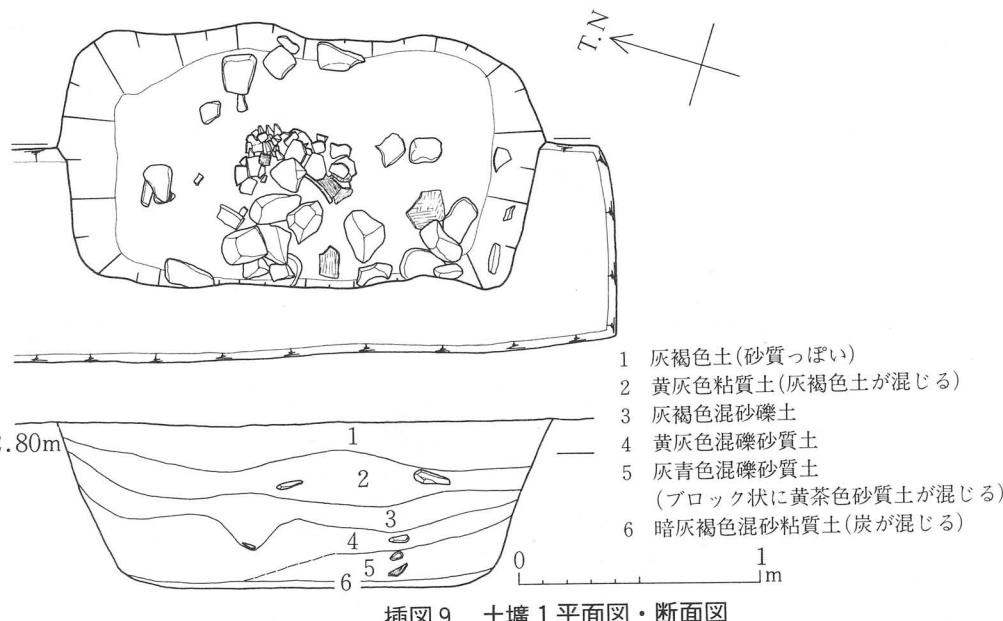
0 1 m

土壤 3

土壤2の西端を切る南北1.7m、東西1.3mの土壤である。深さ28cmを測る。埋土は砂っぽい灰褐色土で、10~30cmの礫に混じってサヌカイト片、弥生土器、土師質及び瓦質土器、瓦器の他瓦、焼土塊、鉄片が出土する。

土壤 4

調査区南東隅で検出した。大半が調査区外にあるため規模等は不明である。暗灰褐色礫層の埋土にサヌカイト片、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、瓦、鉄釘を含む。



插図9 土壌1平面図・断面図

土壤5

土壤1の南にあって、その大半は試掘時のトレンチと土壤1によって欠損している。東西幅1.2 m、深さ2 cmを測る。埋土は灰褐色混砂粘質土である。弥生土器、土師器、瓦器が出土している。

土壤6

土壤2の北側にあって、長軸を東西方向にもつ、やや不変的な長方形を呈している。底面には3箇所のくぼみがある。南北1 m、東西2.1 m、深さ47 cmを測る。埋土は砂っぽい灰黄褐色土で、底面くぼみには濁黄灰色粘土及び黄褐色土が混じる黒褐色土が堆積する。遺物にはサヌカイト片、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、焼土塊がある。

土壤7

調査区ほぼ中央部土壤1の東側に位置する。一边が2.4 mのほぼ正方形を呈している。断面は皿状で、深さ15 cmを測る。灰褐色土の埋土である。2 cmから5 cmの礫に混じって土師器、須恵器、瓦器、磁器、焼土塊が出土している。

土壤8

調査区中央部南端にあって、大半が南壁内にあるため形状等は不明である。深さは約30 cmを測る。砂礫混じりの暗灰褐色土中に、土師器、須恵器、瓦器を伴う。

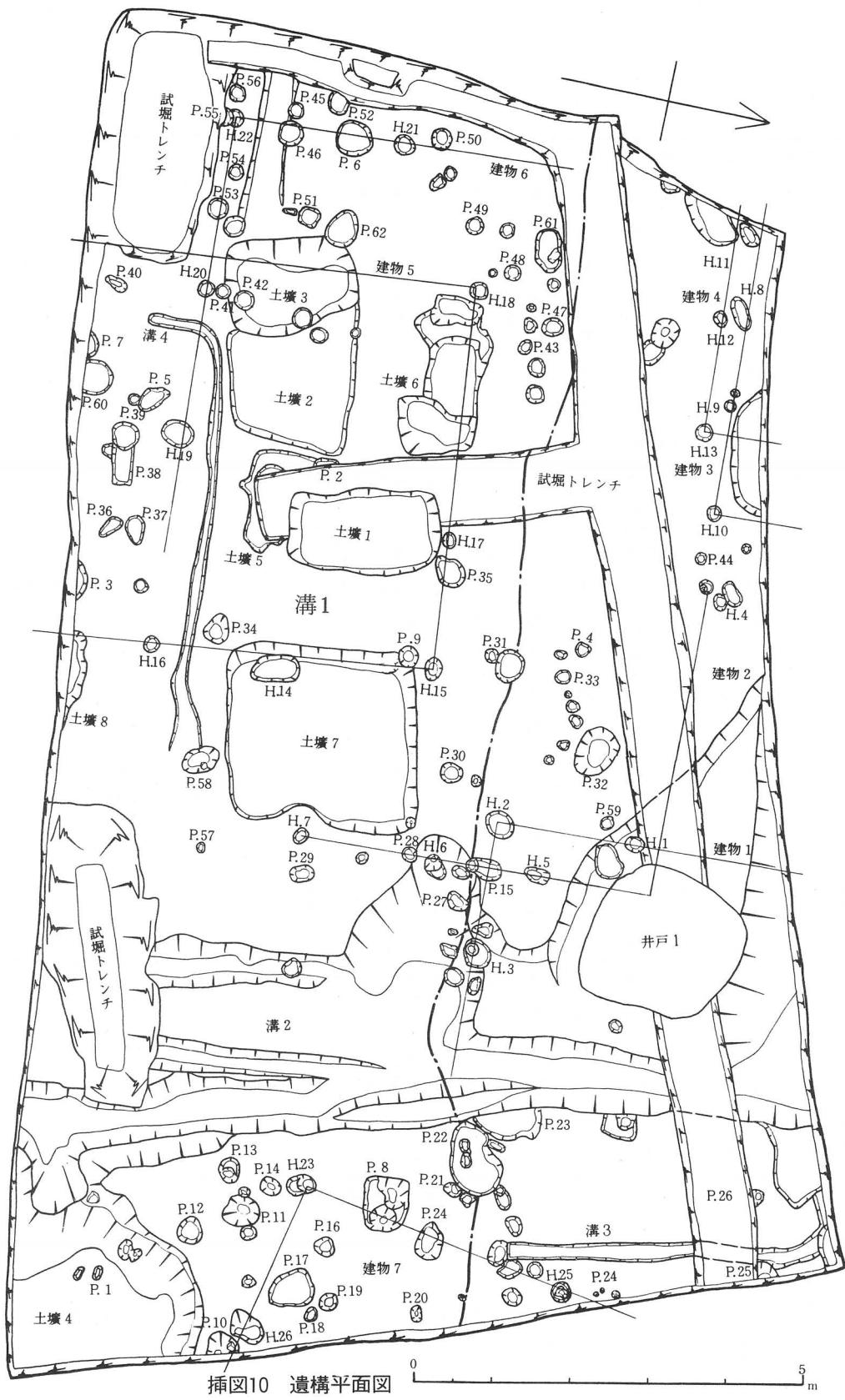
単位: cm

建物	ピット番号	平面形	規 模	深さ	土 色	備 考	柱間寸法
1	H. 1	円 形	74 × 24	22	暗灰褐色砂質土		170~180
	H. 2	円 形	40 × 34	25	"	石 有 り	
	H. 3	円 形	34 × 36	9	"	底 部 2 段	
2	H. 4	円 形	20 × 16	8	灰青褐色弱粘質土	底 部 2 段	130~170
	H. 5	楕円形	32 × 20	23			
	H. 6	円 形	30 × 30	13	灰褐色土(砂っぽい)	底 部 2 段	
	H. 7	円 形	20 × 20	7	灰褐色土		
3	H. 8	楕円形	20 × 45	5	灰褐色弱粘質土		120~140
	H. 9	円 形	16 × 16	5	灰青褐色弱粘質土		
	H. 10	円 形	20 × 20	3	"		
4	H. 11	不整形	80 × 60	12	灰青褐色粘質土		110~150
	H. 12	円 形	20 × 20	4	灰青褐色弱粘質土		
	H. 13	円 形	22 × 22	2	灰褐色土		
5	H. 14	楕円形	65 × 35	21	灰褐色土(砂っぽい)	土 壤 5 と重複	130~200
	H. 15	円 形	24 × 30	26	"		
	H. 16	円 形	20 × 20	4	灰褐色弱粘質土		
	H. 17	円 形	20 × 20	6	濁灰褐色土(砂っぽい)		
						土 壤 6 と重複	
	H. 18	円 形	24 × 24	20	濁灰褐色土		
						土 壤 3 と重複	
6	H. 19	円 形	40 × 35	25	濁灰褐色土(砂礫まじり)		190~220
	H. 20	円 形	24 × 24	21	灰褐色土		
	H. 21	円 形	26 × 26	11	暗灰褐色土		
	H. 22	円 形	20 × 24	10	灰褐色土(炭まじり)		
7	H. 23	楕円形	40 × 30	26	灰褐色土		170~200
	H. 24	楕円形	35 × 50	32	灰褐色弱粘質土(円礫含む)	石 有 り	
	H. 25	円 形	25 × 28	8	灰褐色土(砂っぽい)	底 部 に石有り	
	H. 26	不整形	40 × 40	10	灰褐色土		

表 1 建物一覧表

建物

数多く検出したピット群の中で、特に東西及び南北棟を中心に建物の復元を検討した結果、7棟の建物を復元した。規模等については表1を参照願いたい。



挿図10 遺構平面図

IV 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物には、容器類として弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器が、石器類として石鏃、石槍、不定形石器、磨製石劍、石庖丁、磨製石斧、砥石、敲き石などがある。これらの他に、サヌカイトの剥片、石核なども多量に出土している。土製品としては紡錘車、瓦がある。また、これらの他に、鉄釘、桃の種子も少量であるが出土している。

今回の調査で出土した遺物の大半は溝1からのものである。各遺構からの遺物の出土状況は表2・に示した通りである。点数については明確に出来なかった。

弥生土器は出土量が最も多く、それらはすべて中期に属するものである。土師器と須恵器の大半は6世紀末～7世紀にかけてのものであるが、中世のものもかなり含まれている。そこで、中世のものと明確に区別出来るものについては、便宜的に土師質土器、須恵質土器と区別して別の欄を設けた。この他に、土師器には布留式のものが2点、須恵器には奈良時代のものもわずかであるが出土している。瓦器、瓦質土器はともに炭素を吸着させた灰黒色の土器であるが瓦器については皿、椀など、緻密な胎土で製作された小型の器種に限定した。砂粒を多量に含む粗い胎土で製作された大型の器種については瓦質土器として区別した。この他、須恵質土器としたものの中にも瓦質土器の可能性のあるものがみられる。すなわち、須恵器としては軟質のものであるが、炭素の吸着のまったくみられないものがそれである。瓦質土器の炭素の吸着状態の悪いもの、また、剥離したものと判断する方が適當かもしれないが、今回は須恵質土器として記述した。石器としたものの大半は、サヌカイト製の製品及び、剥片と石核である。

以下、土器類、石器類、土製品の順に、代表的な遺構ごとに報告する。

1. 土 器 類

今回の調査で最も多く出土した遺物である。なかでも、弥生土器が最も多い。

ここでは、弥生土器、土師器、須恵器の出土した溝1、中世の遺物が出土した溝2、土壙1について概観したあと、その他の遺構、すなわち、土壙2～5、井戸1、建物4、5、ピット1～8、36出土のものを簡単に記述する。

なお、記述にあたって弥生土器の分類は『池上遺跡』^(注1)に揃えたが、広口壺形土器については次のような分類を行う。

遺構	弥生土器	土師器	須恵器	瓦器	土師質土器	石器	瓦質土器	石器	その他
溝 1	○	○	○				○	○	紡錘車
2	○	○	○	○	○	○	○	○	瓦、鉄釘、焼土塊
3									青磁、瓦
4									
土壤 1	○		○	○	○		○	○	陶器、瓦、焼土塊、炭
2	○		○	○	○		○	○	瓦
3	○		○	○	○		○	○	瓦、焼土塊、鉄片
4	○	○	○	○	○		○	○	瓦、鉄釘
5	○	○	○	○					
6	○	○	○	○			○	○	焼土塊
7		○	○	○				○	磁器
8		○	○	○	○				
井戸 1						○	○		瓦、桃の種子
建物 1 (H. 1)		○	○						
(H. 2)			○						焼土塊
(H. 3)									
建物 4 (H. 11)				○	○		○		瓦
建物 5 (H. 14)			○		○		○	○	瓦、鉄釘、焼土塊
(H. 15)	○	○							
(H. 16)		○							
(H. 17)		○							
(H. 18)	○	○							
建物 6 (H. 19)	○	○	○	○					
(H. 20)		○	○	○					
(H. 21)		○							
(H. 22)	○								
建物 7 (H. 23)	○								
(H. 24)	○								
(H. 26)	○								
ピット 1		○							
2		○							
3		○							
4									
5		○							
6	○	○			○	○	○	○	
7		○				○	○	○	
8	○	○			○	○	○	○	
9	○	○			○	○	○	○	
10		○			○				
11		○							
12		○							
13		○							
14		○							
15									
16		○							
17	○	○							
18	○								

表 2 各遺構出土遺物一覧

遺構	弥生土器	土師器	須恵器	瓦器	土師質土器	須恵質土器	瓦質土器	瓦	その他
ピット 19	○								
20	○								
21		○							
22			○						
23		○		○					
24		○		○					
25		○		○					
26								○	
27					○				
28		○		○					
29		○		○					
30		○		○				○	
31								○	
32		○		○				○	
33		○		○				○	
34		○		○				○	
35	○								
36		○							
37		○		○					
38	○			○				○	鉄片
39		○		○					
40		○		○					
41		○		○				○	
42									
43		○		○					焼土塊
44									
45	○			○					
46	○			○					
47	○			○					
48	○			○					焼土塊
49	○			○					
50	○			○					
51									
52		○		○					焼土塊
53		○		○					
54	○			○					
55	○			○					
56	○			○					
57									
58									
59		○		○					
60		○		○					
61	○			○					
62									

表3 各遺構出土遺物一覧

広口壺形土器A 外反して開く口縁部をもつもの

- 1類 下方に拡張するもの
- 2類 上方に拡張するもの
- 3類 上・下に拡張するもの
- 4類 ほとんど拡張しないもの

広口壺形土器B 外反し、曲折して立ちあがる口縁部をもつもの

- 1類 上・下に同じ程度、拡張するもの
- 2類 上方に大きく、下方に少し拡張するもの
- 3類 上方にのみ大きく拡張するもの

広口壺形土器C 外反して開く口縁部をもつ小型で無文のもの

- 1類 下方に拡張するもの
- 2類 上方に拡張するもの
- 3類 上・下に拡張するもの
- 4類 ほとんど拡張しないもの

溝1(挿図11~20)

溝1には27種類の層名が与えられているが、大きく9層に分かれる。このうち、1~6層で遺物が出土している。1、2層からは弥生土器、土師器、須恵器が、3~6層には弥生土器が出土している。各層のうち、遺物の最も多く認められるのは第4層である。以下、第6層から順に記述する。なお、同一個体片が隣合う層にわたって出土する例も若干みられる。

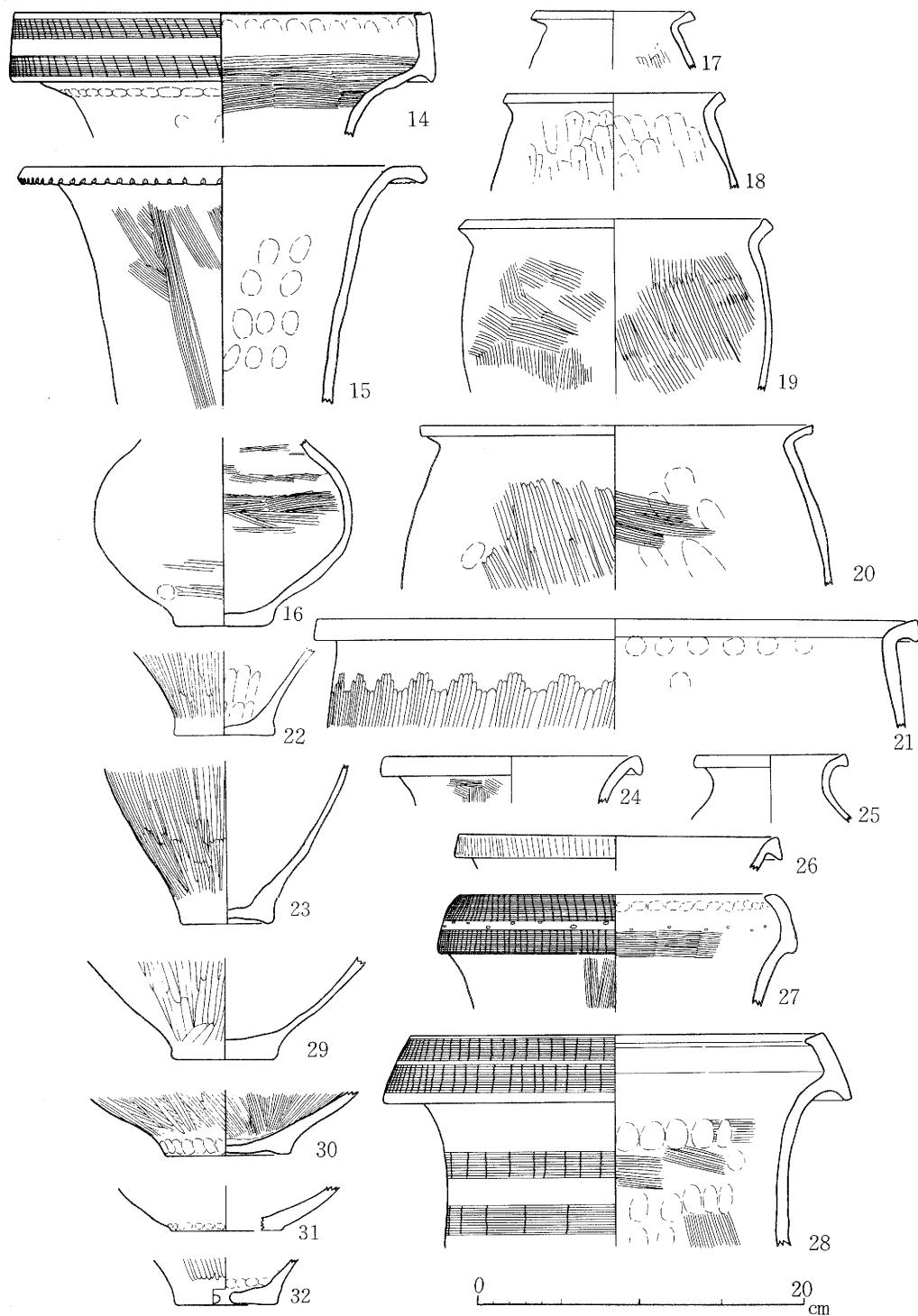
第6層出土土器(14)~(23)

弥生土器だけで、広口壺形土器(A・B)、甕形土器で構成される。全部で13点と出土量は少ない。そのうち、器種分類の可能なものは8点だけである。生駒西麓産の土器(17)(22)(23)は4点ある。

広口壺形土器A(15) 1類が1点だけ出土している。長い筒状の頸部をもち、口縁端部の拡張は少ない。本来は飾られる土器であるが、口縁部下端に刻み目が施されているだけで、長い頸部にも文様は施されていない。(16)はこの長頸の広口壺形土器に伴う体部と思われる。

広口壺形土器B(14) 2類が1点だけある。口縁部は直立気味である。

甕形土器(17)~(21) 5点出土している。口径9.4~36.6cmを測る。口縁端部はすべて面をもつが、最も大きく拡張するものでも(21)程度で、いずれにしても大きく拡張するものはない。体部の調整は各々違う技法で製作されている。器形の大・小に関わりなく、すべて外面に煤が付着している。



插図11 溝1(第6層・第5層)出土土器

底部 (22) (23) 4点ある。そのうちの3点が生駒西麓産である。外面の調整はすべてヘラミガキである。(23)を除いて、他の外面には煤が付着している。

第5層出土土器 (24)～(48)

弥生土器だけで、広口壺形土器(A・B・C)、鉢形土器(A・B)、高杯形土器(A・B)、甕形土器、甕用蓋形土器、底部穿孔土器で構成される。器種分類の可能なものは39点で、そのうち約6割が甕形土器、約2割が壺形土器である。生駒西麓産の土器(28) (45)～(48)は全体の約1割である。

広口壺形土器A (26) 1類と4類で計3点ある。図示したもの(26)を除いて、他は4類で、端部に文様は施されていない。(26)だけが簾状文で飾られている。

広口壺形土器B (27) (28) 2類が2点ある。(27)の口縁部は内彎気味で、下方への突出も少ない。生駒西麓産の(28)は内傾する口縁部をもち、下方への突出が(27)に比べて大きい。頸部はともに筒状である。2点とも文様が施されているが、(27)は口縁部に、(28)は口縁部と頸部にみられる。

広口壺形土器C (24) (25) 1類と3類が各々1点づつある。

広口壺形土器の頸部片の中には櫛描直線文で飾られるものもみられる。

鉢形土器A 2点ある。ともに無文である。そのうちの1点の体部外面は横方向のヘラミガキが施されている。他の1点の外面には煤が付着している。

鉢形土器A 1点ある。無文である。

高杯形土器B 2点ある。そのうちの1点は生駒西麓産。2点とも無文で、生駒西麓産のものは体部外面に横方向のヘラミガキが、他の1点はヨコナデで調整されている。

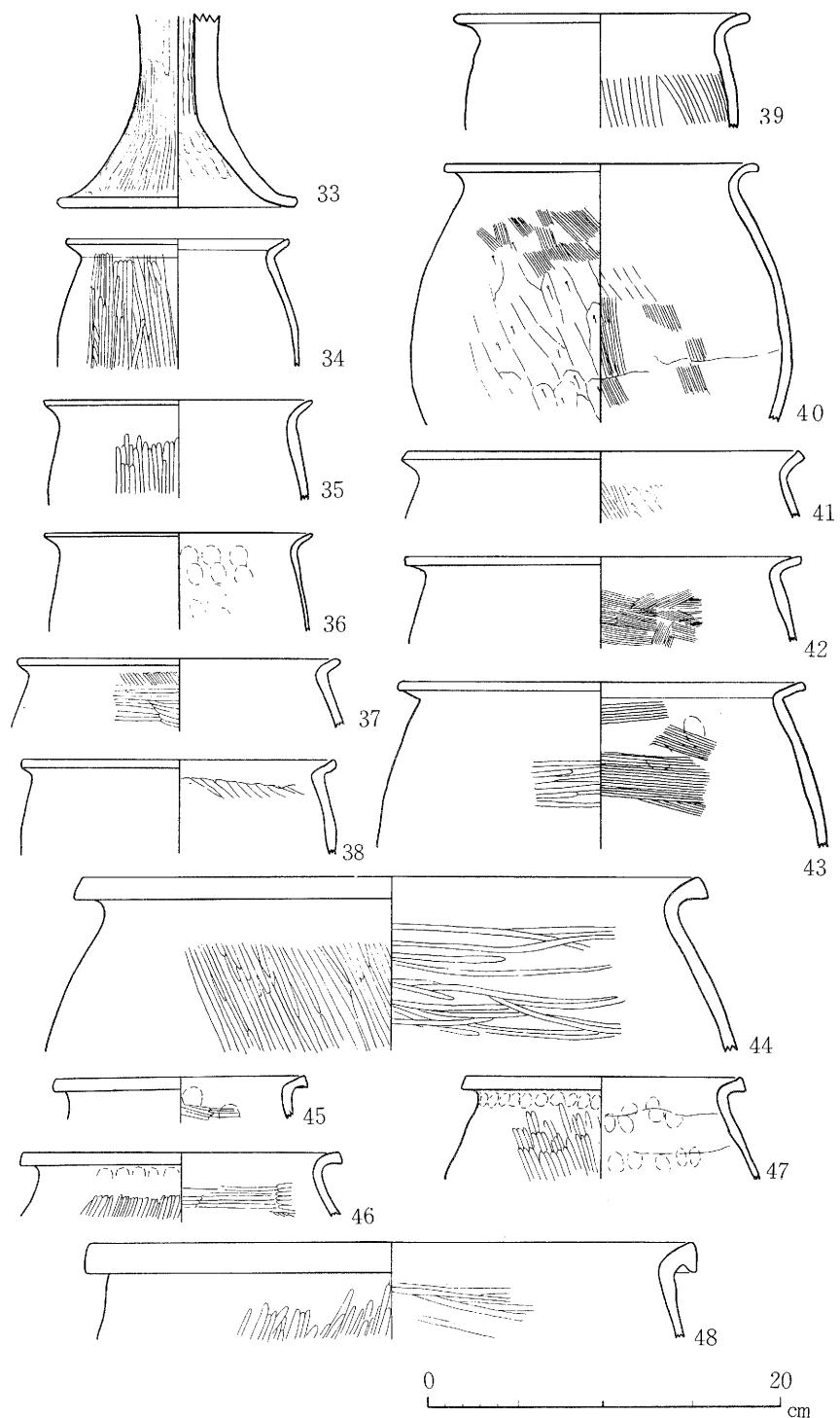
高杯形土器B 1点ある。口縁部内面の凸帯は断面四角形を呈す。

高杯形土器の脚柱部残存のものは(33)だけである。

甕形土器 (34)～(48) 23点ある。そのうちの4点は生駒西麓産(45)～(48)である。口縁部は「く」の字に外反するものが多い。口縁端部は丸くおさまるものと面をもつものがある。最も大きく拡張するものでも(44)程度で、大きく拡張するものはない。体部の調整もバラエティーに富んでいる。外面に煤の付着するものは(34) (36) (39) (40) (44)がある。生駒西麓産の甕形土器は丸みをもって外反する。小型のものは口縁端部に面をもち、体部は大きく張りだす。大型のものは口縁端部が下方に拡張する。体部の調整は内外面ともにヘラミガキが施されているものが多い。外面に煤の付着するものには(46) (47)がある。

甕用蓋形土器 1点ある。大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともにヨコナデが施されている。口縁部内面には煤が付着している。

底部穿孔土器 (32) 1点ある。



挿図12 溝1(第5層)出土土器

底部 底径5.0～7.9cmを測る。厚ぼったい底部もあるが、大半は薄い。外面の調整にはヘラミガキ、ナデが、内面には刷毛目、ナデがみられる。

第5層出土土器の文様は櫛描直線文が多い。簾状文もみられるが、その大半が生駒西麓産のものである。櫛描直線文は波状文と組み合わさる例がある。簾状文は扇形文と組み合わさったり、刺突文と組み合わさる例がある。

第4層出土土器(49)～(108)

弥生土器だけで、広口壺形土器(A・B・C)、細頸壺形土器、太頸壺形土器、無頸壺形土器A、壺用蓋形土器、鉢形土器(A・B・C)、高杯形土器B、甕形土器、把手などで構成される。

器種分類の可能なものは100点で、そのうち、約4割が壺形土器、約3割が甕形土器、約2割が鉢形土器である。生駒西麓産の土器(60)～(67)(81)(82)(84)(85)(100)～(102)(107)(108)は全体の約3割である。

広口壺形土器A (49)～(55)(60)～(64) 22点ある。1類が16点、2類が2点、4類が4点で構成される。そのうち、生駒西麓産(60)～(64)は7点あり、すべて1類である。口縁部の施文状況は4類に無文のものが多く、刻み目を施すものが1例(49)みられるだけである。2類は刻み目、波状文で飾られている。1類には斜格子文、簾状文、刺突文、波状文が、内面には円形浮文が付加される例もある。生駒西麓産のものは簾状文、列点文などで飾られている。頸部は櫛描直線文、簾状文、体部は簾状文で飾られている。これらのほかに、口縁部上・下端に刻み目、内面に円形浮文が付加される例(64)もある。

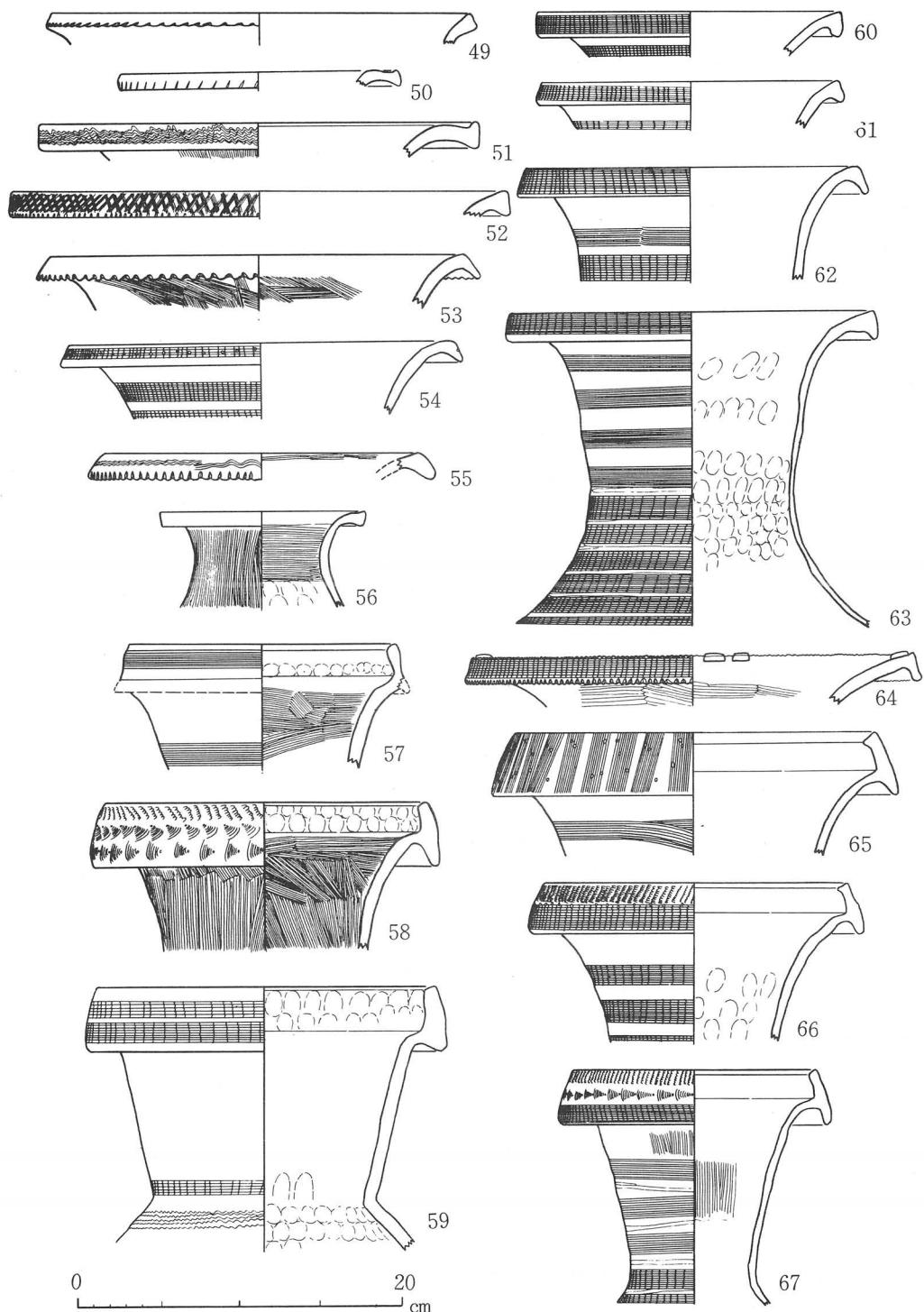
広口壺形土器B (57)～(59)(65)～(67) 7点ある。1類が2点、2類が4点、類別不明が1点で構成されている。そのうち、生駒西麓産(65)～(67)は4点で、1類、2類ともある。ただし、生駒西麓産の2類は1類に近い。口縁部はすべて内傾する。口縁部の施文状況は櫛描直線文、列点文と扇形文、簾状文などがみられる。頸部は下位に口縁部と同じ文様で飾られる、例(57)(59)と無文の例(58)がある。(59)の体部は稚拙な波状文で飾られている。生駒西麓産のものは縦線文と刺突文、列点文と刺突文と簾状文、列点文と扇形文と簾状文とバラエティーに富む。頸部には広口壺形土器Aと同様に上位から櫛描直線文と簾状文の施文が認められる。広口壺形土器Bの中で文様帶間研磨線がみられるのは生駒西麓産のものだけである。

広口壺形土器C (56) 3類が1点だけある。

細頸壺形土器 (68)(69) 3点ある。生駒西麓産のものはない。口縁端部は丸くおさまるものと内側に丸く肥厚するものがある。無文のもの(68)、波状文と櫛描直線文で飾るもの、凹線文で飾るもの(69)がある。

太頸壺形土器 1点だけある。内彎する口縁部は端部で丸く内側に肥厚する。

無頸壺形土器A (73)(74) 2点ある。直口で大きく開く口縁部をもつ。生駒西麓産のもの



挿図13 溝1(第4層)出土土器

はない。

壺用蓋形土器(70)～(72) 3点ある。口縁部のあまり広がらないものと大きく広がるものがある。(72)は生駒西麓産である。

鉢形土器A(75)(76) 5点ある。口縁部は内弯するものと開くものがある。生駒西麓産のものはない。文様で飾られているのは(76)だけである。

鉢形土器B(81) 3点ある。2点は生駒西麓産で、口縁部に簾状文、列点文、体部は簾状文で飾られている。他1点は無文である。

鉢形土器C(77)～(80)(82) 5点ある。生駒西麓産(82)は1点だけである。口縁部は下外方に小さく拡張するものが多いが、(80)のように大きく拡張するものもある。(80)以外は口縁部を飾らず、体部だけに施文がみられる。文様は櫛描直線文、簾状文がある。(77)は無文である。生駒西麓産のものも口縁部の拡張がそれほど大きくなかったが、体部とともに簾状文で飾られている。文様帶間研磨線は生駒西麓産以外のものにもみとめられる。

鉢形土器の中には上述のもの以外に台部の付くもの(85)～(88)がある。(85)は生駒西麓産である。鉢部と台部の接合は円板充填法による。

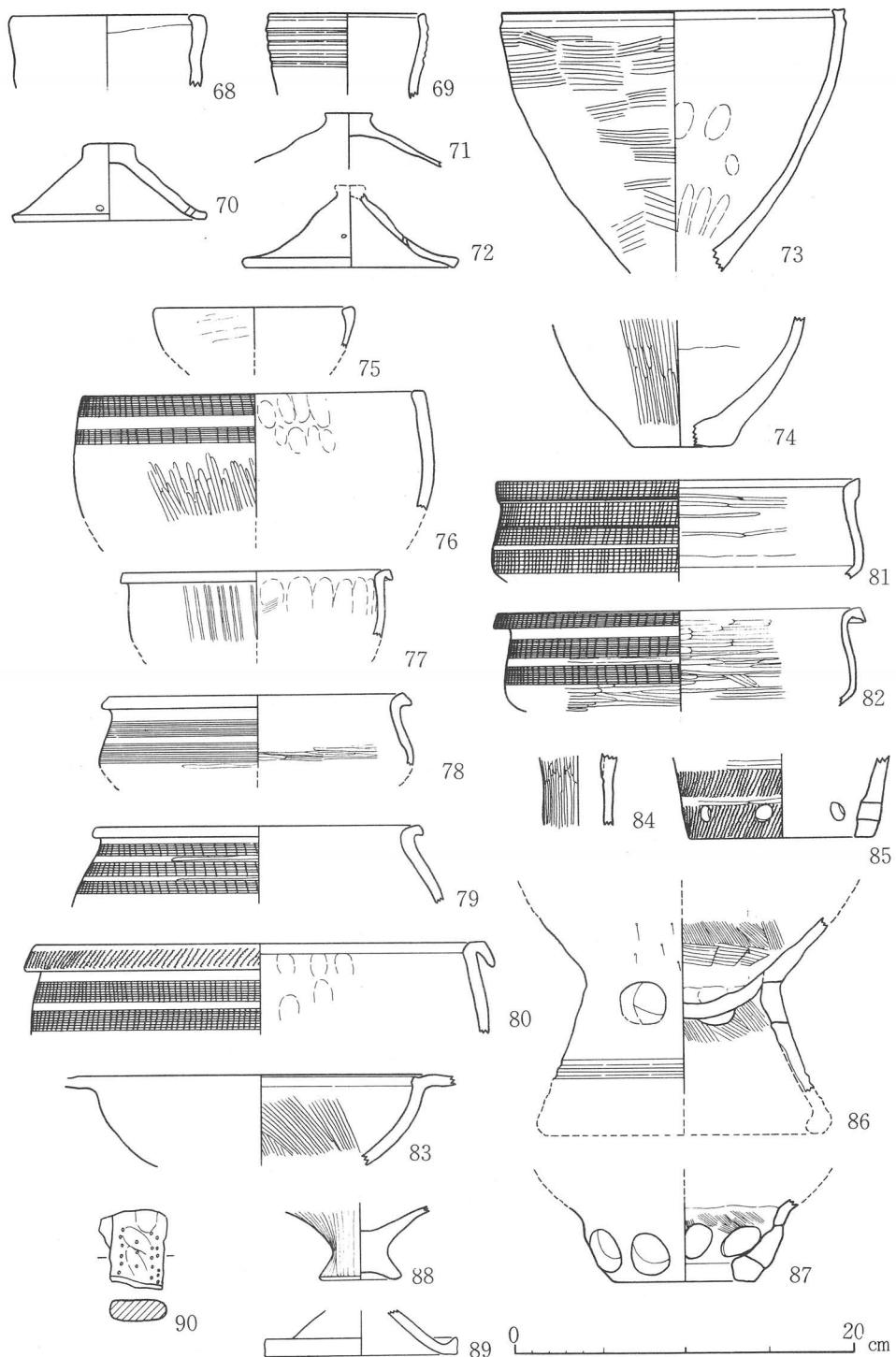
高杯形土器B(83) 3点ある。生駒西麓産のものはない。口縁部内端の凸帯は断面四角形を呈す。残存状態が悪く、口縁部残存のものは1点しかない。それによると、口縁端部は垂下しない。また、口縁部内外面には煤が付着している。

高杯形土器の台脚部(84)(89)は4点ある。生駒西麓産(84)は1点だけである。脚柱部は中空である。杯部と台脚部の接合は円板充填法による。裾部は上方に拡張する。

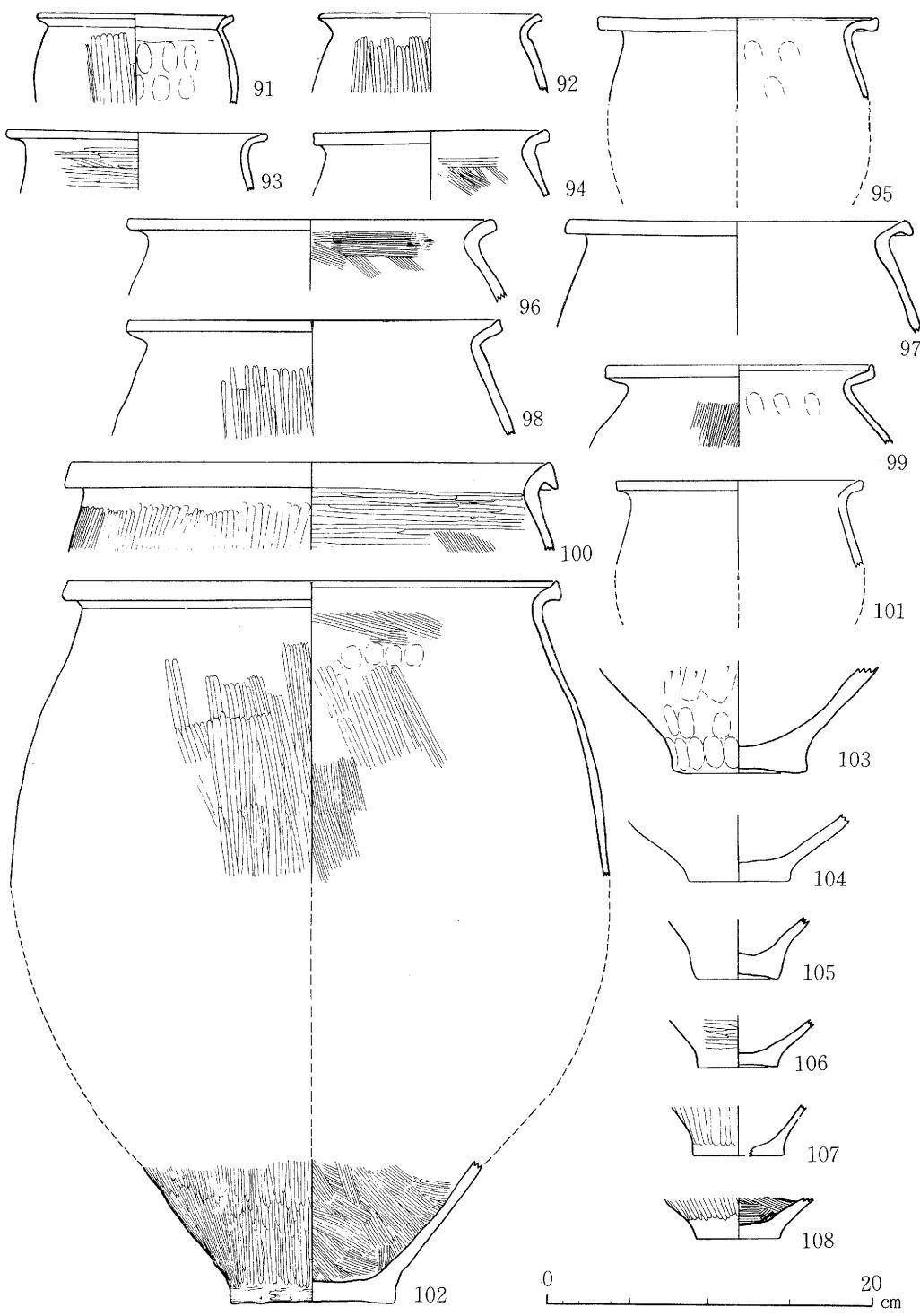
甕形土器(91)～(102) 29点ある。生駒西麓産は(100)～(102)は7点ある。口縁部は「く」の字に外反するものが多い。口縁端部は面をもつもの、下方に拡張するもの、上方に拡張するものがある。ただし、拡張の度合いはそれほど大きくなかった。体部は張り出すものが多くなっている。体部の調整は外面ヘラミガキ、内面ナデという組み合わせが最も多い。外面に煤の付着するものには(91)(92)(94)～(96)がある。生駒西麓産の甕形土器は口縁部が「く」の字に外反するものの、ほぼ水平に外折するもの、丸く外反するものがある。口縁端部は下方に拡張するもの、上方へわずかに拡張するものがある。体部の調整はヘラミガキが多い。(100)～(102)とも外面に煤が付着する。

底部(103)～(108) 底径 4.1～10.2cmを測る。外面の調整はヘラミガキが多い。外底面の調整はナデが多いが、ヘラミガキがおよぶ例も多い。(103)は第4層出土底部の中で唯一のヘラケズリの例で外底面にもヘラケズリが施されている。内面はナデが多いが刷毛目もみられる。

第4層出土土器の文様は櫛描直線文と簾状文が多い。櫛描直線文は波状文や扇形文と組み合わされる例もある。簾状文も波状文、列点文と組み合わされる例もある。この他、流水文の施



插図14 溝1(第4層)出土土器



挿図15 溝1(第4層)出土土器

された破片(挿図17-1)もある。

生駒西麓産のものも櫛描直線文と簾状文が多い。列点文、扇形文、円形浮文も組み合わせて飾られる。

第3層出土土器(129)～(133)

弥生土器だけで、広口壺形土器(A・B・C)、細頸壺形土器、鉢形土器(A・B・C)、高杯形土器(A・B)、甕形土器、甕用蓋形土器、ミニチュア土器で構成される。器種分類の可能なものは50点ある。そのうち、約4割が壺形土器、約3割が甕形土器、約1割が鉢形土器である。生駒西麓産の土器(114)(115)(117)(118)(129)～(133)は全体の約3割である。

広口壺形土器A(109)(110)(112)(114)(115) 12点ある。そのうち、生駒西麓産(114)(115)は5点ある。4類はなく、1類が多い。口縁部の施文状況は、1類の大半が簾状文で飾られている。他に下端に刻み目が施される例もある。また、簾状文に刺突文を加えたり、口縁部内面に円形浮文が付加されるものも認められる。2類には波状文を施し、口縁部内面が扇形文で飾られているものがある。3類には刻み目だけが施されている例がある。

生駒西麓産の広口壺形土器Aは4点が1類で簾状文を施している。頸部も簾状文で飾られている。他1点(115)は3類であるが、斜方向に上・下に拡張している。口縁部は波状文と刻み目で飾られている。

広口壺形土器B(116) 3点ある。(116)以外は生駒西麓産である。生駒西麓産はすべて1類である。(116)は2類であるが1類に近い。口縁部は簾状文と扇形文で飾られている。生駒西麓産の広口壺形土器Bは簾状文で飾られているものと無文のものがある。

広口壺形土器C(111)(113) 2点ある。生駒西麓産のものはない。1類と2類がある。

細頸壺形土器(117) 2点ある。(117)は生駒西麓産である。他1点は内彎する口縁部をもち、口縁端部は内側に丸く肥厚する。口縁部外面には列点文の上に円形浮文を貼り付け、その下は凹線文で飾られている。

鉢形土器A(124) 1点ある。口縁部は外反して開く。

鉢形土器B(119) 2点ある。1点は生駒西麓産である。(119)は口縁部外面に凹線文、体部は稚拙な波状文で飾られている。生駒西麓産のものは口縁部外面が簾状文で飾られている。

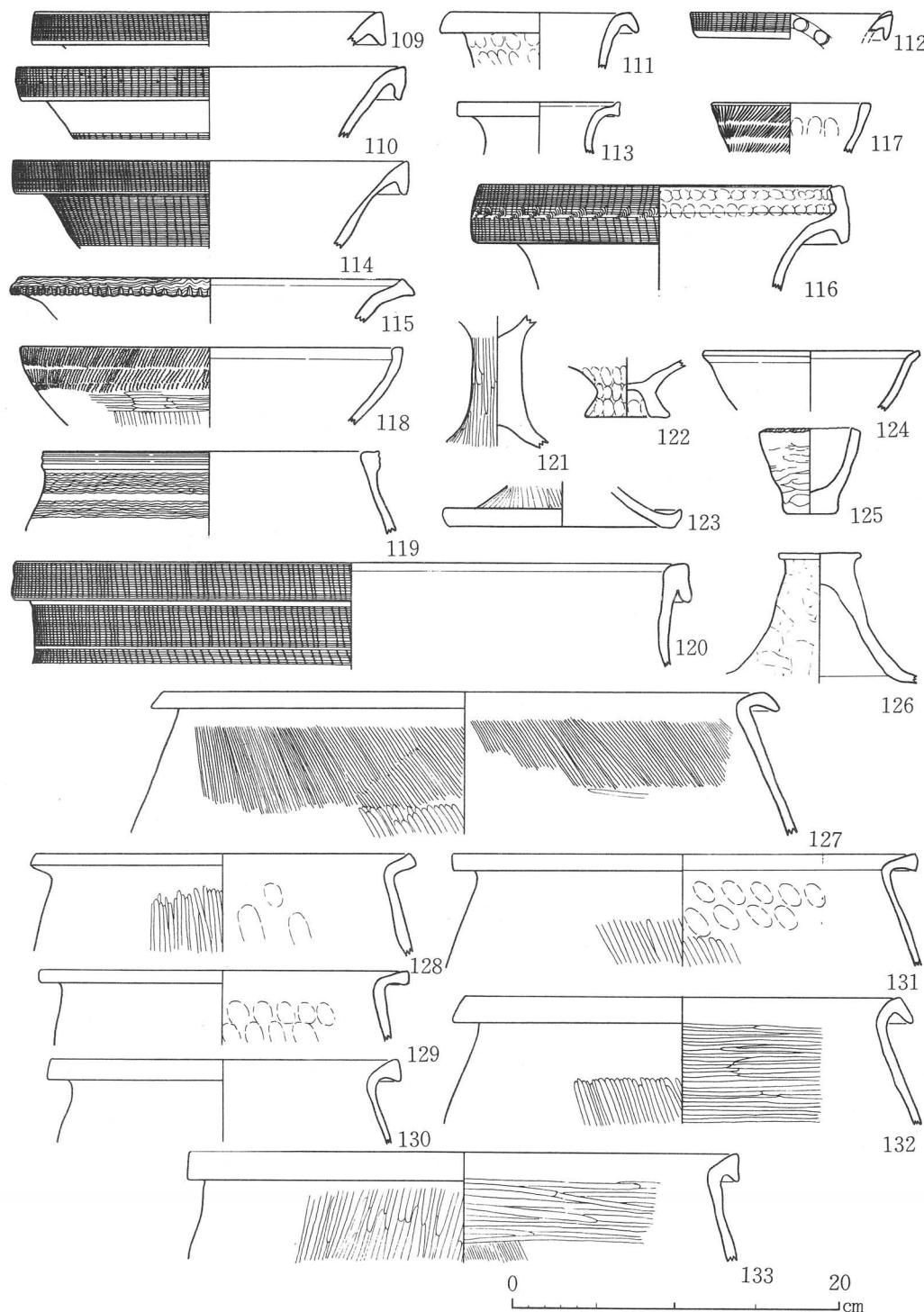
鉢形土器C(120) 1点ある。大型のもので、口縁部、体部ともに簾状文で飾られている。

鉢形土器には上述のもの以外に台部が付くもの(122)がある。小型の台部である。

高杯形土器A(118) 1点ある。生駒西麓産のもので、口縁部は列点文で飾られている。

高杯形土器B 1点ある。口縁部内端の凸帯は断面四角形を呈する。口縁部は欠失のため不明。

高杯形土器の台脚部(121)(123)は2点ある。(121)は中実の脚柱部。(123)は上外方に拡張



挿図16 溝1(第3層)出土土器

する裾部をもつ。

甕形土器(127)～(133) 22点ある。生駒西麓産(129)～(133)は8点ある。口縁部は「く」の字に外反するものが多い。口縁端部は面をもつものが多いが、下方に拡張するものもある。

体部は張り出す。体部の調整は外面がヘラミガキ、刷毛目、内面は刷毛目、ナデがみられる。

生駒西麓産の甕形土器の口縁部は内側に丸みをもって外反するものが多いが、「く」の字に外反するものもある。口縁端部は下方に拡張するものが多い。体部の調整は内外面ともにヘラミガキを施すものが多いが、外面にナデ、内面にナデ、刷毛目を施すものもみられる。

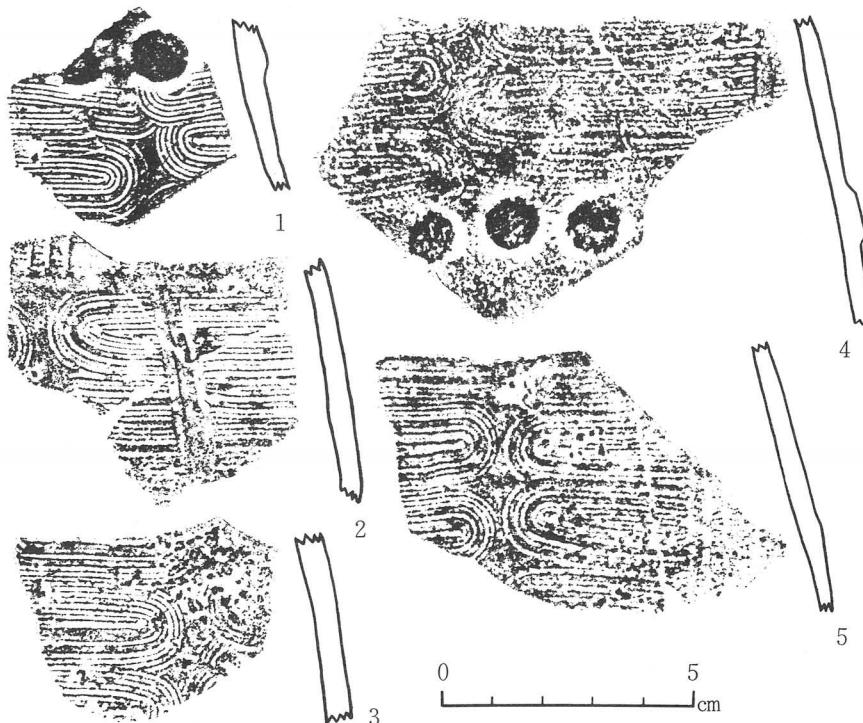
甕用蓋形土器(126) 1点ある。口縁部は欠失している。

ミニチュア土器(125) 1点ある。鉢形土器Aのミニチュアである。手づくねで雑な作りである。

底部 底径4.2～9.2cmを測る。外面の調整はヘラミガキ、ヘラケズリ、ナデがみられる。生駒西麓産のものはヘラミガキが多い。

第3層出土土器の文様は簾状文、櫛描直線文が多い。この他に斜線文、斜格子文、列点文、波状文、円形浮文で飾られている。列点文には刻み目状のものもある。また、流水文（挿図17-2～5）もみられる。

生駒西麓産のものも簾状文と櫛描直線文が多い。生駒西麓産の列点文にも刻み目状のものが



挿図17 流水文拓影

みられる。

第2層出土土器(134)～(185)

弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

弥生土器は広口壺形土器(A・B・C)、細頸壺形土器、太頸壺形土器、無頸壺形土器B、水差し形土器、鉢形土器(A・B・C)、高杯形土器(A・B)、甕形土器で構成される。器種分類の可能なものは97点ある。そのうち、壺形土器と甕形土器が約3割づつ、高杯形土器が約2割、鉢形土器が約1.5割である。生駒西麓産の土器(140)～(145)(149)～(150)(153)～(157)(160)(167)(170)～(172)は全体の約3割である。

広口壺形土器A(135)～(138)(140)～(142) 19点ある。生駒西麓産(140)～(142)は4点ある。1類が最も多いが、2類と3類も認められる。1類は簾状文で飾るものが最も多い。他に波状文で飾るもの、下端に刻み目、内面に円形浮文を貼り付けるものがある。内面に円形浮文が貼り付けられる例は簾状文の場合にもみられる。2類は波状文で飾られている。3類には無文のものの他に凹線文で飾られるものがみられる。ともに口縁部内面が列点文で飾られている。頸部の文様には簾状文がみられる。

生駒西麓産の広口壺形土器Aはすべて1類で、簾状文で飾られている。頸部も簾状文で飾られている。

広口壺形土器B(139)(143)～(145) 4点ある。そのうち、3点は生駒西麓産(143)～(145)である。(139)は3類であるが、口縁部上位は欠失している。3類は今回の調査でこの1点(139)だけである。口縁部下位は竹管文、頸部下位は櫛描直線文で飾られている。

生駒西麓産の広口壺形土器Bはすべて2類で、口縁部は内傾する。口縁部、頸部とも簾状文で飾られている。口縁部には円形浮文を簾状文の上に貼り付けているものもある。

広口壺形土器C(134) 1点ある。

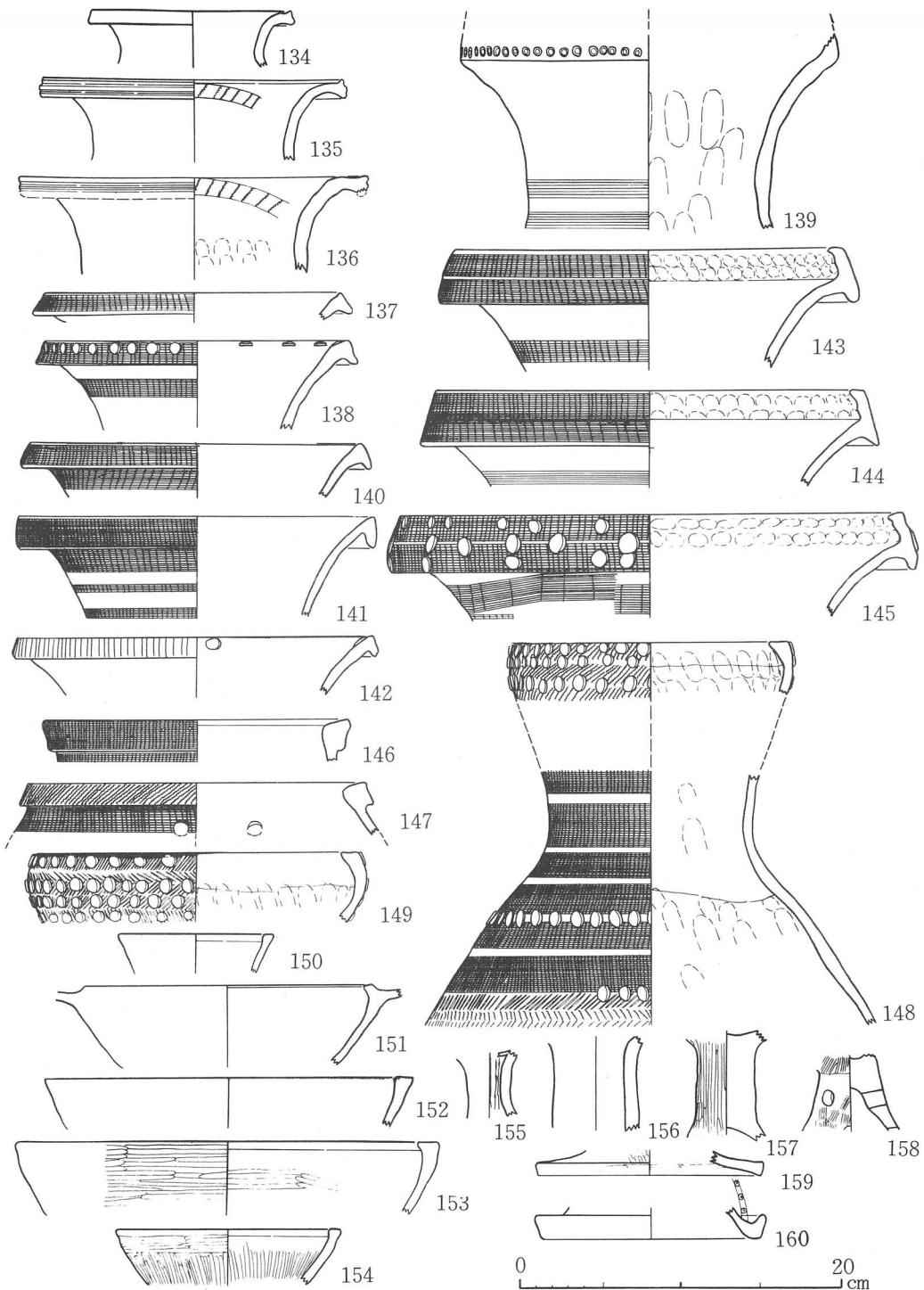
細頸壺形土器(150) 1点ある。生駒西麓産の細頸壺形土器で無文である。

太頸壺形土器(148)(149) 2点ある。(149)は生駒西麓産である。ともに内弯する口縁部の内側は肥厚する。口縁部の文様構成は(148)が列点文を同方向に施すのに比べて、(149)は稜杉状に斜線文を配する。ともに円形浮文を貼り付けている。また、(149)の斜線文は(148)の体部にみられる刻み目状の列点文と似ている。この2点は全体に受けた印象が似る。

無頸壺形土器B(146)(147) 3点ある。(147)は口縁下に相対する紐孔をもつ。(146)(147)は簾状文や列点文で飾られているが、他の1点は無文である。

水差し形土器 1点ある。無文の水差し形土器で、口縁部外面には縦方向の、内面には横方向のヘラミガキが施されている。

鉢形土器A(161) 2点ある。ともに無文である。



挿図18 溝1(第2層)出土土器

鉢形土器B (164)～(167) 7点ある。そのうち、2点は生駒西麓産(167)である。すべて体部は文様で飾られているが、口縁部は無文のものもみられる。体部が簾状文で飾られているものは文様帶間に研磨線がみられる。

生駒西麓産の鉢形土器Bは2点とも大型品で、(167)は口縁部が簾状文と刺突文で、体部は簾状文で飾られている。他の1点は口縁部が列点文と刺突文、体部が簾状文で飾られている。

鉢形土器C (163) 1点ある。無文である。

鉢形土器には上述のもの以外に台部の付くものが2点ある。1点は生駒西麓産で、鉢部と台部の接合部片である。接合方法は円板充填法による。他の1点は脚台部から裾部にむかってなだらかに開くものであるが、裾部は大きく広がらない。内面とも調整は刷毛目である。

高杯形土器A (152)～(154) 4点ある。生駒西麓産(153)(154)は2点ある。無文のもの他に口縁部を2本の凹線文で飾るものがある。

生駒西麓産の高杯形土器Aは2点とも口縁端部が内側で肥厚する。口縁端部の様子は太頸壺形土器と似る。

高杯形土器B (151) 3点ある。そのうち、1点は生駒西麓産で口縁部内端の状況は不明であるが、口縁部は長く垂下する。他の2点の口縁部の状況は不明であるが、口縁部内端の凸帶は断面四角形を呈する。

高杯形土器の脚台部は脚柱部片、裾部片を合わせて12点ある。そのうち、生駒西麓産(155)～(157)(160)は4点ある。脚柱部は中空のもの、中実のものの両方みられる。裾部は(159)を除いてすべて裾端部が上外方へ拡張する。(160)は裾部に竹管文を施している。

甕形土器(168)～(172) 29点ある。そのうち、生駒西麓産(170)～(172)は7点ある。口縁部は「く」の字に外反して、端部に面をもつものが多い。ただし、半数近くの甕形土器の口縁端部は上方に拡張するものになっている。

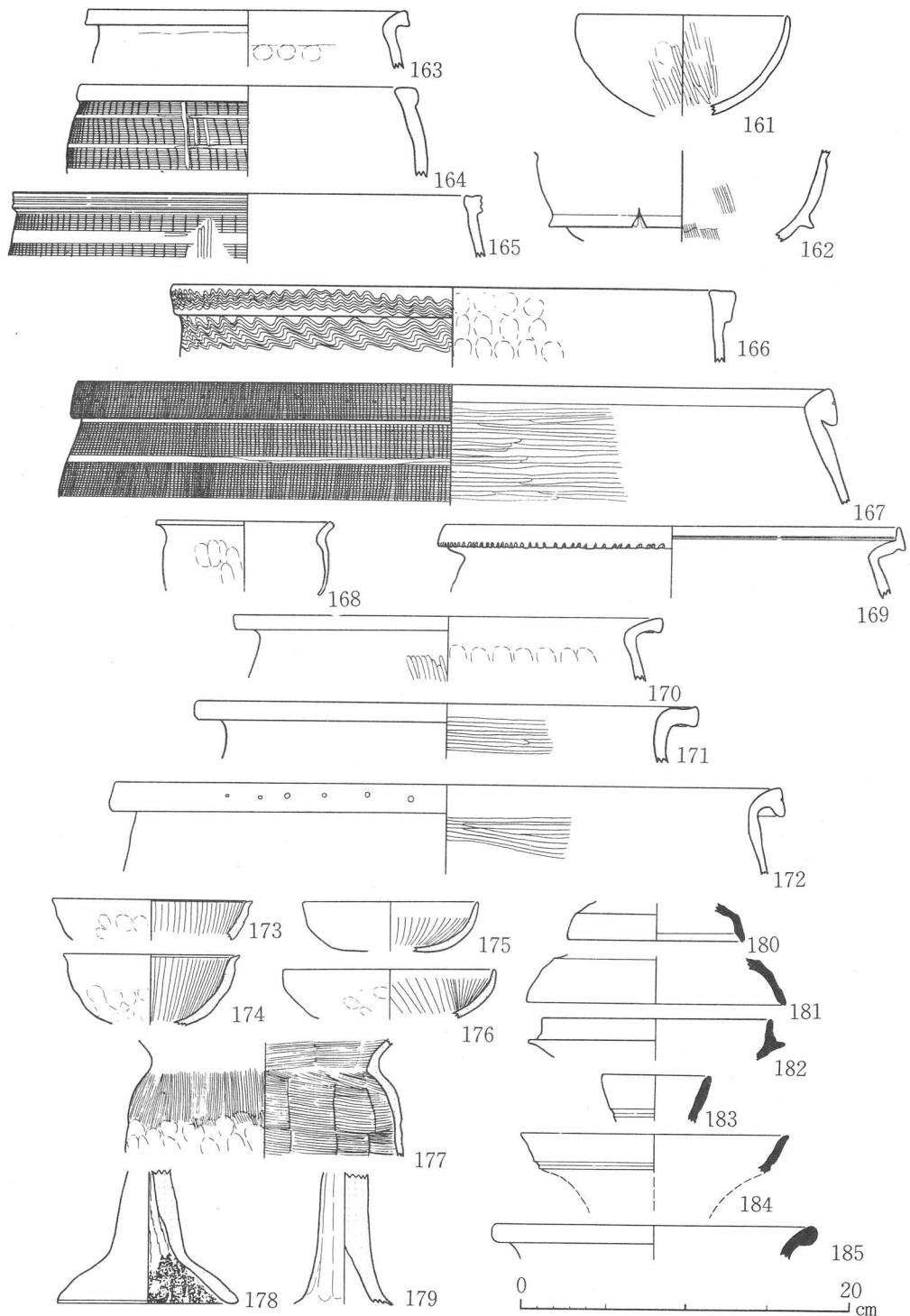
生駒西麓産の甕形土器は(172)に代表される形態のものが多い。

底部 底径 4.3～12.7cmを測る。外面の調整はヘラミガキが多い。他にヘラケズリもみられる。生駒西麓産の底部の外面調整はすべてヘラミガキである。

第2層出土土器の文様は簾状文が多い。この他に櫛描直線文、波状文、流水文、列点文、刺突文、竹管文がみられる。また、列点文の中には第3層と同様に刻み目状の列点文もみられる。円形浮文は簾状文、列点文などと組み合わせて用いられることが多い。貼り付け浮文には円形の他に棒状のものもみられる。凹線文は相変らず少ない。

第2層出土土器の中に平行タタキ調整がみられる破片が3点出土している。内面の調整は2点が刷毛目で、他の1点は不明である。

土師器は杯、鉢、高杯、甕、鍔釜、把手で構成される。器種分類の可能なものは36点だけで、



挿図19 溝1(第2層)出土土器

出土量は少ない。そのうち、約4割は杯、約3割は甕である。

杯(173)～(176) 16点ある。丸底のものと、丸底と平底の中間のものがみられる。口縁部はほぼ直立するもの、やや外反するもの、外反して開くものなどがある。口縁端部は丸くおさまるもの、内傾して平坦な面をもつもの、内傾して凹面をもつものなどがある。内面には暗文のみられるものとみられないものがあるが、暗文のある方が多い。暗文は(176)が斜方向にみられるのを除いて、他はすべて正放射状に施されている。

鉢 2点ある。1点は器壁が0.65cmを測る鉢で、口縁端部は内傾して凹面をもつ。内面には斜格子状の暗文が施されている。他の1点には正放射状の暗文がみられる。

高杯(178)(179) 6点ある。杯部残存のものは1点だけで、杯底部外面に段をもつ。内面には正放射状の暗文がみられる。脚柱部は中ぶくらみのものと細長いものがある。裾部は丸みをもって大きく開くものがある。(178)の裾部内面には布目が残る。

甕(177) 10点ある。「く」の字に外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさまるもの、尖り気味のもの、上端で平坦な面をもつて外端もしくは内端で丸くおさまるものがある。

鍔釜 口縁部片が1点ある。

須恵器は蓋杯、高杯、甕、壺、甕、台部がみられる。器種分類の可能なものは22点だけで、出土量は少ない。

杯蓋(180)(181) 3点ある。図示したもの以外に口縁部と天井部を分ける稜の認められるものがある。酸化炎焼成のためか明赤褐色を呈す。

杯(182) 5点ある。杯の受部に蓋の熔着したもの、外面に自然釉の付着したものなどがある。蓋杯の外面にはヘラ記号のあるものが2点ある。

高杯 6点ある。長脚2段透しの脚柱部がみられる。

壺 体部片が1点ある。直口の口縁部をもつ(183)は横瓶か平瓶もしくは提瓶の口縁部と思われる。

甕(184) 1点だけで、大きく開く口縁部をもつ。

甕(185) 2点ある。口縁端部は外方へ丸く肥厚する。

第1層出土土器(186)～(220)

弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

弥生土器は広口壺形土器(A・B)、細頸壺形土器、鉢形土器(A・B)、高杯形土器A、甕形土器で構成される。器種分類可能なものは52点ある。そのうち、約4割は甕形土器、約3割は壺形土器である。生駒西麓産の土器(188)(196)は全体の約2割である。

広口壺形土器A(186)～(188) 11点ある。そのうち、生駒西麓産(188)は4点ある。1類が最も多い。他に、3類と4類がある。口縁部の施文状況は1類に簾状文で飾るものが多い。他

には外面に波状文、内面に扇形文、外面に凹線文、内面に扇形文、外面に簾状文、内面は列点文の上に円形浮文で飾るものがある。3類には凹線文で飾るものがある。4類には波状文で飾るものと無文のものがある。生駒西麓産の広口壺形土器Aはすべて1類で、口縁部外面はすべて簾状文で飾られている。

広口壺形土器B 1点ある。口縁部の上半部片で、下端の形状は不明である。外面は縦線文の上を竹管文で飾っている。

細頸壺形土器(189) 1点ある。外傾する直口の細頸壺形土器で、無文である。

鉢形土器A 2点ある。外面を凹線文で飾るものと無文のものがある。

鉢形土器B 4点ある。生駒西麓産のものは2点ある。口縁部外面を凹線文で飾るものと、段状の口縁部が剥離しているため口縁部の施文状況は不明であるが、体部を簾状文と櫛描直線文で飾るものがある。生駒西麓産の鉢形土器Bのうち1点は口縁部外面に列点文、体部は簾状文で飾られている。他の1点は大型の鉢で第2層出土の鉢形土器B(167)と類似する。

鉢形土器には以上の他に、(191)のように口縁端部が内外に肥厚してT字状を呈するものがある。外面には凹線文が施されている。

高杯形土器A 2点ある。ともに生駒西麓産のものである。そのうち、1点は口縁端部が内側に肥厚する。外面にはわずかであるが煤が付着している。

これらの他に、脚台部が4点ある。そのうち、1点は生駒西麓産である。裾部は外上方に拡張する。裾部に円孔が穿たれているものもある。生駒西麓産の裾部片も同じ形態である。外面は縦方向のヘラミガキで調整されている。

甕形土器(192)～(196) 22点ある。そのうち、生駒西麓産(196)は4点ある。口縁部は丸くおさまるもの、面をもつもの、上方に拡張するもの、下方に拡張するものもみられるが、上下に拡張するものが多い。口縁部下端に刻み目の施されたもの、(194)のように口縁部内外面に凹線文を施したものもみられる。

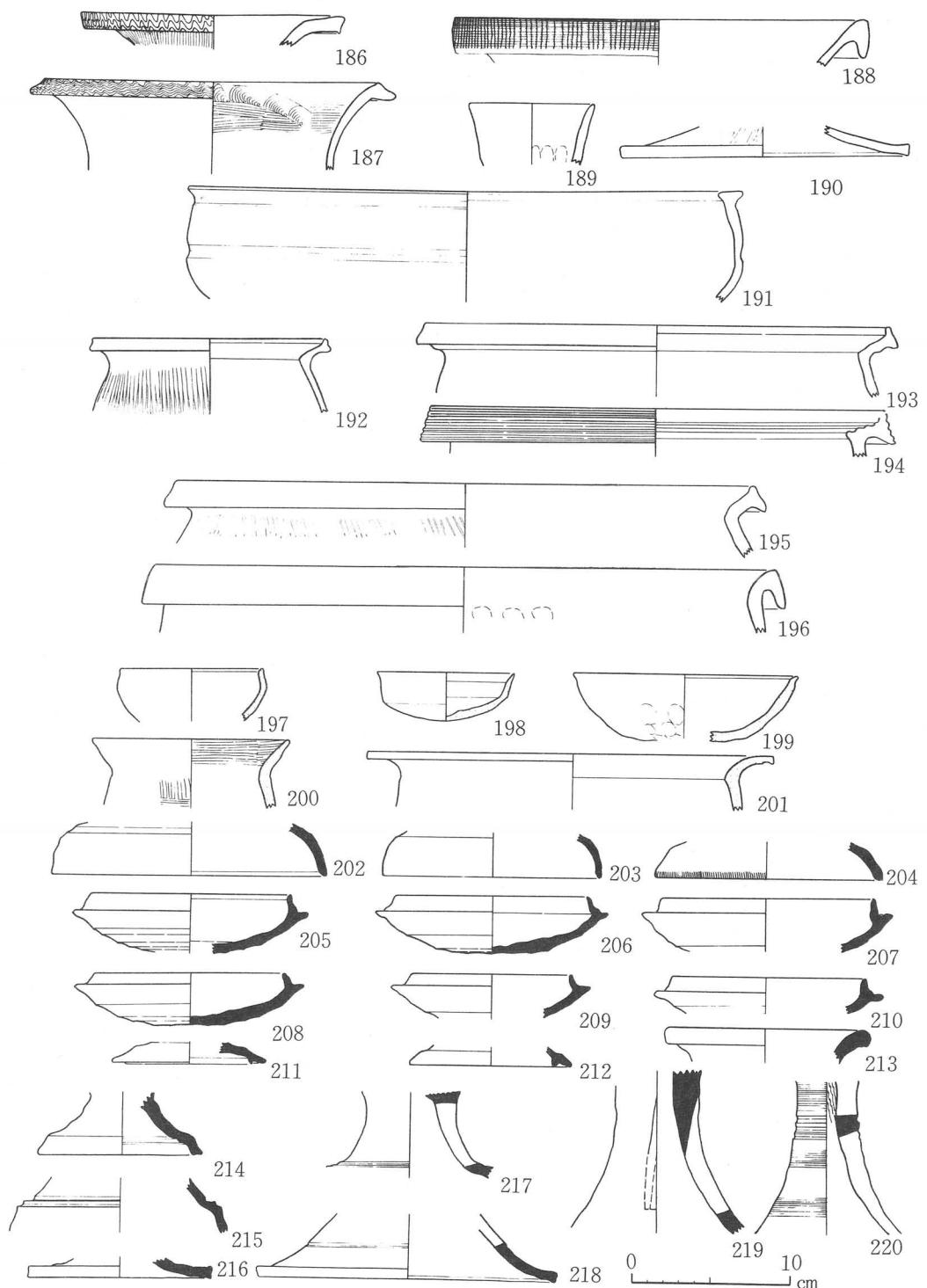
底部 底径3.8～9.2cmを測る。外面の調整はヘラミガキが多い。他にヘラケズリもみられる。

第1層出土土器の文様には櫛描直線文と簾状文が多い。この他に、波状文、扇形文、斜線文、列点文、縦線文、刺突文、凹線文がある。

第1層出土土器の中にも平行タタキ調整の施された破片が1点出土している。内面は刷毛目調整である。

土師器は杯、高杯、甕、鍔釜で構成される。器種分類の可能なものは31点で、出土量は少ない。そのうち、約4割を杯、約3割を甕、約2割を高杯が占める。

杯(197)～(199) 13点ある。丸底のものと尖り気味の丸底のものがある。口縁部は内傾するもの、外傾するもの、外反して開くものなどがある。口縁端部は丸くおさまるもの、内傾して



挿図20 溝1(第1層)出土土器

平坦な面をもつものがある。内面には暗文のみられるものとみられないものがあるが、後者の方がわずかに多い。暗文はすべて正放射状に施されている。

高杯 7点ある。杯部残存のものは底部外面に段をもつ。

甕(200)(201) 9点ある。「く」の字に外反する口縁部をもつもの、外彎して大きく開く口縁部をもつものがある。

鎧釜 2点ある。1点は鎧部片で生駒西麓産である。他の1点は口縁部片で、内彎気味に外反する。

須恵器 は蓋杯、高杯、甕、台部で構成される。器種分類の可能なものは39点で、出土量は少ない。

杯蓋(202)～(204)(211)(212) 11点ある。天井部から口縁部にかけてゆるやかな丸みをもつてくだる。口縁部はほぼまっすぐにくだるもの、大きく外方へ開くものがある。(211)(212)は杯身をさかさまにした形態で、端部内面にかえりをもつ。この形態のものは4点ある。かえりは口縁端部よりも下方に突出しているもの、口縁端部とならぶもの、わずかに入り込んでいるものがある。

杯(205)～(210) 11点ある。比較的丸みをもつ器体のものと浅く扁平なものがある。たちあがりは直立するもの、内傾するものがある。底部外面は回転ヘラケズリを施すものが多いが、ヘラ切りのままで未調整のものも認められる。たちあがりは貼り付けによるもの、オリコミ法によるものがある。

高杯(216)(218)～(220) 9点ある。(219)を除いた他は、すべて長脚2段透しの高杯である。(219)は酸化炎焼成によるもので、太い脚柱部をもつ。透しは上半を開け切っていない。

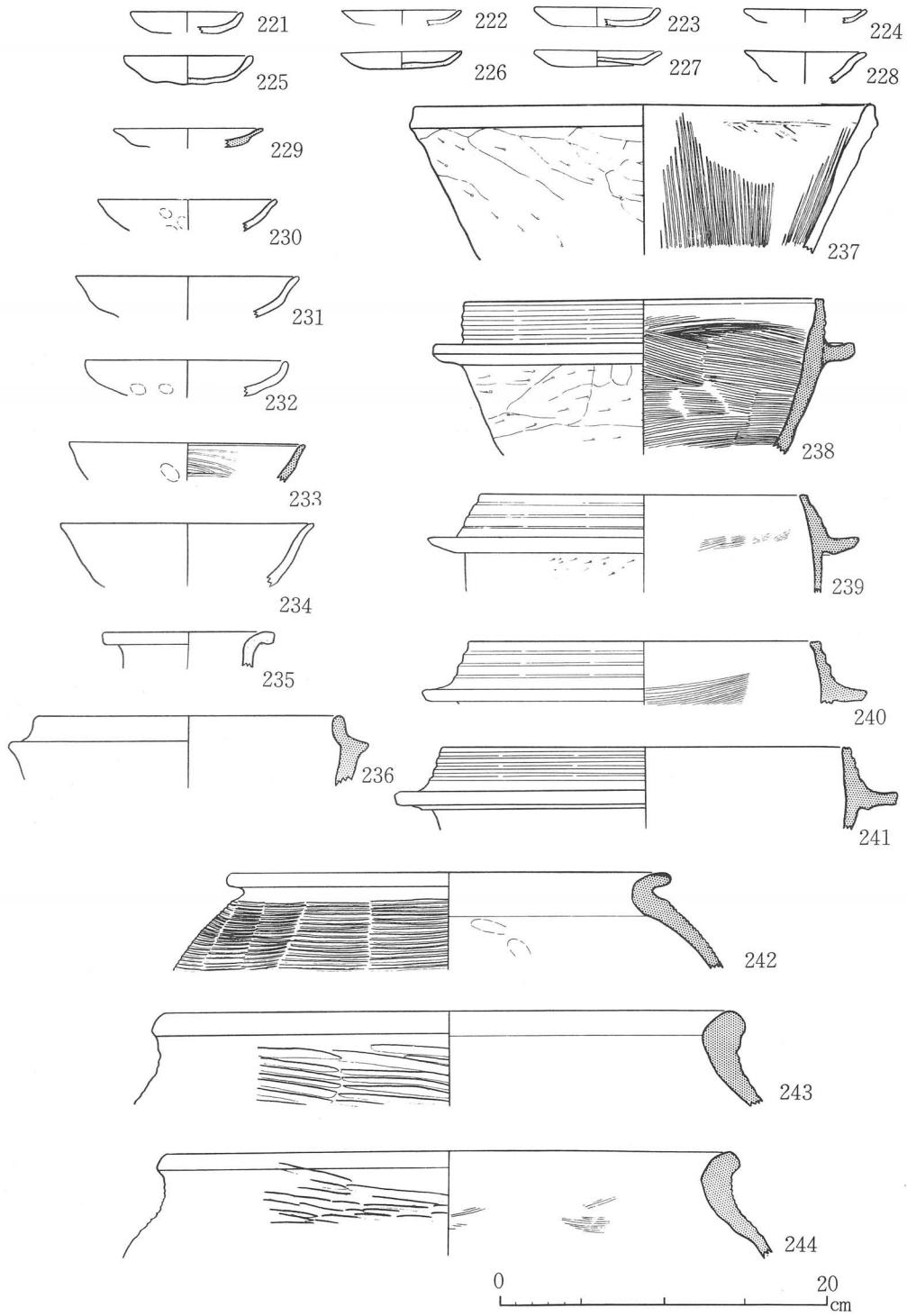
甕(213) 3点ある。すべて口縁端部は外方へ丸く肥厚する。

台部(214)(215)(217) 3点ある。なだらかに開いてきた脚部が裾部近くで内屈してふんばる形態をもつ。おそらく長頸壺の台部片と思われる。

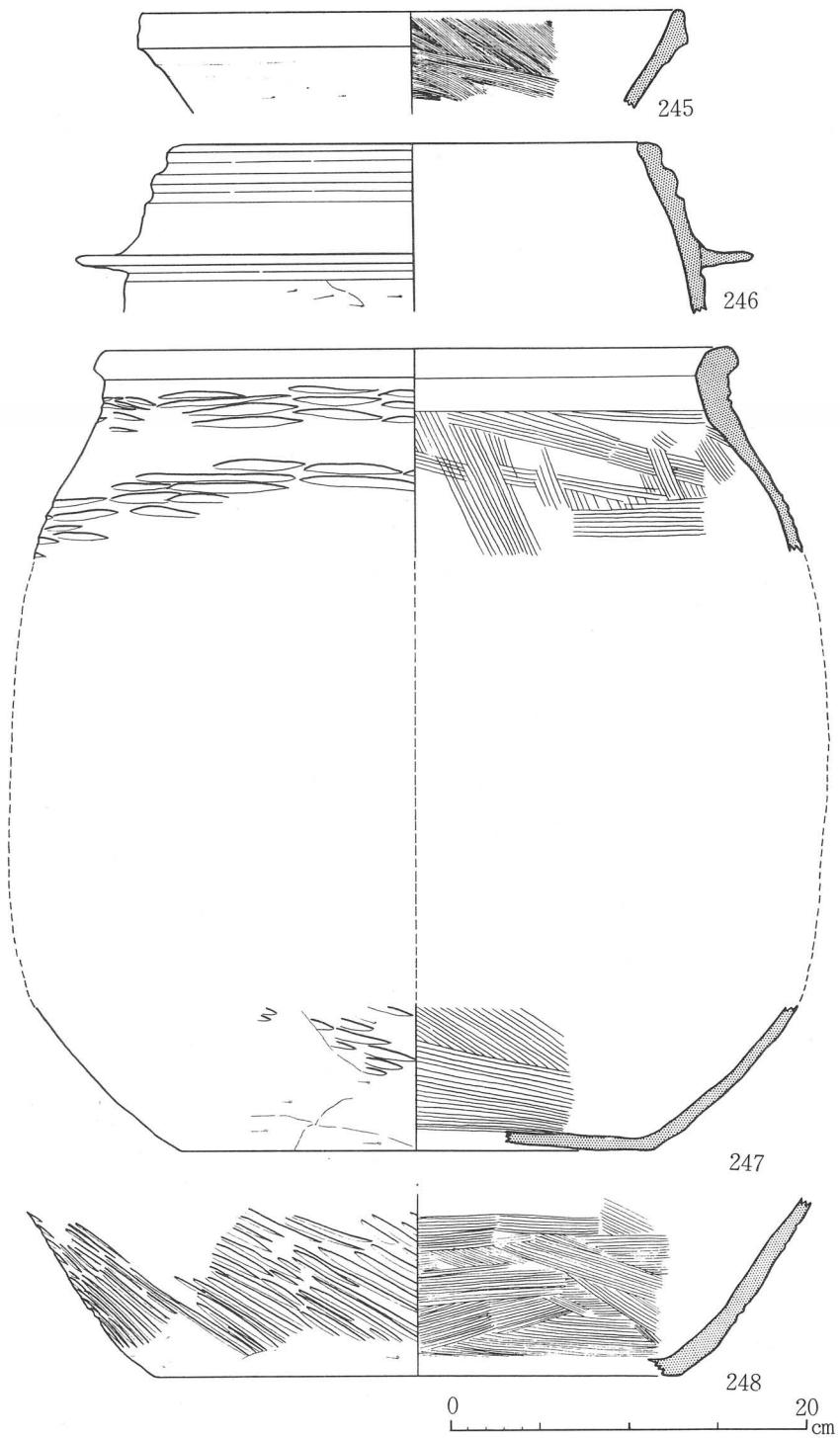
溝2（挿図21）

溝2には、9種類の層名が与えられているが、大きく北部で4層、南部で2層に分かれる。遺物の取りあげは北部の上位2層と、南部2層を上層とし、北部の下位2層を下層として行なわれた。出土土器の大半は中世の土器である。他に、弥生土器、6世紀末～7世紀の土師器と須恵器も出土している。弥生土器には広口壺形土器A、鉢形土器B、高杯形土器、甕形土器などがある。土師器には杯、鉢、甕が、須恵器には蓋杯、高杯、壺、甕などがある。以下、中世土器について観察する。

中世土器には土師質土器、須恵質土器、瓦器、瓦質土器がある。土師質土器には小皿、皿、椀、壺、甕が、須恵質土器には練鉢が、瓦器には小皿、椀が、瓦質土器には練鉢、羽釜、甕、



挿図21 溝2出土土器



挿図22 土壌1出土土器

火入れがある。

小皿(221)～(229) 土師質土器(221)～(228)と瓦器(229)がある。底部は平底のもの、丸みをもつが平底のもの、あげ底のものがある。口縁部の大半は内彎気味にたちあがり、端部が丸くおさまるものである。この他、へそ皿と称されるもの(228)もある。瓦器皿(229)は1点だけである。

皿(230)～(232) すべて土師質の皿で底部から外反して開く口縁部をもつものと内彎気味に直立する口縁部をもつものがある。

椀(233) (234) 瓦器椀と土師質の椀がある。瓦器椀(233)の口縁部は外傾する。内面ともに暗文をもつ。土師質の椀(234)は大きく外反する口縁部をもつ。

壺(235) 土師質の壺で、短く直立した後、外反して大きく開く口縁部をもつ。

火入れ(236) 瓦質の火入れで、直立する口縁部直下に短い鍔がめぐる。

練鉢(237) 口縁部外面に面をもつが、拡張はみられない。須恵質である。

羽釜(238)～(241) すべて有段の羽釜であるが、口縁部が直立するものと内傾するものがある。

甕(242)～(244) 短く外折する口縁部をもつもの(242)と外反する口縁部をもつもの(243)(244)がある。(242)は須恵質に近い瓦質である。また、他の瓦質の甕に比べて体部外面の平行タタキも細い。

土壙1 (挿図22)

土壙1出土土器の大半は瓦質土器と土師器である。この他、弥生土器、須恵器、陶器がわずかであるが出土している。

瓦質土器には練鉢、羽釜、甕が、土師器には甕がある。

練鉢(245) 口縁部外面に面をもつが、拡張はみられない。

羽釜(246) 有段の羽釜で、幅広の口縁部は内傾する。

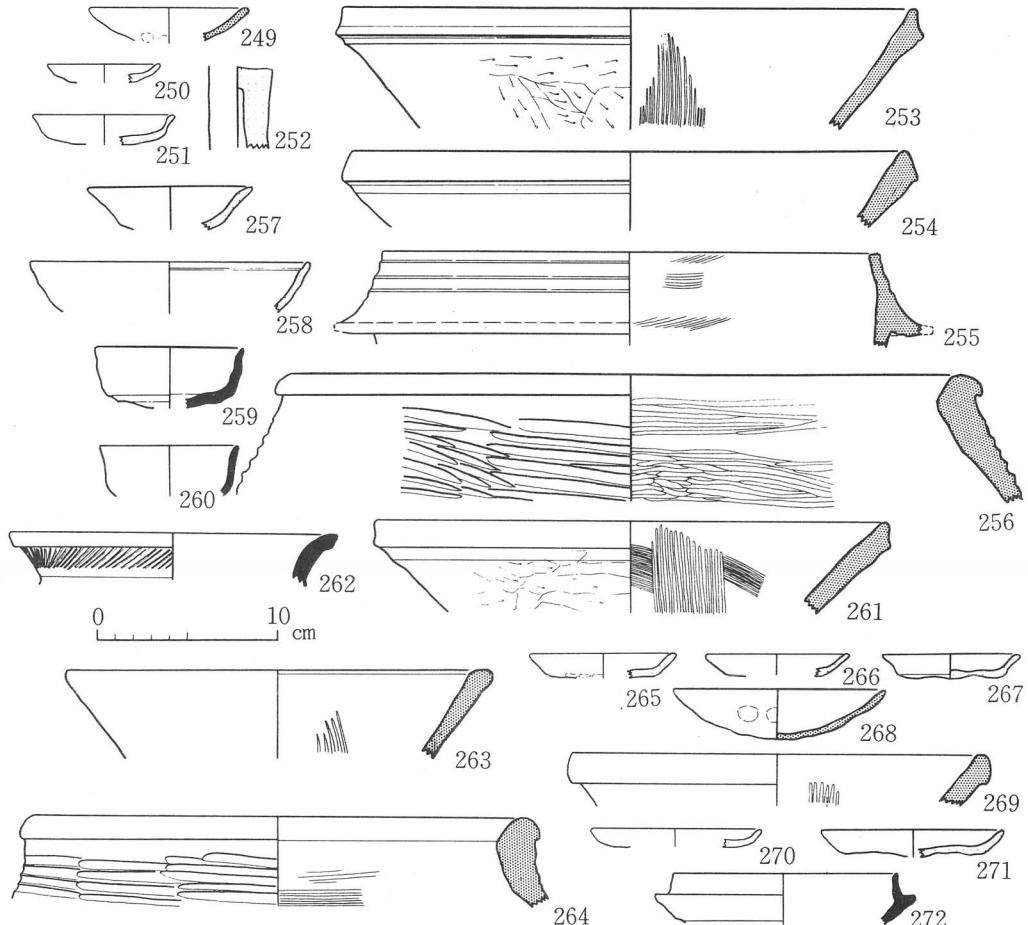
甕(247)(248) 直立気味に立ちあがったのち外反する口縁部をもつ。底部はわずかにあげ底。(248)は底部片で、調整、形態とも(247)と類似する。

土壙2 (挿図23)

瓦器、瓦質土器、土師質土器の他に弥生土器、須恵器が出土している。瓦器には(249)の椀が、瓦質土器には有段の口縁部をもつ羽釜、外面に平行タタキ、内面に刷毛目が施された甕が、土師質土器には小皿がある。

土壙3 (挿図23)

瓦器、瓦質土器、土師質土器の他に弥生土器、須恵器が出土している。瓦器には小皿と椀が、瓦質土器には擂鉢(253)、練鉢(254)、羽釜(255)、甕(256)が、土師質土器には小皿(250)(251)、脚



挿図23 土壌2~5、井戸1、建物4・5出土土器

部(252)がある。

土壌4(挿図23)

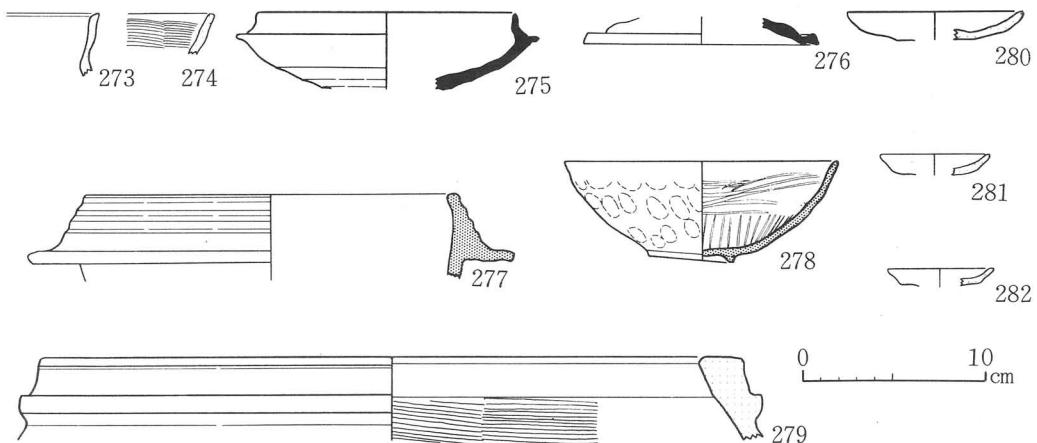
瓦器、瓦質土器、土師質土器の他に弥生土器、土師器、須恵器が出土している。瓦器には椀が、瓦質土器には擂鉢(261)、練鉢、甕が、土師質土器には小皿(257)が出土している。この他、土師器の杯(258)と甕が、須恵器の杯(259)(260)と甕が出土している。

土壌5(挿図23)

瓦質土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。瓦質土器には外面に平行タタキ、内面に刷毛目が施された甕がある。弥生土器は生駒西麓産の胎土をもつ破片で、稜杉状の列点文の上に円形浮文が貼り付けられている。土師器は高杯の脚部片で、内面には溝1の第2層出土の高杯(178)の裾部内面と同様の布目が認められる。須恵器には壺(262)がある。

井戸1(挿図23)

瓦質土器が出土している。擂鉢(263)、甕(264)の他に羽釜の鍔部片もある。



挿図24 ピット1～9出土土器

建物4(挿図23)

瓦器、瓦質土器、土師質土器が出土している。瓦器には皿(268)が、瓦質土器には擂鉢(269)が、土師質土器には小皿(265)～(267)がある。

建物5(挿図23)

瓦器、瓦質土器、土師質土器の他に弥生土器、土師器、須恵器が出土している。瓦質土器には甕が、土師質土器には小皿(270)(271)がある。須恵器には杯(272)、杯蓋、高杯、甕がある。

ピット1(挿図24)

土師器の甕の口縁部片(273)(274)が2点出土している。布留式の甕で、今回の調査でこの時期のものはこの2点だけである。

ピット2(挿図24)

土師器と須恵器が出土している。須恵器には杯(275)がある。

ピット3(挿図24)

土師器、須恵器、瓦器が出土している。須恵器には杯蓋(276)がある。奈良時代のものである。

ピット4(挿図24)

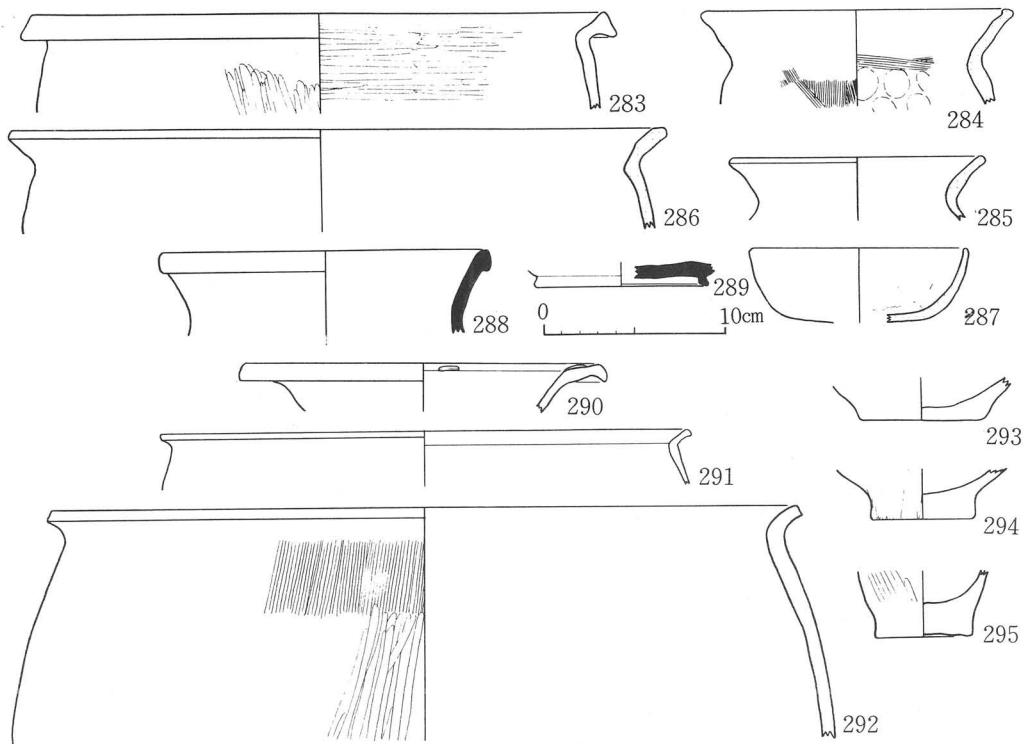
瓦質土器の羽釜(277)が出土している。

ピット5(挿図24)

土師器、須恵器、瓦器が出土している。須恵器には杯が、瓦器には椀(278)がある。

ピット6(挿図24)

弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器が出土している。弥生土器には甕の口縁部片の他に外面に平行タタキ、内面に刷毛目の調整が施された破片、凹線文と簾状文で飾られた破片があ



挿図25 堆積層、表採 土器

る。須恵器には甕の体部片がある。土師質土器には甕(279)がある。今回の調査でこのタイプの甕はこの1点だけである。

ピット7(挿図24)

土師質土器の小皿(280)が出土している。

ピット8(挿図24)

弥生土器、須恵器、土師質土器が出土している。弥生土器の中には生駒西麓産の破片が、須恵器には甕の口縁部片がある。土師質土器には小皿(281)がある。

ピット9(挿図24)

弥生土器、須恵器、土師質土器が出土している。弥生土器の中には壺が、須恵器にも壺がある。土師質土器には小皿(282)がある。

堆積層(挿図25)

弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器が出土している。

(283)は弥生土器の甕で、胎土は生駒西麓産である。(284)～(286)は土師器の甕、(287)は杯である。(288)は須恵器の甕、(289)は杯の底部である。(283)は第4層出土。他は第3層出土である。

表採(挿図25)

弥生土器、土師器、須恵器、瓦器が出土している。

図示したもの(290)～(295)はすべて弥生土器である。

2. 石 器 類

石器の大半は溝1から出土したもので、弥生時代中期に属する。

以下、溝1から出土したものを概観したのち、他の遺構および堆積層、表採のものをまとめて観察する。観察にあたって、左側をA面、右側をB面とする。また、観察の中にA面、B面と特に記述していない場合はA面側からみたものである。

溝1出土石器（挿図26・27）

石鎌、不定形石器、柱状片刃石斧、石庖丁、砥石、敲き石の他、サヌカイトの石核、剝片、砂岩礫などが出土している。

石鎌(1)～(3)

凸基無茎式の石鎌(1)(2)と未製品が出土している。

(1) 先端は欠失している。側辺の形態は左右非対称。左側は先端から直線的にのびたのち、内彎して基辺に至るが、右側は直線的にのびる。逆刺部は左側で角をなすが、右側は不明瞭。両面とも側辺から調整剝離を施しているが、基部の調整は丁寧で揃っている。現存長 4.0cm、幅 1.5cm、厚さ 0.5cm、重量 2.6g (第3層)

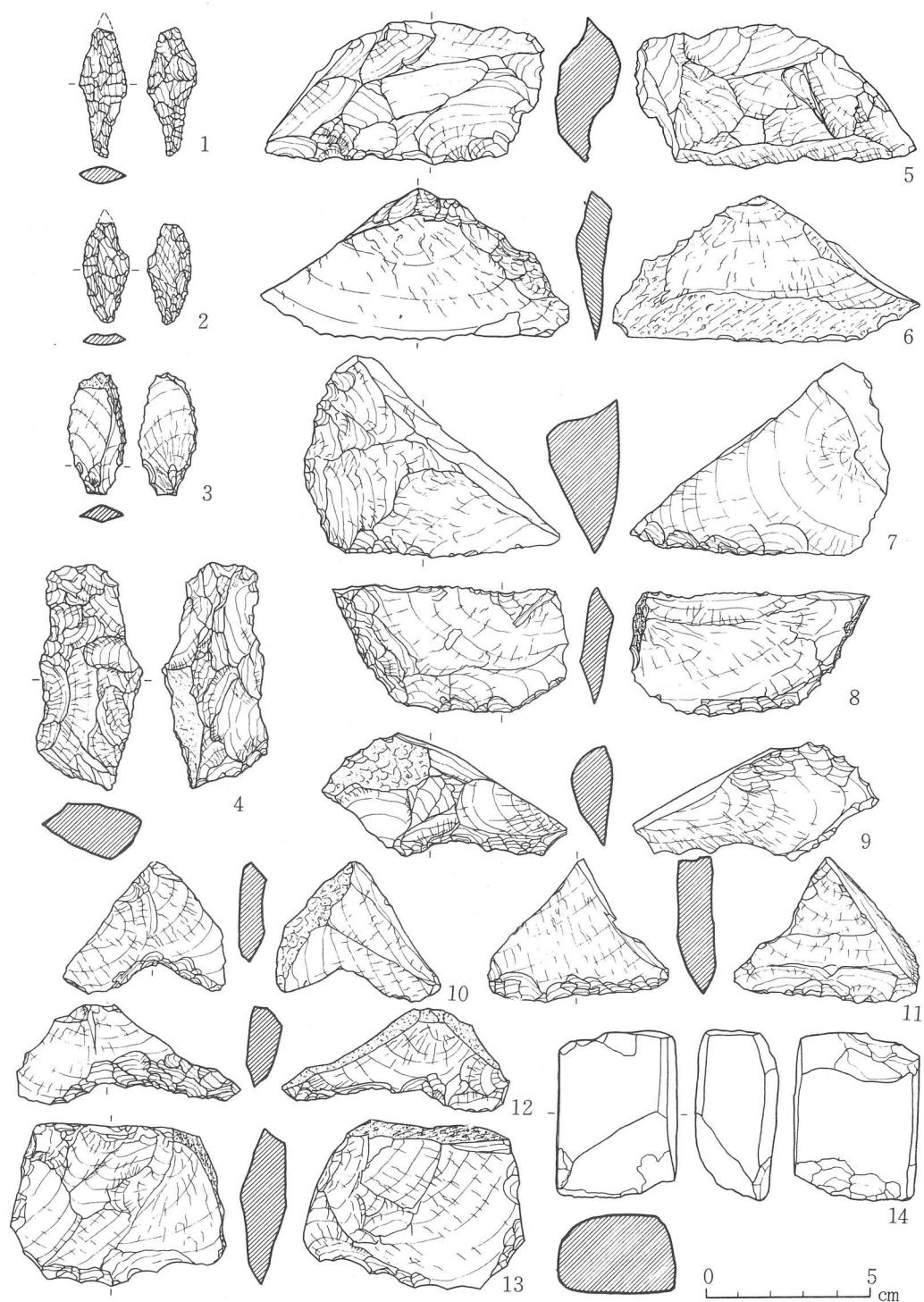
(2) 先端は欠失している。側辺の形態は左右非対称。左側は先端からふくらみをもって下るが、右側は先端で内彎したのち、ふくらみをもって下る。逆刺は角をなさない。調整剝離は左側辺が揃っているのに比べて、右側辺は不揃いである。B面の中央部には大剝離面が残る。現存長 3.0cm、幅 1.4cm、厚さ 0.3cm、重量 1.6g (第1層)

(3) A面にネガティブな剝離面が2枚と自然面を、B面に主要剝離面をもつ剝片を素材にしている。A面右側辺、B面左側辺に調整剝離を施している。長さ 3.8cm、幅 1.7cm、厚さ 0.5cm、重量 3.7g (第4層)

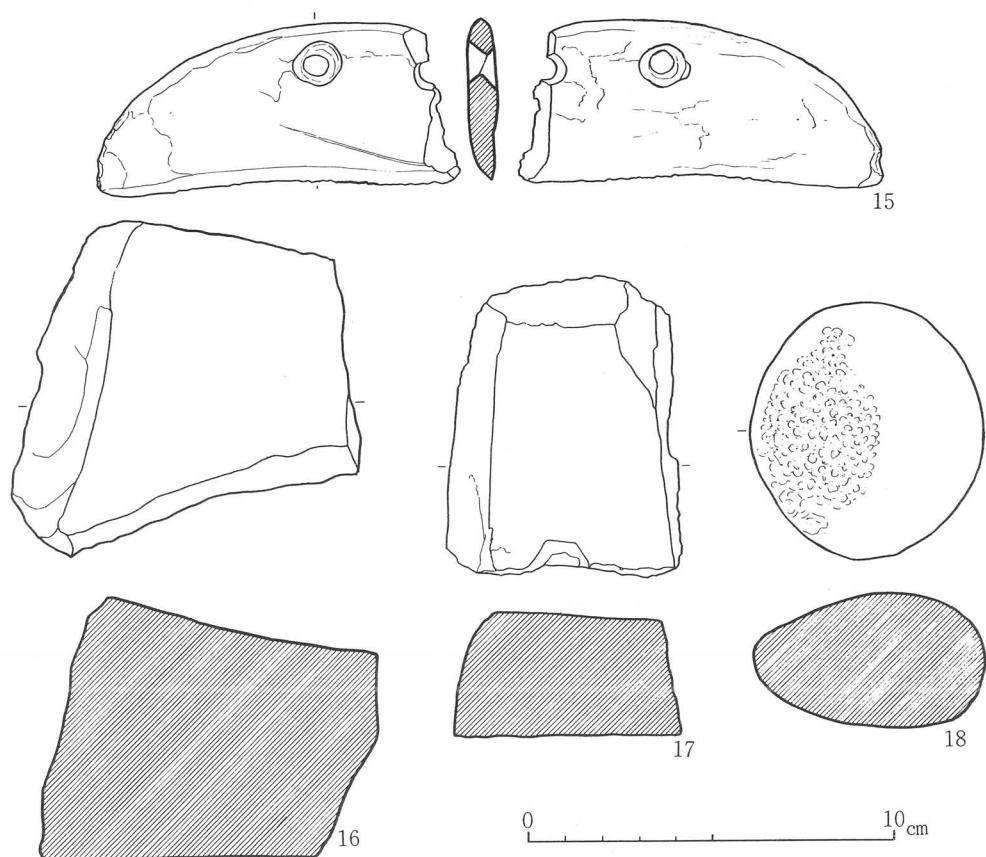
不定形石器(4)～(13)

尖頭器へ加工すると思われるもの(4)、刃器としての機能が考えられるもの(5)～(13)がある。

(4) 側辺の形態は左側で直線的にのびるが、右側は内彎したのち、角をもってくだる。中央部で最大厚をもち、両端に向って薄くなる。A面では両側辺に調整剝離を施しているが、中



挿図26 溝1出土石器挿図



挿図27 溝1出土石器

央に大剝離面が残る。B面は右側辺から調整剝離を施しているが、左側辺下半には自然面が残る。長さ7.0cm、幅3.2cm、厚さ1.7cm、重量35.8g（第1層）

(5) 全体の形状が平行四辺形を呈する石核を刃器として使用している。A面下辺に使用痕が認められる。長さ4.5cm、幅9.1cm、厚さ1.8cm、重量60.7g（第4層）

(6) A面は主要剝離面で、打面は調整打面。B面はネガティブな剝離面と自然面とからなる。下辺の自然面に使用痕が認められる。長さ4.7cm、幅9.4cm、厚さ1.2cm、重量43.0g（第2層）

(7) A面にネガティブな剝離面が5枚、B面に主要剝離面をもつ剝片を素材にしている。打面は一枚の平坦打面。B面下辺に調整剝離を施して刃部を作っている。長さ6.4cm、幅8.3cm、厚さ2.1cm、重量7.3g（第2層）

(8) 両側辺に自然面を残す剝片。A面下辺とB面下辺右側に調整剝離を施して、両刃の刃部を作っている。長さ3.9cm、幅7.3cm、厚さ1.0cm、重量35.0g（第2層）

(9) B面に主要剝離面をもつが、打面は打ち落とされている。A面にはネガティブな剝離

面が4枚と自然面が残る。A面下辺には調整剝離を施している。長さ3.8cm、幅7.6cm、厚さ1.2cm、重量25.1g(第2層)

(10) B面左側辺に自然面が残る。下辺は浅いV字状を呈し、調整剝離が施されている。長さ4.3cm、幅5.0cm、厚さ9.0cm、重量15.4g(不明)

(11) A面に主要剝離面をもつが、打面は打ち落とされている。両面とも下辺に調整剝離が施されていて、両刃を作っている。長さ4.5cm、幅5.6cm、厚さ1.2cm、重量24.7g(第2層)

(12) 打面を自然面にもつ剝片を素材にしている。A面は主要剝離面。B面にはネガティブな剝離面が1枚ある。両面とも下辺と右辺の一部に調整剝離を施している。内彎刃で両刃。長さ3.2cm、幅7.0cm、厚さ1.0cm、重量16.4g(第1層)

(13) 石核を素材とする。上辺と右側辺に自然面が残る。A面下辺には調整剝離を施している。長さ5.1cm、幅6.7cm、厚さ1.5cm、重量56.9g(第2層)

柱状片刃石斧(14)

頭部のみ残存。橢円形状の断面をもつ柱状片刃石斧。頭部右側がほぼ平坦であるのに対して、左側が低くなっている一部で凹み部もある。ただし全面研磨されている。長さ5.2cm、幅3.7cm、厚さ2.4cm、重量91.9g(第2層)

石庖丁(15)

内彎刃半月形態の石庖丁で結晶片岩を石材としている。刃部稜は不明瞭。刃縁には刃こぼれが認められる。長さ4.4cm、幅9.9cm、厚さ0.7cm、紐間距離3.3cm、重量57.6g(第2層)

砥石(16)(17)2点出土している。

(16) 長さ9.2cm、幅9.6cm、厚さ7.2cm、重量829g(第2層)

(17) 長さ7.7cm、幅6.4cm、厚さ3.5cm、重量252g(第1層)

敲き石(18)

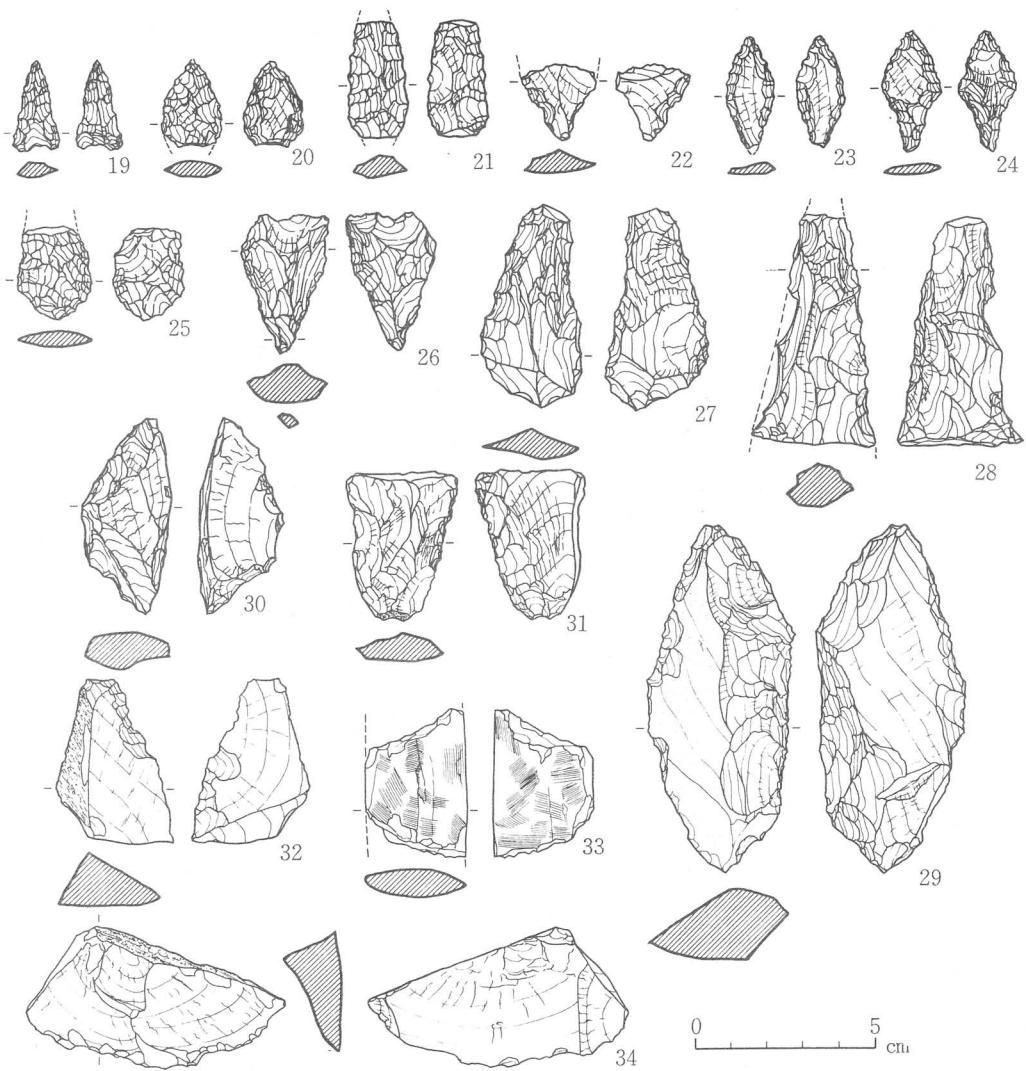
砂岩製の扁平な敲き石である。敲打痕が認められる。長さ7.1cm、幅6.3cm、厚さ3.7cm、重量233g(第1層)

その他の遺構・堆積層出土石器、表採石器(挿図28)

石鎌(19)~(25)

(19) 凹基無茎式の石鎌である。深さ2mmをはかる浅い凹基。側辺の形態は直線的にのびる。基辺に最大幅をもつ。両面とも周辺から比較的丁寧に調整剝離を施している。両面とも中央に鏑が通る。長さ2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重量1.0g(溝2)

(20) 基部は欠失している。側辺の形態は先端からふくらみをもってくだる。両面とも側辺から調整剝離を施しているが、中央に大剝離面を残す。長さ2.3cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量1.9g(溝2)



挿図28 その他の遺構・堆積層出土石器、表採石器

(21) 先端、基部ともに欠失している。側辺は直線的に並行する。両面とも側辺から調整剝離を施しているが、A面の調整が比較的揃っているのに対して、B面の調整は粗い。長さ3.1cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重量3.5g (建物5)

(22) 凸基有茎式の石鏃である。基部のみ残存。B面に主要剝離面をもつ剥片を素材にしている。A面は両側に、B面は右側にのみ、わずかに調整剝離を施している。長さ2.2cm、幅2.0cm厚さ0.7cm、重量2.2g (建物6)

(23) 凸基無茎式の石鏃である。基端は欠失している。側辺がふくらみをもってくだる柳葉

形のものである。全体に薄い作りものである。両面とも側辺から調整剝離を施しているが、中央には大剝離面が残る。長さ3.1cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量1.2g（土壌5）

(24) 凸基無茎式の石鎚である。先端と基端がわすかに欠失している。逆刺は右側が角ばるのに対し左側は不明瞭。両面とも側辺から調整剝離を施すが、中央に大剝離面が残る。基部の調整は丁寧である。長さ3.3cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重量1.5g（表採）

(25) 凸基無茎式の石鎚である。先端部は欠失している。側辺は直線的にのみ基部に至る。逆刺は角ばる。両面とも側辺から調整剝離を施しているが、不揃いである。長さ2.6cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重量3.0g（溝2）

石錐（26）

大きな頭部の下端がそのまま錐部になった石錐。全体の形態は逆三角形状を呈する。両面とも周辺から調整剝離を施している。長さ3.8cm、幅2.4cm、厚さ1.2cm、錐部断面0.4cm、重量2.2g（建物5）

石槍（27）～（29）

木の葉状のもの（27）（29）と直線的にのびる側辺をもつもの（28）がある。

(27) 先端と基端は欠失している。A面は側辺から調整剝離を施している。B面は右側辺からの調整が深く、左側辺近くまでおよんでいる。長さ5.7cm、幅2.8cm、厚さ1.0cm、重量15.7g（第2層）

(28) 先端、基部、左側辺の一部が欠失している。側辺は直線的にのびる。両面とも調整剝離を行っているが粗い。長さ6.4cm、幅3.4cm、厚さ1.3cm、重量27.6g（第4層）

(29) B面に主要剝離面をもち、A面右側に自然面が大きく残る。B面左側辺の調整剝離はステップ状を呈する。長さ9.7cm、幅4.1cm、厚さ1.9cm、重量72.8g（土壌6）

(30) A面に主要剝離面をもつ剝片を素材にしている。A面上辺、B面下辺に調整剝離を施している。長さ5.5cm、幅2.5cm、厚さ1.3cm、重量17.1g（出土地不明）

(31) 下端に自然面を残す剝片を素材にしている。B面右側辺に調整剝離を施して刃部を作っている。長さ4.1cm、幅3.05cm、厚さ0.8cm、重量11.7g（建物7）

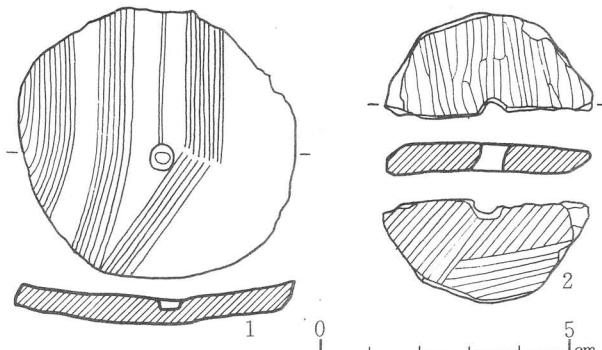
(32) 三角柱状の形態をもつ剝片。A面左側辺に自然面が残る。A面右側上辺、B面左側下辺に調整剝離を施している。長さ4.7cm、幅3.3cm、厚さ1.7cm、重量17.6g（建物5）

(34) 右側上辺に自然面が残る。下辺に調整剝離を施して外彎刃を作っている。長さ3.65cm、幅7.2cm、厚さ1.7cm、重量28.0g（第5層）

磨製石剣（33）

粘板岩製の石剣。先端部、基部ともに欠失している。側辺は直線的にのびる。両側縁ともに一部に平坦面をもつ。長さ4.15cm、幅2.75cm、厚さ0.85cm、重量12.2g（溝2）

3. 土 製 品



挿図29 溝1 出土紡錘車

円孔径0.5cm（第5層）

(2) 内外面ともにヘラミガキ調整の施された土器の破片を利用して作っている。胎土は生駒西麓産。径4.7cm、厚さ0.6cm、円孔径0.5cm（第2層）

紡錘車（挿図29）

紡錘車が2点溝1から出土している。ともに欠落した土器の再加工品である。

(1) 外面ヘラケズリ、内面刷毛目調整の施された土器の破片を利用して作っているが、未完成品。中央の円孔は貫通していない。径5.7cm、厚さ0.6cm、

4. 瓦

瓦（挿図30）

瓦は溝2、土壤1～4、井戸1、建物4、ピット59から出土しているが、量は少ない。瓦の種類には丸瓦と平瓦がある。丸瓦には玉縁の付いたものもある。いずれも完形のものはない。瓦には茶色もしくは淡紅色を呈する軟質のものと、灰色もしくは青灰色、黒色を呈する硬質のものがある。軟質のものは全体に厚ぼったいものが多く、硬質のものには薄いものが多い。調整は凸面に縄目タタキ、凹面に布目が認められるものが多いが、両面ともナデ調整の施されたものもある。また、凸面に縄目タタキ、凹面の布目の上に刷毛目調整の加えたものもある。

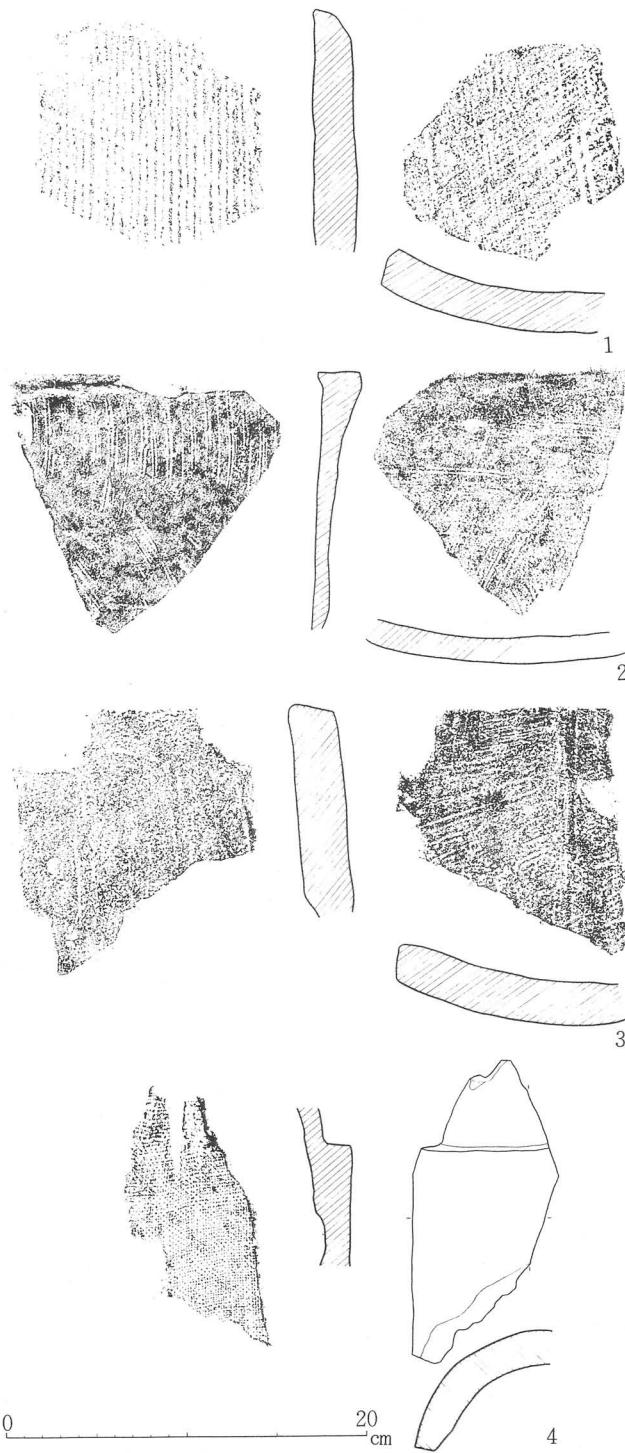
平瓦(1)～(3)

平瓦の(1)(2)は溝2から出土したものである。(1)は凸面に縄目タタキ、凹面に布目が認められる。(3)は土壤3から出土したものである。

丸瓦(4)

土壤1から出土したもので、玉縁付である。凸面はナデ調整、凹面には布目が認められる。

注1 大阪文化財センター『池上遺跡 第2分冊 土器編』（昭和59年）



挿図30 瓦

5. 小 結

ここでは、溝1から出土した弥生土器の特徴をまとめる。

器種は、広口壺形土器（A・B・C）、細頸壺形土器、太頸壺形土器、無頸壺形土器（A・B）、水差し形土器、鉢形土器（A・B・C）、高杯形土器（A・B）、甕形土器、甕用蓋形土器、ミニチュア土器などがある。広口壺形土器を中心とした壺形土器が最も多く、以下、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器とつづく。その他の器種は少ない。

搬入品に、生駒西麓の胎土をもつものがあり、全体の24%を占める。器種としては、広口壺形土器（A・B）、細頸壺形土器、太頸壺形土器、鉢形土器（B・C）、高杯形土器A、甕形土器がある。その他の地方からの搬入状況は、はっきりわからない。

以下、広口壺形土器を中心にして形態の特徴や各層ごとの形態の変化を記述する。

広口壺形土器Aには長頸のものと短頸のものがあるが、短頸のものが圧倒的に多い。口縁部の形状からみると1類が最も多い。この1類は、また、生駒西麓の胎土をもつ広口壺形土器Aの主流をなす口縁部の形状でもある。このように、主流をなす形態が生駒西麓の胎土をもつものと類似するということは、他の器種にもあてはまる。広口壺形土器Bでは1類や2類が多いこと、太頸壺形土器の存在などもそれである。ただし、文様の状況に差異が認められる。すなわち、生駒西麓の胎土をもつ広口壺形土器Aの1類は、すべて口縁部外面を簾状文で飾っている。付加するにしても、外面に刺突文や円形浮文、下端に刻み目、内面に円形浮文というような組み合わせに限られる。ところが、他の胎土をもつものは生駒西麓の胎土をもつものと共通する文様構成のものが多いとはいえ、その他に波状文、斜格子文、凹線文で飾ったり、内面には扇形文、列点文を施すなどバラエティーに富んでいる。

広口壺形土器Bの場合は、1類、2類とも口縁部外面に簾状文が施されることが多いという点では広口壺形土器Aと同じ傾向をしめしているが、全体的に文様の組み合わせが豊富なので、口縁部に関しては差異をみつけだすことはできなかった。ただし、頸部に関しては生駒西麓の胎土のものが櫛描直線文や簾状文で飾られているのに対して、その他の胎土のものは飾られていないものが多く、また、飾られていても頸部下半に飾られているだけという傾向が認められる。

つぎに、各層ごとの形態の変化をみてみる。

第6層には畿内第II様式からひきつづく形態である広口壺形土器Aがある。球形の体部に長い頸部がつき、口縁部が4類に近い1類である。頸部に文様が施されていないのが特徴的である。第5層から上層については、4類もあるが、量は少なく、また、残存状態も悪いので頸部

の状態についてはわからない。第5層から上については、むしろ、1類が圧倒的に多くなる。この傾向は1層までつづくが、同時に口縁部や頸部の形態が変化していく。このことは広口壺形土器Aだけではなく、広口壺形土器Bについても同じ傾向がたどれる。第5層の広口壺形土器B（挿図11-27）のように筒状の頸部から開く口縁部がつくものが、第4層になると広口壺形土器Bには同じように筒状の頸部のものが多いとはいえ、広口壺形土器Aの中に頸部から徐々に開いていく形態のもの（挿図13-54）があらわれてくる。それが第3層から上になると頸部から一気に外反する、ろう斗状のもので占められるようになる。^(注2)

しかし、このことは広口壺形土器Aの1類、広口壺形土器Bの1・2類についてのみあてはまるだけである。広口壺形土器Aの2・3類、および、広口壺形土器Bの3類については出土点数が少ないので、変化の方向をたどることができなかった。ただ、広口壺形土器Aについて1類などと比較してみると、1類ではろう斗状に開く口縁部のものが多い段階には、直立した後、外反する口縁部（挿図18-135、136）であることがわかる。

つぎに、施文状況を各層ごとにみてみると、第5層は櫛描直線文が多く、第4層は櫛描直線文と簾状文が多い。そして、鉢の台部などに凹線文を施したもの（挿図14-86）がでてくる。第3層は簾状文と櫛描直線文が多い。第2層では簾状文が多くなり、また、広口壺形土器Aの口縁部にも凹線文が施されるようになる。第1層で再び、櫛描直線文と簾状文が多くなる。

生駒西麓の胎土のものは、各層を通じて簾状文が多い。また、第3層から刻み目状の列点文も施されるようになる。

いずれにしても、溝1から出土した弥生土器の中心となる器形は、文様などの点で若干の差異があるとはいえる。おむね、生駒西麓の胎土をもつ土器と類似する形態をもち、また、同じような変化の方向をたどることが認められる。

以上のことから、溝1の各層の時期を従来の様式にあてはめると、畿内第Ⅲ様式でも古い様相をもつ第6層出土の広口壺形土器A（挿図11-15、16）を最も古いものとして、第5層までを畿内第Ⅲ様式に、凹線文が出現する第4層を畿内第Ⅲ様式の新段階に、第3層から第1層までを畿内第Ⅲ様式～第Ⅳ様式の時期と比定できるであろう。

(注1) 第2層出土の広口壺形土器A（挿図18-142）の口縁部外面の文様は磨滅が著しいので列点文にみえるが、本来、簾状文の可能性の方が高い。

(注2) この変化の方向は森井貞雄氏が「河内地方の畿内Ⅲ・Ⅳ様式の編年の一視点」の中で生駒西麓の胎土をもつ広口壺形土器A、いわゆる河内広口壺の型式編年としてとらえている方向と一致する。

森井貞雄『河内地方の畿内Ⅲ・Ⅳ様式の編年の一視点』（大阪文化誌 第15号）

V ま と め

中野遺跡は、丘陵地帯の間を貫って北流する石川によって形成された河岸段丘上に立地している。市内に所在する他の弥生時代中期の集落遺跡、すなわち、中野北方約2kmに位置する喜志遺跡や南方約2.5kmに位置する甲田南遺跡についても同様である。また、中野遺跡周辺の石川西岸にあたる中位段丘は、良好な面積を保っているため、条里制地割を残している。遺跡西方の羽曳野丘陵一帯の東斜面には、段丘を見おろすように、三角縁神獣鏡を伴った古墳時代前期の真名井古墳をはじめ、終末期古墳として有名なお龜石古墳が築造されている。お龜石古墳東方の丘陵裾には、飛鳥時代創建の新堂廃寺がある。さらに、遺跡のほぼ中央を南北に東高野街道が走り、街道の延長沿いには寺内町を代表とする旧村落が広がっている。

さて、中野遺跡が周知されはじめたのは1892年(明治25年)に、『人類学雑誌』に「河内に於ける石器の新発見地」として紹介されてからのことである。しかしながら、遺跡の内容が判明したのは、1970年に本格的な調査が実施されてからである。以後、1978年から引き続き富田林市教育委員会が発掘調査を実施してきたことは、概往の調査の項で述べたとおりである。ここでは、概往の調査結果を踏まえて、今回の調査結果をまとめてみることにしたい。

1. 調査地は、中位段丘の東縁から約3mの比高差をもつ下位段丘との境目付近にあたる。周辺が段丘から北東方向に開く谷筋に該当することと考え合わせると、弥生時代中期の一括した土器を大量に伴う幅3~4m、深さ2mを測るV字溝は、集落の南端をめぐる環濠的性格をもつ溝の可能性を考えられる。そういう想定のもとに集落の範囲を限定してみると、南北は、今回調査区と1982年12月から1983年2月に実施した調査区間の約400mとなる。また、東西について(注1)は、1981年7月から10月に実施した調査区東端から段丘東縁までの約400mとなる。

2. 弥生V字溝上層に、6世紀後半から7世紀にかけての遺物を伴う溝が存在することから考えて、中野遺跡南端付近の同時代期の遺構のあり方を検討する必要がある。

3. 鎌倉時代から室町時代に至る遺物を伴う土壙、溝、ピット等が、下位段丘近くで検出されたことは、中世遺構の存在範囲を再検討しなければならない。ひとつの材料として、1983年9月から11月にかけて実施した調査では、中世の遺構が従来推定範囲よりも北に広がることが判明している。過去の調査結果から、中世遺構の存在範囲は、弥生集落の推定範囲と重なり、更に北と南に拡大すると考える必要がある。

(注1) 富田林市教育委員会『中野遺跡発掘調査概要Ⅲ』(1983年)

付 遺 物 觀 察 表

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
広口壺形土器A	3-1	溝 1	口径 17.4 器高 (2.7)	○口頸部のみ残存。口縁端部は下外方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。 ○口縁部外面、簾状文(1単位13本)。	色調 明茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。金雲母、くさり礫。
高杯形土器A	3-2	溝 1	口径 19.6 器高 (3.5)	○杯底部、脚部欠損。稜をもってたちあがる口縁部。口縁上端は平坦。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。杯部内面、外面下半、横方向のヘラミガキ。 ○口縁部外面、列点文(1単位16、9本)。	色調 暗茶褐色 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。
高杯形土器A	3-3	溝 1	口径 27.2 器高 (3.6)	○杯底部、脚部欠損。稜をもってたちあがる口縁部。口縁端部は内側に肥厚。上端は平坦。 ○口縁部内外面とも磨滅のため調整不明。 ○口縁部外面、列点文。	色調 灰茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。
高杯形土器	3-4 6-4	溝 1	裾部径 9.6 器高 (6.2)	○脚柱部のみ残存。半中実の脚柱部。大きく開く脚台部。裾端部は丸くおさまる。 ○内外面ともナデ。	色調 淡茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
高杯形土器	3-5 6-5	溝 1	裾部径 12.8 器高 (7.4)	○脚柱部のみ残存。中実の脚柱部。大きく外彎気味に開く脚台部。裾端部は丸く肥厚する。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 赤茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
壺形土器	3-6	溝 1	口径 35.4 器高 (7.1)	○口縁部、体部上半残存。ほぼ水平に外反する口縁部。口縁端部は下外方へ拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内面、横方向のヘラミガキ。外面、磨滅のため調整不明。	色調 淡茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。 内面、口縁部外面に黒斑。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
底 部	3-7	溝 1	底径 6.8 器高 (7.0)	○底部残存。平底。 ○外面上半、斜方向のヘラミガキ。 外面下半、内面、外底面、ナデ。	色調 内 外 胎土	乳白色。 暗灰褐色。 0.1~0.2cm の砂粒。
底 部	3-8	溝 1	底径 7.0 器高 (3.4)	○底部残存。わずかに上げ底。 ○内外面とも刷毛目。外底面、ナデ。 内底面に指頭圧痕が残る。	色調 胎土	淡黄灰色。 0.1~0.2cm の砂粒。
杯 蓋	3-9	溝 1	口径 13.4 器高 (2.2)	○口縁部は外方へ開く。口縁端部は 丸くおさまる。 ○内外面とも回転ナデ。	色調 胎土 焼成	灰色。 密。 良好、堅緻。
杯 蓋	3-10	溝 1	口径 13.3 かえり径 11.3 器高 (1.8)	○杯身をさかさまにした蓋。口縁端 部は丸くおさまる。かえりは口縁 端部とならび、端部は尖る。 ○内外面とも回転ナデ。	色調 胎土 焼成 外面に自然釉付着。	灰青色。 密。 良好、堅緻。
杯	3-11	溝 1	口径 8.4 受部径 10.2 たちあがり高 0.4 器高 2.8	○たちあがりは内傾する。端部は尖 る。受部は上方にのび、端部は丸 くおさまる。 ○内外面とも回転ナデ。外底面はヘ ラ切り未調整。たちあがりはオリ コミ。	色調 胎土 焼成	灰色。 密。 良好、堅緻。
壺	3-12	溝 1	器高 (6.9)	○体部下半、高台部の一部のみ残存。 底部端部に高台が外開きに付く。 ○体部下半外面、回転ヘラケズリ。他 は回転ナデ。ロクロは右まわり。 内底面には高台貼り付け時の指頭 圧痕が回転ナデ下に残る。	色調 胎土 焼成	暗灰色。 粗。 良好、堅緻。
壺	3-13	溝 1	裾部径 7.3 高台高 1.7	○体部下半、高台部残存。底部端に 高台が外開きに付く。高台端部は 上端が拡張する。	色調 胎土	灰白色。 密。

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴			備考
				○形態	○技法	○文様	
広口壺形土器B			器高 (4.8)	○体部下半外面、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロは右まわり。			焼成 良好、堅緻。
	11-14	溝 1	口径 25.4	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反した後、上方に大きく、下方にわずかに拡張する口縁部。口縁端面は内傾する。口縁部上端は内側にわずかに肥厚し、上面は凹面を呈す。			色調 明赤褐色。
	6-14	第6層	器高 (7.7)	○口縁部内外面ヨコナデ。口縁部上端に強いナデ。頸部外面、ナデ。内面、横方向の刷毛目。端面は貼り付け。端面内面、頸部外面に指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、簾状文 (1単位8、10本)。			胎土 0.2cm、0.6cmの砂粒。
広口壺形土器A	11-15	溝 1	口径 24.0	○口頸部のみ残存。長い筒状の頸部に大きく外反する口縁部。口縁端部は斜め下方へわずかに拡張する。			色調 乳黄茶色。
	6-15	第6層	器高(14.8)	○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部外面、斜方向の刷毛目。内面、ナデ。ナデ下に指頭圧痕が残る。			胎土 0.1~0.2cmの砂粒。金雲母。
				○口縁下端、刻み目。			口縁部内外面に黒斑。
壺形土器	11-16	溝 1	腹径 15.8	○口頸部は欠損。球形の体部。底部は平底。			色調 明茶色。
	6-16	第6層	底径 6.0 器高(11.6)	○底部外面、横方向のヘラミガキ。体部内面、横方向の刷毛目、他は剥離のため調整不明。体部上半内面には粘土の継ぎ目が残る。			胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕形土器	11-17	溝 1 第6層	口径 9.4 腹径 10.1 器高 (3.7)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部は張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、ナデ。内面、斜方向のヘラミガキ。			色調 暗茶褐色 胎土 0.1cm程度の砂粒。 生駒西麓産。 外面に煤がべつとり付着。

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
甕形土器	11-18	溝 1 第6層	口径 13.0 腹径 15.2 器高 (6.1)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はやや張り出す。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、縦方向(下→上)のヘラケズリ。内面、ナデ。内面ナデ下には指頭圧痕が残る。		色調 淡茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。 口縁部外面、体部下半に煤付着。
甕形土器	11-19	溝 1 第6層	口径 18.3 腹径 19.0 器高(10.7)	○口縁部、体部残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上方に拡張する。体部はほとんど張らない。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、刷毛目。		色調 淡茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。 口縁部外面、体部外面下半に煤付着。
甕形土器	11-20 6-20	溝 1 第6層	口径 23.9 腹径 26.3 器高(10.1)	○口縁部、体部残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は下方へごくわずかに拡張する。体部は張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、ナデ、斜方向のヘラミガキ。内面、ナデ、一部、横方向の刷毛目。内面には指頭圧痕が残る。		色調 淡灰褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。 頸部外面に炭化物質付着。
甕形土器	11-21	溝 1 第6層	口径 36.6 器高 (6.7)	○口縁部、体部上半残存。斜め上方に外折する口縁部。口縁端部は下方へ拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、縦方向のヘラミガキ。内面、磨滅のため調整不明。内面には指頭圧痕が残る。		色調 外 明茶色 内 乳黄白色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 口縁部外面、体部外面下位に煤付着。 口縁部内面に粋痕。
底部	11-22	溝 1 第6層	底径 6.2 器高 (5.2)	○底部のみ残存。平底。 ○底部外面、縦方向のヘラミガキ。底部下端外面、外底面、ナデ。内面、ナデ。内面には指頭圧痕が残る。		色調 暗茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。 生駒西麓産。 外面、外底面、煤付着。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴			備考
				○形態	○技法	○文様	
底 部	11-23	溝 1	底径 5.6	○体部下半、底部のみ残存。上げ底。			色調 暗茶褐色
	6-23	第6層	器高(9.6)	○体部、底部上半外面、縦方向のヘラミガキ。底部下端外面、外底面、ナデ。他は磨滅のため調整不明。			胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 生駒西麓産。 体部内外面に黒斑。
広口壺形土器A	11-24	溝 1	口径 15.6	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下外方へ拡張する。			色調 淡褐色。
		第5層	器高(2.9)	○口縁部内外面、頸部内面、ヨコナデ。頸部外面、刷毛目。			胎土 0.1cm程度の砂粒
広口壺形土器C	11-25	溝 1	口径 9.0	○口頸部、肩部のみ残存。短い筒状の頸部に外反する口縁部。口縁端部は上、下に拡張する。			色調 淡灰褐色。
		第5層	器高(4.3)	○口縁部内外面、ヨコナデ。他はナデ。			胎土 0.1~0.2cmの砂粒。金雲母。
広口壺形土器A	11-26	溝 1	口径 19.4	○口縁部のみ残存。外反する口縁部。口縁端部は下外方へ拡張する。			色調 黒灰色。
		第5層	器高(2.1)	○内外面とも磨滅のため調整不明。 ○口縁部外面、簾状文。			胎土 0.1~0.2cmの砂粒。金雲母、くさり礫。
広口壺形土器B	11-27	溝 1	口径 19.7	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反した後、上方に大きく、下方ともに拡張する口縁部。口縁端面は内彎する。			色調 乳白色。
		第5層	器高(7.0)	○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部内面、横方向の刷毛目。外面、縦方向の刷毛目。口縁端面内面には指頭圧痕が残る。また、刺突文の施文時にとび出した粘土が内面に残る。 ○口縁部外面、簾状文（1単位18、14本）間に刺突文。			胎土 0.1~0.2cmの砂粒。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
広口壺形土器B	11-28	溝 1	口径 25.0	○口頸部のみ残存。筒状の頸部から外反した後、上方に大きく、下方ともに拡張する口縁部。口縁端面は内傾する。口縁端部は内側へわずかに肥厚する。		色調 暗茶褐色。
	7-28	第5層	器高(13.2)	○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部外面、ナデ。内面、横方向、縦方向の刷毛目。頸部内面には刷毛目下に指頭圧痕が残る。		胎土 0.1~0.4cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。
				○口縁部外面、頸部外面、簾状文(1単位12本)。		口縁部外面に黒斑。
底部	11-29	溝 1 第5層	底径 5.8 器高(6.4)	○底部のみ残存。底部は平底。		色調 淡茶黄色。
				○外面、縦方向のヘラミガキ。他は剥離と磨滅のため調整不明。		胎土 0.1cm程度の砂粒。 内面に炭化物質付着。
底部	11-30	溝 1 第5層	底径 7.8 器高(4.0)	○底部のみ残存。上げ底。体部に向って大きく張り出す。		色調 淡茶褐色。
				○底部外面、斜方向のヘラミガキ。内面、縦方向の刷毛目。内外とも底面に指頭圧痕が残る。		胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 外面に煤付着。
底部	11-31	溝 1 第5層	底径 6.8 器高(2.5)	○底部のみ残存。平底。丸みをもつて体部に向う。		色調 灰茶色。
				○内外面ともナデ。底部下端外面、底面外周に指頭圧痕が残る。		胎土 0.1cm程度の砂粒。
底部穿孔土器	11-32	溝 1	底径 6.2	○底部のみ残存。平底。底部のほぼ中央に円孔。		色調 外 茶褐色。 内 明茶色。
	7-32	第5層	器高(2.7)	○外面、縦方向のヘラミガキ。外外面、ヘラケズリ。他はナデ。内底面に指頭圧痕が残る。円孔は焼成後。		胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 内底面に炭化物質付着。 外面に煤付着。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴			備考
				○形態	○技法	○文様	
高杯形土器	12-33	溝 1	脚裾径13.0	○脚台部残存。中空の脚柱部。柱状部下方からなだらかに開く脚裾部。裾部はわずかに広がる。裾端部は丸くおさまる。			色調 明赤桃色。
	7-33	第5層	器高(11.1)	○柱状部外面、縦方向のヘラミガキ。内面、絞り目。他は磨滅のため調整不明。裾部内面上半には指頭圧痕が残る。			胎土 0.1~0.3cm程度の砂粒。
甕形土器	12-34	溝 1	口径 12.6	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はやや張る。			色調 茶褐色。
		第5層	腹径 13.6 器高(7.4)	○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。			胎土 0.1cm程度の砂粒。 口縁部外面、体部外面下位に煤付着。
甕形土器	12-35	溝 1	口径 15.2	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。体部は張り出さない。最大径を口縁部にもつ。			色調 淡黄褐色。
		第5層	腹径 14.7 器高(5.8)	○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。			胎土 0.1~0.2cmの砂粒。金雲母。
甕形土器	12-36	溝 1	口径 15.1	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。体部は張り出さない。最大径を口縁部にもつ。			色調 茶褐色。
		第5層	腹径 14.6 器高(5.6)	○口縁部内外面、ヨコナデ。内面には指頭圧痕が残る。			胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 口縁部、体部外面に煤付着。
甕形土器	12-37	溝 1	口径 17.5	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。体部は張る。			色調 淡黄褐色。
		第5層	器高(7.8)	○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、斜方向、横方向のヘラミガキ。内面、ナデ。			胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕形土器	12-38	溝 1	口径 17.6 腹径 17.8 器高(5.5)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はわずかに張る。			色調 暗灰褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。

() は残存値

器種	插図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
				○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、ナデ。内面、剝離のため調整不明。内面には粘土の継ぎ目が目立つ。		
甕形土器	12-39	溝 1 第5層	口径 16.3 腹径 15.5 器高(6.6)	○口縁部、体部上半残存。斜め上方に短く外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。体部は張らない。口縁部に最大径をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内面、縦方向の刷毛目。外面、磨滅のため調整不明。	色調 淡褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。	体部外面に煤付着。
甕形土器	12-40	溝 1 第5層	口径 17.4 腹径 21.6 器高(15.0)	○口縁部、体部残存。短く外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。体部は大きく張り出す。最大径を腹部にもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面上半、斜方向の刷毛目。下半、縦方向(下→上)のヘラケズリ。内面上半、ナデ。下半、縦方向の刷毛目。内面、刷毛目下に粘土の継ぎ目が残る。	色調 淡褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。	口縁部外面、体部外面下半に煤付着。
甕形土器	12-41	溝 1 第5層	口径 20.2 器高(5.8)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、ナデ。内面、斜方向のヘラミガキ。	色調 淡褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。	
甕形土器	12-42	溝 1 第5層	口径 22.5 器高(4.9)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○口縁部内外面、体部外面、ヨコナデ。内面、刷毛目。	色調 淡黄褐色。 胎土 0.1~0.4cmの砂粒。	
甕形土器	12-43 7-43	溝 1 第5層	口径 22.8 腹径 25.5 器高(9.7)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は下方にごくわずかに拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、横方向のヘラミガキ。内面、横方	色調 明黄褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。	

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
				向の刷毛目。内面刷毛目下には、指頭圧痕が残る。		
壺形土器	12-44	溝 1	口径 34.7	○口縁部、体部上半残存。わずかに直立した後、短く外反する口縁部。口縁端部は下外方に拡張する。体部は大きく張り出す。	色調 淡灰褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。金雲母。	
	7-44	第5層	器高(9.8)	○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、斜方向のヘラミガキ。内面、刷毛目の上から横方向のヘラミガキ。	口縁部外面、体部外面に煤付着。	
壺形土器	12-45	溝 1	口径 14.0	○口縁部のみ残存。斜め上方に短く外反する口縁部。口縁端部は下外方へわずかに拡張する。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。	
		第5層	器高(2.4)	○口縁部内外面、ヨコナデ。内面、横方向のヘラミガキ。内面には指頭圧痕が残る。	生駒西麓産。	
壺形土器	12-46	溝 1	口径 17.8	○口縁部、体部上半残存。内面に丸みをもって外反する口縁部。口縁端部は下外方へわずかに拡張する。	色調 暗茶褐色 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。	
		第5層	器高(3.7)	○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、横方向のヘラミガキ。外面には指頭圧痕が残る。	生駒西麓産。 内外面とも煤付着。	
壺形土器	12-47	溝 1	口径 15.5	○口縁部、体部上半残存。内面に丸みをもって外反する口縁部。口縁端部は上、下にわずかに拡張する。体部は張り出す。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。角閃石、金雲母。	
	7-47	第5層	器高(5.9)	○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。内外面とも指頭圧痕が残る。内面には、粘土の継ぎ目も残る。	口縁部外面、体部外面下半に煤付着。	
壺形土器	12-48	溝 1	口径 34.3	○口縁部、体部上半残存。内面に丸みをもって外反する口縁部。口縁端部は下方に拡張する。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.3cmの砂粒。角閃石、金雲母、くさり礫。	
		第5層	器高(5.5)	○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、横方向のヘラミガキ。		

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
広口壺形土器A	13-49	溝 1 第4層	口径 25.6 器高(2.0)	○口縁部のみ残存。口縁端部は面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。 ○口縁部下端、刻み目。		色調 明黄茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
広口壺形土器A	13-50	溝 1 第4層	口径 17.0 器高(1.0)	○口縁部のみ残存。大きく外反する口縁部。口縁部内面は端部と同じ高さ。口縁端部は上下に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。 ○口縁部下端、刻み目。		色調 明黄茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
広口壺形土器A	13-51	溝 1 第4層	口径 26.7 器高(2.1)	○口頸部のみ残存。大きく外反する口縁部。口縁端部は上方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部外面、縦方向の刷毛目。内面、ナデ。 ○口縁部外面、波状文(1単位7本)。		色調 乳灰白色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 口縁部内面に黒斑。
広口壺形土器A	13-52	溝 1 第4層	口径 30.2 器高(1.5)	○口縁部のみ残存。口縁端部は下方へ拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。 ○口縁部外面、斜格子文(1単位2本)。口縁部下端、刻み目。		色調 乳白色。 胎土 精良。 口縁部上端に黒斑。
広口壺形土器A	13-53	溝 1 第4層	口径 25.2 器高(3.3)	○口頸部のみ残存。外反する口縁部。口縁端部は下外方へ拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部外面、斜方向の刷毛目。 ○口縁部下端、刻み目。		色調 茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
広口壺形土器A	13-54	溝 1 第4層	口径 23.3 器高(4.6)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下外方に拡張する。 ○口頸部内外面、剝離と磨滅のため調整不明。		色調 乳白色。 胎土 0.2cm程度の砂粒。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
				○口縁部外面、簾状文(1単位6本)の上、深い刺突文。頸部外面、簾状文(1単位11本)。	
広口壺形土器A	13-55	溝 1 第4層	口径 19.4 器高(1.6)	○口縁部のみ残存。口縁端部は下外方へ拡張する。 ○口縁部外面、ヨコナデ。内面、横方向の刷毛目。 ○口縁部外面、波状文(1単位3)。口縁部下端、効み目。	色調 赤褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
広口壺形土器C	13-56	溝 1 第4層	口径 12.6 器高(5.9)	○口頸部のみ残存。短い頸部に外反する口縁部。口縁端部は上、下にわずかに拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部外面、縦方向の刷毛目。内面、横方向の刷毛目。頸部内面には粘土の継ぎ目、指頭圧痕が残る。	色調 明赤褐色。 胎土 0.2cm程度の砂粒。 口縁部外面に煤付着。
広口壺形土器B	13-57	溝 1 第4層	口径 16.2 器高(7.7)	○口頸部のみ残存。口縁部下端欠損。頸部からなだらかに外反した後、上方に大きく拡張する口縁部。おそらく下方にも拡張。口縁端面は内傾する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。端面内外面ともモコナデ下に指頭圧痕が残る。頸部外面、磨滅のため調整不明。内面、横、斜方向の刷毛目。 ○口縁部外面、頸部外面、櫛描直線文(1単位10本)。	色調 明茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
広口壺形土器B	13-58 7-58	溝 1 第4層	口径 19.6 器高(9.2)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反した後、上・下に大きく拡張する口縁部。口縁端面は内傾する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。口縁部土端に強いナデ。口縁端面は貼り付け。端面内面にはヨコナデ下に指頭圧痕が残る。頸部外面、斜縦方向の刷毛目。内面、横、斜方向の刷毛目。 ○口縁部外面、簾状文(1単位8本)。扇形文(1単位8本)。	色調 淡褐色。 内外面とも斑点状に乳白色の部分がある。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
広口壺形土器B	13-59 8-59	溝 1 第4層	口径 24.5 器高(15.8)	○口頸部、肩部のみ残存。外反した後、上方に大きく下方にわずかに拡張する口縁部。口縁端面は内傾する。太い筒状の頸部。肩部は張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。口縁部上端に強いナデ。口縁端面は貼り付け。端面内面にはヨコナデ下に	色調 淡褐色 胎土 0.3~0.5cmの砂粒。 口縁部、頸部、肩部の一部に黒斑。

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
				指頭圧痕が残る。頸部、肩部内外面、ナデ。頸部下半から肩部にかけてナデ下に指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、簾状文(1単位6、8本)、頸部外面、簾状文(1単位6本)、肩部外面、波状文(1単位5本)。		
広口壺形土器A	13-60	溝1 第4層	口径 18.5 器高(2.7)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。 ○口縁部外面、簾状文(1単位12本)、頸部外面、簾状文。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。	
広口壺形土器A	13-61	溝1 第4層	口径 19.2 器高(3.1)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部はやや下外方に拡張する。 ○口縁部内外面、頸部内面、磨滅のため調整不明。頸部外面、ナデ。 ○口縁部外面、簾状文(1単位10本)、頸部外面、簾状文。	色調 明茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。 口縁部上面に黒斑。	
広口壺形土器A	13-62	溝1 第4層	口径 20.2 器高(7.0)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下外方に拡張する。 ○口縁部下端、ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明。 ○口縁部外面、簾状文(1単位11本)、頸部外面、櫛描直線文(1単位11本)、簾状文(1単位11本)。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.2~0.3cmの砂粒。角閃石。 口縁部、頸部外面に黒斑。	
広口壺形土器A	13-63 8-63	溝1 第4層	口径 22.0 器高(17.6)	○口頸部、肩部残存。比較的長い頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部はやや下外方に拡張する。頸部から肩部にかけてなだらかなカーブをえがく。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部上半内外面、頸部下半、肩部内面、ナデ。頸部下半、肩部外面、横方	色調 暗茶褐色。 胎土 0.2~0.4cmの砂粒。角閃石、金雲母。 口頸部、肩部に黒斑。	

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
				向のヘラミガキ。頸部内面には指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、簾状文(1単位13本)。 頸部上半外面、櫛描直線文(1単位10、12本)。頸部下半外面、簾状文(1単位12、13本)。		
広口壺形土器A	13-64	溝 1 第4層	口径 26.8 器高(3.1)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下外方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部内外面、横方向の刷毛目。 ○口縁部外面、簾状文(1単位11本)。 口縁部下端、刻み目。口縁部内面、円形浮文。	色調 暗茶褐色。 胎土 精良。 0.1cm程度の砂粒。 角閃石の量は少ない。 生駒西麓産。 口縁部上面、口頸部外面に黒斑。	
広口壺形土器B	13-65	溝 1 第4層	口径 22.0 器高(7.6)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は上方に大きく、下方も拡張する。口縁端面は内傾する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。口縁端面内面にはヨコナデ下に指頭圧痕が残る。頸部外面、ナデ。口縁端面は上部を貼りたす。 ○口縁部外面、縦線文(1単位13本)の上に刺突文。頸部外面、櫛描直線文(1単位13本)。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.2~0.4cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。	
広口壺形土器B	13-66	溝 1 第4層	口径 18.6 器高(9.7)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反した後、上、下に大きく拡張する口縁部。口縁端面は内傾する。口縁端部は内側にわずかに肥厚し、上端はわずかに凹む。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部外面、横方向のヘラミガキ。内面、ナデ。頸部内面にはナデ下に指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、列点文(1単位10本)、簾状文(1単位12本)の上を刺突文。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。 口縁部端面、内面に黒斑。	

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徴	備考
				頸部外面、簾状文(1単位12本)。		
広口壺形土器B	13-67 8-67	溝 1 第4層	口径 14.8 器高(14.4)	○口頸部、肩部残存。比較的長い頸部からなだらかに外反した後、上、下に大きく拡張する口縁部。口縁端面は内傾する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部外面、縦方向の刷毛目。内面、ナデ、一部刷毛目。肩部内面、ナデ。文様帶間磨研線。 ○口縁部外面、列点文(1単位8本)、扇形文(1単位10本)、簾状文(1単位8本)。頸部外面、櫛描直線文(1単位9本)。頸部から肩部、簾状文(1単位9本)。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。	
細頸壺形土器	14-68	溝 1 第4層	口径 11.1 器高(4.3)	○口頸部のみ残存。筒状の頸部にはほぼ直立する口縁部。口縁端部は内側に肥厚して丸くおさまる。 ○口頸部内外面、ナデ。調整は粗雑。	色調 乳灰白色。 胎土 0.2cm程度の砂粒。	
細頸壺形土器	14-69	溝 1 第4層	口径 9.2 器高(5.1)	○口頸部のみ残存。筒状の頸部にやや内彎する口縁部。口縁端部は内傾して面をもつ。 ○口縁部外面、ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明。 ○口縁部外面、四線文。	色調 淡黄褐色。 胎土 0.1cmの砂粒。くさり礫。 口縁部外面に黒斑。	
壺用蓋形土器	14-70 8-70	溝 1 第4層	口径 11.0 つまみ径 3.0 器高 4.6	○大きなつまみをもつ笠形。口縁部はわずかに広がる。口縁端部は丸くおさまる。2個1組の紐孔。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 明赤褐色。 胎土 0.1~0.3cmの砂粒。	
壺用蓋形土器	14-71	溝 1 第4層	つまみ径 2.8 器高(3.2)	○口縁部欠損。大きなつまみをもつ笠形。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 淡黄褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。 天井部内面に黒斑。	

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴			備考
				○形態	○技法	○文様	
壺用蓋形土器	14-72	溝 1 第4層	口径 12.4 器高 4.4	○つまみ部に欠損。口縁部は大きく広がる。口縁端部は下方へわずかに拡張する。2個1組の紐孔。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。			色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。 外面に煤付着。
無頸壺形土器	14-73 8-73	溝 1 第4層	口径 20.0 器高(15.6)	○底部は欠損。直立する口縁部。口縁部上端はわずかに凹面を呈す。 口縁部から底部にむかって丸みをもって下る。最大径を口縁部にもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、横方向の刷毛目。内面、ナデ。底部に近い部分では放射状にナデあげている。体部内面にはナデ下に指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、四線文。			色調 淡茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 底部付近は二次焼成を受けたため赤変。
無頸壺形土器	14-74	溝 1 第4層	底径 6.0 器高(7.5)	○底部残存。丸みをもった体部からわずかに突出する底部。ほぼ平底。 ○体部から底部外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。ナデ下に粘土の継ぎ目が残る。外底面、磨滅のため調整不明。			色調 淡黄褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒を多量に含む。 体部外面から外底面にかけて黒斑。
鉢形土器A	14-75	溝 1 第4層	口径 11.4 器高(2.5)	○口縁部のみ残存。やや内彎する直口。口縁端部は内傾し、内側に肥厚する。 ○口縁部上端、ヨコナデ。内面外面ナデ。外面にヘラのあたりがある。			色調 暗茶褐色。 胎土 精良。 金雲母。 外面に黒斑。
鉢形土器A	14-76	溝 1 第4層	口径 20.0 腹径 21.2 器高(7.2)	○口縁部、体部上半残存。やや内彎する直口。体部は丸みをもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、剥離の			色調 淡灰褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 外面下半に黒斑。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
				ため調整不明。口縁下内面に指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、簾状文(1単位11、8本)。		
鉢形土器C	14-77	溝 1 第4層	口径 15.8 腹径 15.1 器高(4.1)	○口縁部、体部上半残存。短く外反する口縁部。端部はわずかに下外方に拡張する。体部は丸みをもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内外面、ナデ。外面には部分的にヘラミガキらしき調整もみられる。内面にはナデ下に指頭圧痕が残存。	色調 暗灰褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。	
鉢形土器C	14-78 8-78	溝 1 第4層	口径 17.3 腹径 18.5 器高(4.3)	○口縁部、体部残存。短く外反する口縁部。端部はわずかに下外方に拡張する。体部はやや張り、腹部にわずかに稜をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内外面、ナデ。腹部内外面、横方向のヘラミガキ。 ○体部外面、櫛描直線文(1単位10本)。	色調 明黄茶色。 胎土 0.2~0.3cmの砂粒。	
鉢形土器C	14-79 8-79	溝 1 第4層	口径 19.0 腹径 22.0 器高(4.7)	○口縁部、体部上半残存。短く外反する口縁部。端部はわずかに下外方に拡張。体部は大きく張り出す。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、横方向のヘラミガキ。内面、ナデ。 ○体部外面、簾状文(1単位5本)。	色調 明茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。	
鉢形土器C	14-80 9-80	溝 1 第4層	口径 26.3 腹径 27.1 器高(5.4)	○口縁部、体部上半残存。短く外反する口縁部。端部はやや下外方に大きく拡張。体部は丸みをもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内外面、ナデ。体部内面にはナデ下に指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、列点文(1単位10本)。	色調 灰茶褐色。 胎土 0.2cm程度の砂粒。 体部外面に炭化物質付着。	

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土番号	法量(cm)	特 ○形態 ○技法	微 ○文様	備考
				体部外面、簾状文(1単位10本)。		
鉢形土器B	14-81	溝 1 第4層	口径 21.2 腹径 21.9 器高(6.1)	○口縁部、体部残存。内傾する段状の口縁部。体部はやや張り、腹部に稜をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内面、横方向のヘラミガキ。腹部内面に粘土の継ぎ目が残存。 ○口縁部、体部外面、簾状文(1単位6本)。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.2~0.3cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。	
鉢形土器C	14-82 9-82	溝 1 第4層	口径 21.4 腹径 20.6 器高(5.9)	○口縁部、体部残存。短く外反する口縁部。端部は下方に拡張する。体部はやや張り、腹部にわずかに稜をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内外面、横方向のヘラミガキ。文様帶間磨研線。 ○口縁部外面、簾状文(1単位10本)、体部外面、簾状文(1単位15、13本)。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。 体部外面に黒斑。	
高杯形土器B	14-83	溝 1 第4層	器高(5.4)	○口縁端部欠損。杯部上半残存。浅い椀状の杯部。水平に広がる口縁部。水平口縁内側に断面四角形の凸帯が1本めぐる。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、ナデ。内面、斜方向の刷毛目。	色調 外 茶色。 内 暗灰褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 体部内面に黒斑。	
高杯形土器	14-84	溝 1 第4層	器高(4.4)	○脚柱部のみ残存。中空の脚柱部。 ○外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。内面に粘土の貼りたしがみられる。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。	
台付鉢形土器	14-85 9-85	溝 1 第4層	脚裾径10.8 器高(5.9)	○脚台部のみ残存。内傾する裾部。裾部下半に透孔推定8ヶ所。 ○内面、ナデ。文様帶間磨研線。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.4cmの砂粒。角閃石。	()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
				○裾部外面、列点文(1単位20本)。		生駒西麓産。 裾部上半外面に黒斑。
台付鉢形土器	14-86	溝 1 第4層	器高(10.4)	○口縁部、裾端部欠損。比較的深い椀状の鉢部。斜めに広がる脚部。 ○鉢部外面、縦方向(下→上)のヘラケズリ。内面、斜方向の刷毛目。内底面、ナデ。脚部内外面、磨滅のため調整不明。脚部透孔推定4ヶ所。円板充填法。 ○裾部外面、凹線文。		色調 黄褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。くさり礫。 鉢部外面上半、脚部に黒斑。
台付鉢形土器	14-87 9-87	溝 1 第4層	脚裾径 8.1 器高(4.8)	○脚台部のみ残存。内彎する裾部。裾端部、内方へ拡張して面をもつ。 ○脚部内面上半、斜方向の刷毛目。他、内外面、ナデ。裾部、透孔推定8ヶ所。		色調 灰茶褐色。 胎土 0.1~0.4cmの砂粒。 裾部外面に黒斑。
台付鉢形土器	14-88	溝 1 第4層	脚裾径 4.4 器高(4.3)	○口縁部、体部欠損。脚台部は小さい。中実の脚柱部。斜めに広がる裾部。 ○外面、縦方向のヘラミガキ。内面、磨滅のため調整不明。		色調 茶褐色。 胎土 0.2~0.3cmの砂粒。くさり礫。 外面半分に黒斑。
高杯形土器	14-89	溝 1 第4層	脚裾径10.4 器高(2.6)	○裾部のみ残存。斜めに広がる裾部。裾端部は上方に拡張する。 ○裾端部内外面、ヨコナデ。内面、ナデ。外面、磨滅のため調整不明。		色調 乳白色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。0.7cmの小石。
把手	14-90	溝 1 第4層	幅 3.4 厚さ 1.2	○把手半分残存。おそらく半環状の把手。断面、橢円形。 ○内外面ともナデ。 ○外面、刺突文。		色調 明茶黄色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
壺形土器	15-91	溝 1 第4層	口径 11.5 腹径 12.4 器高(5.5)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部は張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、		色調 外 灰褐色 内 明茶色 胎土 0.1cm程度の砂粒。

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土番号	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
				縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。内面には指頭圧痕が残る。	体部外面上位に煤付着。
甕形土器	15-92	溝 1 第4層	口径 13.2 腹径 14.5 器高(4.9)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部は張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。	色調 外 暗灰褐色。 内 明茶色 胎土 0.1cm程度の砂粒。 口縁部から体部にかけて黒斑。外面に煤付着。
甕形土器	15-93	溝 1 第4層	口径 19.8 器高(3.6)	口縁部、体部上半残存。斜め上方に外折する口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、横方向のヘラミガキ。内面、ナデ。	色調 淡茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕形土器	15-94	溝 1 第4層	口径 14.3 器高(4.3)	○口縁部、体部上半のみ残存。くの字に外反する口縁部。体部は張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内面、刷毛目。外面、剥離のため調整不明。頸部外面に指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、沈線。	色調 淡灰褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 口縁部上面に煤付着。
甕形土器	15-95	溝 1 第4層	口径 13.6 器高(5.5)	○口縁部、体部上半残存。短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部は張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、ナデ。内面、磨滅のため調整不明。	色調 淡灰褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。 口縁部内外面に煤付着。
甕形土器	15-96	溝 1 第4層	口径 22.2 器高(4.7)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部は大きく張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、ナデ。内面、横方向、斜方向の刷毛目。内面に指頭圧痕が残る。	色調 淡灰褐色。 胎土 0.1~0.2cm程度の砂粒。 内面にべっとり煤付着。

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕形土器	15-97	溝 1 第4層	口径 20.7 器高(7.1)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は下方へ拡張する。体部は大きく張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内外面、ナデ。頸部外面に指頭圧痕が残る。	色調 淡茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕形土器	15-98	溝 1 第4層	口径 22.6 器高(7.1)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上方へわずかに拡張する。体部は大きく張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。	色調 明褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕形土器	15-99	溝 1 第4層	口径 16.2 器高(4.9)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上方へ拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向の刷毛目。内面、ナデ。内面ナデ下に指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、凹線文。	色調 明茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 口縁部内外面、体部下半に黒斑。
甕形土器	15-100	溝 1 第4層	口径 29.2 器高(5.6)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は下方へ拡張する。体部は張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、横方向のヘラミガキ、一部、刷毛目。	色調 暗茶褐色 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。 内外面ともに煤付着。
甕形土器	15-101	溝 1 第4層	口径 17.0 腹径 15.8 器高(5.2)	○口縁部、体部上半残存。ほぼ水平に外折する口縁部。口縁端部は上方へわずかに拡張する。最大径を口縁部にもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内面、ナデ。外面、磨滅のため調整不明。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。 口縁部外面に煤付着。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
甕形土器	15-102 9-102	溝 1 第4層	口径 30.0 腹径 36.8 底径 10.0	○体部下半欠損。丸く外反する口縁部。口縁端部は上、下に拡張する。体部は張る。底部は平底。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。底部下端、横方向のヘラミガキ。外底面、ヘラミガキ。内面、斜方向の刷毛目。内底面には指頭圧痕が残る。	○文様	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。 外面に黒斑。 体部外面上位に煤付着。
底部	15-103	溝 1 第4層	底径 8.0 器高(7.1)	○底部残存。上げ底。 ○底部外面上半、外底面、ヘラケズリ。底部外面下半、ナデ。ナデ下に指頭圧痕が残る。内面、磨滅のため調整不明。	○文様	色調 明茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 外面下位に煤付着。
底部	15-104	溝 1 第4層	底径 5.8 器高(4.2)	○底部残存。平底。 ○内外面とも剥離と磨滅のため調整不明。	○文様	色調 乳黃白色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。金雲母。 外底面に黒斑。
底部	15-105	溝 1 第4層	底径 5.3 器高(3.7)	○底部残存。上げ底。 ○内外面ともナデ。	○文様	色調 明褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。くさり礫。 外面1/3に黒斑。
底面	15-106	溝 1 第4層	底径 5.0 器高(3.0)	○底部残存。上げ底。 ○外面、横方向のヘラミガキ。他はナデ。内底面の調整は粗雑。	○文様	色調 淡茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。 内面に煤付着
底部	15-107	溝 1 第4層	底径 5.4 器高(3.2)	○底部残存。平底。 ○外面、外底面、ナデ。内面、磨滅のため調整不明。	○文様	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。角閃石。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
					生駒西麓産。 外面に煤付着。
底 部	15-108	溝 1 第4層	底径 4.2 器高(2.1)	○底部残存。わずかに上げ底。 ○外面、縦方向のヘラミガキ。内外面、ナデ。外底面、ヘラミガキ。内底面に指頭圧痕が残る。	色調 茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。角閃石。 生駒西麓産。
広口壺形土器A	16-109	溝 1 第3層	口径 21.2 器高(2.1)	○口縁部のみ残存。外反する口縁部。口縁端部は下方へ拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。 ○口縁部外面、簾状文(1単位22本)。	色調 明茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
広口壺形土器A	16-110	溝 1 第3層	口径 23.7 器高(4.4)	○口頸部残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下方へ拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内外面ともナデ。 ○口縁部外面、簾状文(1単位17本)の上刺突文。頸部外面、簾状文。	色調 明黄茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 頸部外面に黒斑。
広口壺形土器C	16-111	溝 1 第3層	口径 12.0 器高(3.4)	○口頸部のみ残存。短い筒状の頸部から外反する口縁部。口縁端部下外方に拡張する。 ○内外面ともヨコナデ。頸部外面には指頭圧痕が残る。	色調 暗灰茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。 口縁部外面に煤付着。
広口壺形土器A	16-112	溝 1 第3層	口径 12.2 器高(1.5)	○口縁部のみ残存。外反する口縁部。口縁端部は下方へ内傾気味に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面に指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、簾状文(1単位10本)。内面、円形浮文。	色調 乳黄白色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○影態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
広口壺形土器C	16-113	溝 1 第3層	口径 10.0 器高(3.3)	○口頸部残存。短い筒状の頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は上方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明。		色調 明黄茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
広口壺形土器A	16-114	溝 1 第3層	口径 24.2 器高(5.5)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下方へ拡張する。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。 ○口縁部外面、簾状文(1単位17本)、頸部外面、簾状文(1単位31本)。		色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.4cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。 口頸部内面に炭化物質付着。
広口壺形土器A	16-115	溝 1 第3層	口径 23.4 器高(2.8)	○口頸部のみ残存。なだらかに外反した後、開く口縁部。口縁端部は上方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部内外面、ナデ。 ○口縁部外面、波状文(1単位7本)、口縁部下端、刻み目。		色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。 口縁部外面に煤付着。
広口壺形土器B	16-116 9-116	溝 1 第3層	口径 22.0 器高(6.5)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反した後、上、下に大きく拡張する口縁部。口縁端面は内傾する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内外面、ナデ。口縁端面内面には指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、簾状文(1単位14本)、扇形文。		色調 淡黄褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
細頸壺形土器	16-117	溝 1 第3層	口径 10.4 器高(3.1)	○口頸部のみ残存。内傾気味に開く口縁部。 ○口縁部内外面、ナデ。内面には指頭圧痕が残る。		色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
				○口頸部外面、列点文(1単位9本)。	生駒西麓産。
高杯形土器A	16-118	溝 1	口径 23.2	○杯底部、脚部欠損。丸みをもって立ちあがる口縁部。	色調 暗茶褐色。
	9-118	第3層	器高(4.4)	○口縁部内外面、ヨコナデ。杯部外 面下半、横方向、縦方向のヘラミ ガキ。内面、ナデ。	胎土 0.1cm程度 の砂粒。角閃石。 生駒西麓産。
				○口縁部外面、列点文(1単位12、 9、8本)。	外面に煤付着。
鉢形土器B	16-119	溝 1	口径 20.4	○口縁部、体部のみ残存。内傾する 段状の口縁部。口縁部上端は凹む。 体部は張る。	色調 乳黄褐色。
		第3層	器高(5.0)	○内外面ともヨコナデ。波状文に沿 って、内面のヨコナデは波うつて いる。	胎土 0.1~0.2cm の砂粒。金雲母。
				○口縁部外面、凹線文。体部外面、 波状文(1単位10、7本)。	
鉢形土器C	16-120	溝 1	口径 41.0	○口縁部、体部上半残存。直立する 段状の口縁部。口縁部下端は拡張 する。	色調 乳黄白色。
		第3層	器高(6.4)	○口縁部内外面、ヨコナデ。他は磨 滅のため調整不明。	胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
				○口縁部外面、簾状文(1単位22本)。 体部外面、簾状文(1単位24本)。	
高杯形土器	16-121	溝 1	器高(8.1)	○脚柱部のみ残存。中実の脚柱部。	色調 乳黄白色。
		第3層		○外面、縦方向のヘラミガキ。他は 磨滅のため調整不明。	胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
台付鉢形土器	16-122	溝 1	脚裾径 4.8	○脚台部のみ残存。斜めに広がる小 型の脚台部。	色調 茶褐色。
		第3層	器高(3.4)	○内外面ともナデ。内外面とも指頭 圧痕が残る。	胎土 0.1~0.2cm の砂粒。金雲母。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
高杯形土器	16-123	溝 1 第3層	脚裾径13.6 器高(2.5)	○脚裾部のみ残存。斜めに広がる裾部。裾端部は上外方に拡張する。 ○裾部内外面、ナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。
鉢形土器A	16-124	溝 1 第3層	口径 13.0 器高(3.7)	○口縁部、体部のみ残存。大きく開く口縁部。口縁端部は面をもつ。体部は椀状。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、ナデ。内面、磨滅のため調整不明。	色調 外 黒灰色。 内 淡黄茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
ミニチュア土器	16-125 9-125	溝 1 第3層	口径 5.0 器高 2.6 底径 5.3	○ゆるやかに開く、直口の口縁部。口縁端部は外方へ傾斜。底部は厚く、平底。 ○内外面とも未調整。粘土の継ぎ目が目立つ。 ○口縁端部外面、刻み目。	色調 淡褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 器体の半分に黒斑。
甕用蓋形土器	16-126 10-126	溝 1 第3層	つまみ径 5.0 器高(8.0)	○口縁部欠損。平坦なつまみをもつ笠形の蓋。つまみはわずかに突出する。 ○つまみ頂部、ヘラケズリの後、ナデ。外面、ヘラケズリ(下→上)。内面、ナデ。つまみ部下端に指頭圧痕が残る。	色調 黒褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。 外面に煤付着。
甕形土器	16-127 10-127	溝 1 第3層	口径 36.8 器高(8.8)	○口縁部、体部上半残存。口縁部が内面に丸みをもって外反する。口縁端部は下外方へ拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面上半、斜方向の刷毛目。下半、斜方向のヘラミガキ。内面、斜方向の刷毛目。	色調 外 明赤黄色。 内 淡黄褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕形土器	16-128	溝 1 第3層	口径 22.7 器高(6.5)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上方へ拡張する。	色調 明茶黄色。 胎土 0.1~0.2cm

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
				○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。内面には指頭圧痕が残る。	の砂粒。金雲母。
壺形土器	16-129	溝 1 第3層	口径 22.5 器高(4.1)	○口縁部、体部上半残存。曲折して開く口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○口縁部内外面、体部外面、ヨコナデ。内面、ナデ。内面には指頭圧痕が残る。	色調 茶褐色。 胎土 0.1~0.3cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。
壺形土器	16-130	溝 1 第3層	口径 21.1 器高(5.1)	○口縁部、体部上半残存。口縁部が内面に丸みをもって外反する。口縁端部は下方に拡張する。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 暗灰褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。
壺形土器	16-131	溝 1 第3層	口径 28.2 器高(7.0)	○口縁部、体部上半残存。斜め上方に外反する口縁部。口縁端部は下方へわずかに拡張する。体部は張る。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、斜方向のヘラミガキ。内面、斜方向のヘラミガキ。内面には指頭圧痕が残る。	色調 茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。金雲母、角閃石。 生駒西麓産。
壺形土器	16-132	溝 1 第3層	口径 26.5 器高(7.8)	○口縁部、体部上半残存。口縁部が内面に丸みをもって外反する。口縁端部は下外方へ拡張する。体部は張り出す。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、斜方向のヘラミガキ。内面、横方向のヘラミガキ。	色調 褐灰色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。
壺形土器	16-133	溝 1 第3層	口径 33.5 器高(56.7)	○口縁部、体部上半残存。口縁部が内面に丸みをもって外反する。口縁端部は下方へ拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、斜方向のヘラミガキ。内面上半、横方向のヘラミガキ。下半、斜方	色調 暗灰褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微	備考
				向の刷毛目。		内外面ともに煤付着。
広口壺形土器C	18-134	溝 1 第2層	口径 12.2 器高(3.5)	○口頸部のみ残存。短い頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は上、下に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部内外面、ナデ。		色調 淡灰褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。金雲母、くさり礫。
広口壺形土器A	18-135	溝 1 第2層	口径 18.6 器高(5.1)	○口頸部のみ残存。短い頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は上、下に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部内外面、ナデ。 ○口縁部外面、凹線文。口縁部内面、列点文(1単位8本)。		色調 明黄茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。くさり礫。
広口壺形土器A	18-136	溝 1 第2層	口径 21.6 器高(6.1)	○口頸部のみ残存。口縁下端は欠損。短い頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は上方に拡張する。おそらく下方にも拡張。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明。頸部内面には指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、凹線文。口縁部内面、列点文(1単位8本)。		色調 明赤茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
広口壺形土器A	18-137	溝 1 第2層	口径 18.4 器高(1.8)	○口縁部のみ残存。口縁端部は下外方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面には指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、簾状文(1単位11本)。		色調 淡茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
広口壺形土器A	18-138	溝 1 第2層	口径 19.0 器高(5.6)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下外方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明。		色調 明黄茶色 胎土 0.1cm程度の砂粒。

()は残存値

器種	捕図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
				○口縁部外面、簾状文(1単位12本) の上に円形浮文。口縁部内面、円形浮文。頸部外面、簾状文(1単位12本)。	
広口壺形土器B	18-139	溝 1 第2層	器高(12.7)	○口頸部のみ残存。口縁部拡張部欠損。筒状の頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁部はおそらく上方に拡張。 ○内外面ともに磨滅のため調整不明。頸部内面には指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、竹管文。頸部外面、櫛描直線文(1単位7本)。	色調 明茶黄色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
広口壺形土器A	18-140	溝 1 第2層	口径 20.6 器高(3.4)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下外方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。 ○口縁部外面、簾状文(1単位12本)。頸部外面、簾状文(1単位12本)。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。 外面に煤付着。
広口壺形土器A	18-141	溝 1 第2層	口径 22.0 器高(6.3)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁部は下外方に拡張する。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。 ○口縁部、頸部外面、簾状文(1単位18本)。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.3cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。 外面に炭化物質付着。
広口壺形土器A	18-142	溝 1 第2層	口径 22.0 器高(3.7)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は下外方に拡張する。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。 ○口縁部外面、簾状文。口縁部内面、円形浮文。	色調 明茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
広口壺形土器B	18-143 10-143	溝 1 第2層	口径 11.9 器高(7.5)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は上方に大きく、下方にわずかに拡張する。口縁端面は内傾する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部内外面、ナデ。口縁端面内面には指頭圧痕が残る。 ○口縁部、頸部外面、簾状文(1単位14本)。	色調 暗灰褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。 口縁部外面に煤、内面に炭化物質付着。
広口壺形土器B	18-144 10-144	溝 1 第2層	口径 26.2 器高(6.0)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反した後、上方に大きく、下方にも拡張する口縁部。口縁端面は内傾する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明。口縁端面内面には指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、簾状文(1単位10、13本)の上、刺突文。頸部外面、櫛描直線文(1単位6本)。	色調 茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。
広口壺形土器B	18-145 10-145	溝 1 第2層	口径 31.0 器高(6.6)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反した後、上方に大きく、下方にも拡張する口縁部。口縁端面は内傾する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部外面、ヘラミガキ。内面、磨滅のため調整不明。端面内面には指頭圧痕が残る。 ○口縁部外面、簾状文(1単位15本)の上に円形浮文。頸部外面、簾状文(1単位17本)。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。 口縁部内面に炭化物質付着。
無頸壺形土器B	18-146	溝 1 第2層	口径 18.9 器高(2.6)	○口縁部残存。段状の口縁部をもつ。口縁部はわずかに内傾する。 ○口縁部外面、ヨコナデ。内面、磨滅のため調整不明。 ○口縁部外面、簾状文(1単位17本)	色調 淡黄茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。金雲母。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
無頸壺形土器B	18-147	溝 1 第2層	口径 21.0 器高(3.1)	の上に刺突文。体部外面、簾状文。		
				○口縁部、体部上半残存。口縁部は大きく内傾する。口縁下に2個1組の紐孔。		色調 淡黄茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
				○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内面、ナデ。内面、ナデ下に指頭圧痕が残る。		
太頸壺形土器	18-148	溝 1 第2層	口径 17.2	○口縁部外面、列点文(1単位18本)、体部外面(1単位15本)。		
				○口頸部、体部上半残存。口頸部は中位が欠損。内彎する直口。口縁端部は内側に肥厚して上端に面をもつ。		色調 明黄茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
				○口縁部内面、ヨコナデ。体部内面磨滅のため調整不明。口縁部、体部内面には粘土紐の継ぎ目、指頭圧痕が残る。		
太頸壺形土器	18-149	溝 1 第2層	口径 19.3 器高(3.5)	○口頸部外面、列点文(1単位20本)の上に円形浮文。口頸部外面、簾状文(1単位22、20本)。体部外面、簾状文(1単位21、25本)、刻み目状の列点文の上に円形浮文。稜杉状の列点文(1単位7本)。		
				○口頸部のみ残存。内彎する直口。口縁端部は内側に肥厚して上端に面をもつ。		色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.3cmの砂粒。角閃石、くさり礫。
				○口縁部上端、内面、ヨコナデ。頸部内面、ナデ。内面には、粘土の継ぎ目、指頭圧痕が残る。		生駒西麓産。
細頸壺形土器	18-150	溝 1 第2層	口径 7.7 器高(2.5)	○口頸部外面、稜杉状に配した斜線文の上を円形浮文。		
				○口頸部のみ残存。外傾する直口。口縁端部は内側に丸く肥厚。		色調 茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。角閃石。
○内外面ともヨコナデ。						

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
					生駒西麓産。
高杯形土器B	18-151	溝 1 第2層	器高(5.0)	○杯部上半残存。口縁端部は欠損。 椀状の杯部。ほぼ水平に広がる口 縁部。水平口縁の内側に断面四角 形の凸帯が1本めぐる。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 暗紫赤色。 胎土 0.1cm程度 の砂粒。
高杯形土器A	18-152	溝 1 第2層	口径 23.0 器高(3.1)	○口縁部のみ残存。外傾する直口。 口縁端部は内側にわずかに肥厚し て、上端に面をもつ。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 淡黄茶色。 胎土 0.1cm程度 の砂粒。
高杯形土器A	18-153	溝 1 第2層	口径 25.8 器高(4.5)	○杯底部、脚台部欠損。内彎気味に 立ちあがる直口。口縁端部は内側 に肥厚して、上端に面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内 外面、横方向のヘラミガキ。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。角閃石、 金雲母。 生駒西麓産。
鉢形土器A	18-154	溝 1 第2層	口径 14.1 器高(3.5)	○杯底部、脚柱部欠損。浅い椀状の 杯部。内彎気味に立ちあがる直口。 口縁端部は内側に肌厚して、上端 に面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面上 半、横方向のヘラミガキ。下半、 縦方向のヘラミガキ。内面、縦方 向のヘラミガキ。	色調 茶褐色。 胎土 0.1cm程度 の砂粒。角閃石。 生駒西麓産。
高杯形土器	18-155	溝 1 第2層	器高(4.1)	○脚柱部のみ残存。中空で小型の脚 柱部。 ○外面、ナデ。内面、絞り目。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。角閃石。 生駒西麓産。
高杯形土器	18-156	溝 1 第2層	器高(6.1)	○脚柱部のみ残存。太い中空の脚柱 部。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 暗赤茶色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。角閃石。 生駒西麓産。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
高杯形土器	18-157	溝 1 第2層	器高(6.9)	○脚柱部のみ残存。中実の脚柱部。 ○外面、縦方向のヘラミガキ。内面ナデ。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。	生駒西麓産。
高杯形土器	18-158	溝 1 第2層	器高(4.7)	○脚柱部残存。半中実で裾部に向つてなだらかに広がる脚柱部。3方向に円孔透し。 ○外面、刷毛目の上ナデ。内面、ナデ。	色調 明茶黄色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。	
高杯形土器	18-159	溝 1 第2層	脚裾径13.9 器高(1.5)	○脚裾部のみ残存。大きく広がる裾部。裾端部は面をもつ。 ○裾端部、ヨコナデ。外面、斜方向のヘラミガキ。内面、横方向のヘラミガキ。	色調 明茶黄色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。	
高杯形土器	18-160	溝 1 第2層	脚裾径13.7 器高(1.9)	○脚裾部のみ残存。裾端部は上外方に拡張する。 ○内外面、ヨコナデ。 ○外面、竹管文。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。角閃石。	生駒西麓産。
鉢形土器A	19-161	溝 1 第2層	口径 12.8 器高(6.2)	○底部欠損。直口。深い椀状の鉢部。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内外面、縦方向のヘラミガキ。	色調 淡茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。	
鉢形土器	19-162	溝 1 第2層	器高(5.7)	○口縁部、底部欠損。深い椀状の鉢部。体部下半に断面三角形の凸帯が1本めぐる。凸帯には一部切れ込みがある。 ○外面、ナデ。内面、ナデ、一部刷毛目。凸帯は貼り付け。	色調 淡黄褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。	
鉢形土器C	19-163	溝 1 第2層	口径 19.3 器高(3.5)	○口縁部、体部上半残存。短く外反する口縁部。端部はわずかに下外方に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内外面ナデ。内面には粘土の継ぎ目、指	色調 明茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。	()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
				頭圧痕が残る。		
鉢形土器B	19-164	溝 1 第2層	口径 20.3 腹径 22.0 器高(5.5)	○口縁部、体部上半残存。内彎する段状の口縁部。体部は丸みをもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、ヘラミガキ。内面、剥離のため調整不明。文様帶間磨研線。 ○体部外面、簾状文(1単位13本)。		色調 淡黄茶色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。くさり礫。
鉢形土器B	19-165	溝 1 第2層	口径 28.6 器高(4.0)	○口縁部、体部上半残存。内傾する段状の口縁部。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内面、ナデ。文様帶間磨研線。 ○口縁部外面、凹線文。体部外面、簾状文(1単位9本)。		色調 淡褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
鉢形土器B	19-166	溝 1 第2層	口径 34.0 器高(4.5)	○口縁部、体部上半残存。ほぼ直立する段状の口縁部。 ○内外面、ヨコナデ。内面下半、ナデ。内面には指頭圧痕が残る。 ○口縁部、体部外面、波状文(1単位10本)。		色調 茶褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
鉢形土器B	19-167	溝 1 第2層	口径 46.0 腹径 48.3 器高(7.2)	○口縁部、体部上半残存。内傾する段状の口縁部。口縁部上端、内方へ傾斜。最大径を腹部にもつ。 ○口縁部上端、ヨコナデ。内面、横方向のヘラミガキ。文様帶間磨研線。 ○口縁部外面、簾状文(1単位24本)の上から刺突文。体部外面、簾状文(1単位24本)。		色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.3cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。
甕形土器	19-168	溝 1 第2層	口径 10.6 腹径 9.9 器高(4.4)	○口縁部、体部上半残存。ゆるやかに斜め上方に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部は張り出さない。		色調 黒褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
				○口縁部内外面、ヨコナデ。内外面ナデ。外面には指頭圧痕が残る。		内外面ともに煤付着。
甕形土器	19-169	溝 1 第2層	口径 27.6 器高(4.6)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上方に大きく、下方にわずかに拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内外面、ナデ。 ○口縁下端、刻み目。		色調 明茶黄色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。くさり礫、金雲母。
甕形土器	19-170	溝 1 第2層	口径 26.2 器高(3.9)	○口縁部、体部上半残存。斜め上方に外折する口縁部。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。内面、ナデ下には指頭圧痕が残る。		色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。
甕形土器	19-171	溝 1 第2層	口径 30.5 器高(3.4)	○口縁部、体部上半残存。ほぼ水平に外折する口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、ナデ。内面、横方向のヘラミガキ。		色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。 口縁部内面に煤付着。
甕形土器	19-172	溝 1 第2層	口径 40.5 器高(5.4)	○口縁部、体部上半残存。口縁部は内面に丸みをもって外反する。口縁端部は下外方へ拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内面、横方向のヘラミガキ。他は磨滅のため調整不明。 ○口縁部外面、刺突文。		色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。 口縁部内面に煤付着。
杯	19-173	溝 1 第2層	口径 12.3 器高(2.5)	○底部は欠損。体部からなだらかに開く口縁部。口縁端部はわずかに外方へ突出し、内傾して面をもつ。		色調 明赤褐色。 胎土 精良。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
				○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内外面、ナデ。外面に指頭圧痕が残る。 ○杯部内面、正放射状の暗文。		
杯	19-174	溝 1 第2層	口径 11.8 器高(4.4)	○底部は丸底。深い椀状の杯。丸みをもつ体部からなだらかに聞く口縁部。口縁端部はわずかに外方へ突出し、内傾して面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面上半、ナデ。下半、ヘラケズリ。内面、ナデ。外面上半には指頭圧痕が残る。 ○杯部内面、正放射状の暗文。	色調 明赤褐色。 胎土 精良。	
杯	19-175	溝 1 第2層	口径 10.7 器高(4.0)	○底部は丸底と平底の中間。底部から口縁部にかけてなだらかなカーブをえがく。口縁部は直立気味に聞く。口縁端面は内傾して面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内外面、ナデ。 ○杯部内面、正放射状の暗文。	色調 明赤褐色。 胎土 精良。	
杯	19-176	溝 1 第2層	口径 13.1 器高(3.1)	○底部は欠損。底部から体部にかけてなだらかなカーブをえがく。口縁部は直立する。口縁端部は尖り気味。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内外面、ナデ、外面には指頭圧痕が残る。 ○杯部内面、斜方向の暗文。	色調 明赤褐色。 胎土 精良。	
甕	19-177	溝 1 第2層	腹径 17.0 器高(7.1)	○口縁部、体部上半残存。口縁端部は欠損。くの字に外反する口縁部。体部はあまり張らない。 ○口縁部外面、ヨコナデ。内面、刷毛目。体部外面上半、縦方向の刷	色調 暗褐色。 胎土 精良。 内外面とも煤付着。	()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
				毛目。下半、未調整。指頭圧痕が残る。内面、横方向の刷毛目。		
高杯	19-178	溝 1	脚裾径11.0	○脚台部残存。中空の脚柱部。丸みをもって大きく開く裾部。裾端部は丸くおさまる。	色調 明赤褐色。	
	10-178	第2層	器高(8.2)	○外面、ナデ。脚柱部内面、絞り目。裾部内面、布目。	胎土 精良。 内面に煤付着。	
高杯	19-179	溝 1	器高(8.1)	○脚柱部のみ残存。半中実の細長い脚柱部。	色調 明赤褐色。	
		第2層		○内外面、ナデ。外面は縦方向にナデつけてあるために面がみられる。	胎土 精良。	
杯蓋	19-180	溝 1	口径 10.6	○口縁部は外方へ開く。口縁端部は尖り気味。天井部と口縁部の境に稜をもつ。	色調 灰色。	
		第2層	器高(2.3)	○内外面とも回転ナデ。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。	
杯蓋	19-181	溝 1	口径 15.7	○口縁部は外方へ開く。口縁端部は丸くおさまる。天井部と口縁部の境に稜をもつ。	色調 灰色。	
		第2層	器高(2.9)	○天井部、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	胎土 密。 最大0.4cmの小石を含む。 焼成 良好、堅緻。	
杯	19-182	溝 1	口径 13.9	○たちあがりは直立する。口縁端部は丸くおさまる。受部は水平にのびる。	色調 灰色。	
		第2層	受部径15.6	○内外面とも回転ナデ。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。	
			たちあがり高 1.6			
壺	19-183	溝 1	口径 6.5	○口頸部のみ残存。外傾する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。	色調 灰色	
		第2層	器高(3.0)	○内外面とも回転ナデ。	胎土 密。	
				○頸部外面、凹線文。	焼成 良好、堅緻。	

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴			備考
				○形態	○技法	○文様	
甕	19-184	溝 1 第2層	口径 16.2 器高(2.4)	○口縁部のみ残存。大きく開く口縁部。口縁端部は丸くおさまる。頸部との境には凹線がめぐる。 ○内外面とも回転ナデ。			色調 暗灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。
甕	19-185	溝 1 第2層	口径 19.2 器高(2.0)	○口頸部のみ残存。外反する口縁部。口縁端部は外方へ丸く肥厚する。 ○内外面とも回転ナデ。			色調 灰白色。 胎土 密。 焼成 不良、軟質。
広口壺形土器A	20-186	溝 1 第1層	口径 16.4 器高(2.0)	○口頸部のみ残存。外反して大きく開く口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、横方向のヘラミガキ。 ○口縁部外面、波状文(1単位3本)。			色調 淡茶灰色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
広口壺形土器A	20-187	溝 1 第1層	口径 20.6 器高(5.8)	○口頸部のみ残存。頸部からなだらかに外反する口縁部。口縁端部は上方にわずかに、下外方に大きく拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。頸部外面、ナデ。内面上半、横方向の刷毛目。下半、ナデ。 ○口縁部外面、波状文(1単位9本)、内面、扇形文(1単位9本)。			色調 淡黄赤色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。くさり礫。
広口壺形土器A	20-188	溝 1 第1層	口径 25.6 器高(3.0)	○口頸部のみ残存。なだらかに外反する口縁部。口縁端部は下方へ拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内外面、ナデ。 ○口縁部外面、簾状文(1単位6本)。			色調 茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。
細頸壺形土器	20-189	溝 1 第1層	口径 7.9 器高(3.9)	○口頸部残存。外傾する直口。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他、内			色調 淡褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
				外面、ナデ。内面には指頭圧痕が残る。	外面に煤付普。
高杯形土器	20-190	溝 1 第1層	脚裾径17.8 器高(2.0)	○脚裾部のみ残存。大きく広がる裾部。裾端部は上、下にわずかに拡張して、面をもつ。 ○裾端部、ヨコナデ。外面、縦方向のヘラミガキ。内面、ヨコナデ。	色調 淡褐灰色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
鉢形土器	20-191	溝 1 第1層	口径 34.4 腹径 34.7 器高(7.1)	○底部は欠損。体部からゆるやかに内彎する口縁部。口縁端部は内外へ肥厚してT字状を呈す。体部は丸みをもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内外面、ナデ。 ○口縁下端、体部外面、凹線文。	色調 淡黄褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。金雲母。 体部外面下半に黒斑。
甕形土器	20-192	溝 1 第1層	口径 14.7 器高(4.7)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上方に拡張する。口縁端面は凹面を呈する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、刷毛目。内面、ナデ。	色調 淡黄褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。 外面に煤付着。
甕形土器	20-193	溝 1 第1層	口径 28.8 器高(4.5)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上、下に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明。	色調 灰白色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕形土器	20-194	溝 1 第1層	口径 28.4 器高(2.9)	○口縁部のみ残存。斜め上方に外折する口縁部。口縁端部は上、下に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。 ○口縁部外面、内面、凹線文。	色調 淡褐色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。
甕形土器	20-195	溝 1 第1層	口径 36.1 器高(4.6)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上、下に拡張する。	色調 明茶黄色。 胎土 0.1cm程度の砂粒。

()は残存値

種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 徴	備考
				○口縁部内外面、体部外面、ヨコナデ。内面、磨滅のため調整不明。 ○体部外面、斜線文。		
甕形土器	20-196	溝 1 第1層	口径 39.0 器高(4.2)	○口縁部、体部上半残存。内面に丸みをもって外反する口縁部。口縁端部は下外方へ拡張する。 ○内外面、ヨコナデ。内面に指頭圧痕が残る。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。角閃石。 生駒西麓産。	
杯	20-197	溝 1 第1層	口径 8.9 器高(3.4)	○底部は欠損。深い椀状の杯。丸みをもつ体部から内彎する口縁部。口縁端部は内傾して面をもつ。 ○内外面ともにヨコナデ。	色調 明赤褐色。 胎土 精良。	
杯	20-198 10-198	溝 1 第1層	口径 8.4 器高 3.1	○全体の1/2残存。小型の杯。尖り気味の丸底。開く口縁部をもつ。口縁端部は内方に傾斜して面をもつ。内底面中央は親指大の凹みがある。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。底部外面、未調整。内面、ナデ。	色調 明赤褐色。 胎土 精良。	
杯	20-199	溝 1 第1層	口径 14.2 器高(4.2)	○底部は欠損。丸みをもつ体部からなだらかに開く口縁部。口縁端部はわずかに外方へ突出し、内傾して面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明。外面下半には指頭圧痕が残る。	色調 明赤褐色。 胎土 精良。	
甕	20-200	溝 1 第1層	口径 12.4 器高(4.4)	○口縁部、体部上半残存。くの字に外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。体部は張り出さない。 ○口縁部外面、磨滅のため調整不明。内面、横方向の刷毛目。体部外面刷毛目。内面、ナデ。	色調 明赤褐色。 胎土 良。くさり礫。	
甕	20-201	溝 1 第1層	口径 25.4 器高(3.5)	○口縁部、体部上半残存。大きく外反して開く口縁部。口縁端部は面をもつ。口縁端部下端近くには凹線が一条めぐる。	色調 明赤褐色。 胎土 良。くさり礫。	()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 備考
				○口縁部内外面、ヨコナデ。体部内 外面、磨滅のため調整不明。	
杯 蓋	20-202	溝 1 第1層	口径 17.2 器高(3.3)	○天井部から口縁部にかけてゆるや かな丸みをもってくだる。口縁部は外方へ開く。口縁端部は内傾して面をもつ。天井部と口縁部の境には凹線が認められる。 ○天井部外面、回転ヘラケズリ。他は 回転ナデ。	色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。
杯 蓋	20-203	溝 1 第1層	口径 13.6 器高(2.8)	○天井部から口縁部にかけてゆるや かな丸みをもってくだる。口縁部はまっすぐにくだる。口縁端部は丸くおさまる。天井部と口縁部を分ける凹線も稜も認められない。 ○天井部外面、回転ヘラケズリ。他は 回転ナデ。	色調 青灰色。 胎土 粗。 0.2~0.4cmの小石。 焼成 良好、堅緻。
杯 蓋	20-204	溝 1 第1層	口径 14.2 器高(2.3)	○口縁部は外方へ大きく開く。口縁端部は丸くおさまる。 ○内外面とも回転ナデ。 ○口縁部外面、刻み目。	色調 灰色 胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。
杯	20-205 10-205	溝 1 第1層	口径 12.5 受部径14.2 たちあがり高 1.1 器高(3.7)	○たちあがりは内傾する。口縁端部は丸くおさまる。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底部は丸みをもつ。 ○底部外面、約%、回転ヘラケズリ。 他は回転ナデ。内面中央部には回 転ナデの上に一定方向のナデを加 える。ロクロは右まわり。	色調 灰白色。 胎土 やや粗。 焼成 不良、やや 軟質。
杯	20-206 10-206	溝 1 第1層	口径 12.1 受部径14.5 たちあがり高 0.9 器高 3.6	○たちあがりは内傾した後、角度を 変えて直立気味に内傾する。口縁端部は尖り気味。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底部は扁平。 ○底部外面約%、回転ヘラケズリ。 他は回転ナデ。ロクロは右まわり。 たちあがりはオリコミ。	色調 青灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 受部に重ね焼の痕 跡がある。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
杯	20-207	溝 1 第1層	口径 13.3 受部径15.6 たちあがり高 1.1 器高(3.3)	○たちあがりは、ほぼ直立する。口 縁端部は丸くおさまる。受部はほ ぼ水平にのび、端部は丸くおさま る。 ○底部外面、回転ヘラケズリ。他は 回転ナデ。		色調 暗灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 受部に重ね焼時の 蓋の熔着がみられ る。
杯	20-208	溝 1 第1層	口径 12.0 受部径14.4 たちあがり高 0.9 器高 3.3	○たちあがりは内傾する。口縁端部 は丸くおさまる。受部は水平にの び、端部は丸くおさまる。底部は 扁平。 ○底部外面約 $\frac{1}{3}$ 、回転ヘラケズリ。 他は回転ナデ。内面中央部には回 転ナデの上から一定方向のナデを 加える。口クロは右まわり。		色調 灰白色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。
杯	20-209	溝 1 第1層	口径 10.1 受部径12.5 たちあがり高 0.8 器高(2.8)	○たちあがりは内傾する。端部は丸 くおさまる。受部は水平にのび、 端部は丸くおさまる。 ○底部外面、回転ヘラケズリ。他は 回転ナデ。		色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。
杯	20-210	溝 1 第1層	口径 12.1 受部径14.2 たちあがり高 1.0 器高(2.3)	○たちあがりは内傾した後、直立す る。口縁端部は丸くおさまる。受 部は水平にのび、端部は丸くおさ まる。底部はおそらく扁平。 ○底部外面、回転ヘラケズリ。他は 回転ナデ。		色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。
杯 蓋	20-211	溝 1 第1層	口径 9.6 かえり径 8.0 器高(1.4)	○杯身をさかさまにした蓋。口縁端 部は丸くおさまる。かえりは口縁 端部よりも下方に突出する。かえ り端部は尖る。 ○天井部外面、回転ヘラケズリ。他 は回転ナデ。かえりはオリコミ。		色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。

() は残存値

器種	捕図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
杯 蓋	20-212	溝 1 第1層	口径 10.1 かえり径 8.0 器高(1.2)	○杯身をさかさまにした蓋。口縁端部は丸くおさまる。かえりは口縁端部よりも下方にならび、かえり部は丸くおさまる。 ○天井部外面、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。	
甕	20-213	溝 1 第1層	口径 12.1 器高(2.1)	○口頸部のみ残存。外反する口縁部。口縁端部は外方へ丸く肥厚する。 ○内外面とも回転ナデ。	色調 暗灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。	
台 部	20-214	溝 1 第1層	脚裾径10.2 器高(3.9)	○脚台部下半のみ残存。台部は裾部近くで内屈してふんばる。脚柱部は長方形の透しの痕跡がある。 ○脚台部内外面、回転ナデ。	色調 暗灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。	
台 部	20-215	溝 1 第1層	器高(3.5)	○脚台部下半残存。裾部は欠損。台部は裾部近くで内屈する。脚柱部と台部の境には鋭い凸線がめぐる。 ○内外面とも、回転ナデ。	色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。	
高 杯 形 土 器	20-216	溝 1 第1層	脚裾径11.5 器高(1.2)	○裾部のみ残存。大きく開く裾部。裾端部は上、下にわずかに拡張する。 ○内外面とも、回転ナデ。	色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。	
台 部	20-217	溝 1 第1層	器高(5.5)	○脚柱部残存。太く、短い脚柱部。脚柱部と台部の境には鋭い凸線がめぐる。透しの形状、数は不明。 ○内外面とも、回転ナデ。杯部接合面には密着するように同心円文が施されている。	色調 淡灰褐色。 胎土 密。 焼成 酸化状態による焼成。	
高 杯 形 土 器	20-218	溝 1 第1層	脚裾径18.5 器高(4.0)	○脚台部残存。なだらかに開く裾部。裾端部は下方へわずかに拡張して面をもつ。透しの形状、数は不明。 ○内外面とも回転ナデ。	色調 暗灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。	

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴			備考
				○形態	○技法	○文様	
高杯形土器	20-219	溝 1 第1層	器高(10.2)	○脚柱部残存。裾部は欠損。太い脚柱部。脚柱部から裾部にむかってなだらかなカーブをえがく。3方向に透しがみられるが、透しの上半が穿孔しきっていない。下半についてでは欠損のためはっきりしない。 ○脚柱部上半内面、絞り目。他は回転ナデ。			色調 明赤褐色。 胎土 密。 焼成 酸化状態による焼成。
高杯形土器	20-220	溝 1 第1層	器高(9.5)	○長脚 2段透しの脚柱部。裾部は欠損。脚柱部から裾部にむかってなだらかなカーブをえがく。透しはおそらく2方向。透し間には、凹線が2本めぐる。 ○内面上半、絞り目、外面、カキ目。他は、回転ナデ。			色調 灰色。 胎土 良。 焼成 良好、堅緻。
小皿	20-221	溝 2 器高(1.3)	口径 6.7	○丸みをおびた平底。口縁部はゆるやかなカーブをえがいてたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、内底面、ナデ。他は未調整。			色調 明茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
小皿	20-222	溝 2 上層 器高(1.0)	口径 7.5	○平底。口縁部は外上方に内彎気味にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。			色調 淡黄茶色。 胎土 0.1cmの砂粒。
小皿	20-223	溝 2 器高(1.2)	口径 7.5	○平底。口縁部は外上方に内彎気味にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。			色調 淡黄色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
小皿	20-224	溝 2 器高(0.8)	口径 7.5	○底部は欠失。口縁部は外上方に外反気味に開く。口縁端部は丸くおさまる。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。			色調 淡黄色。 胎土 0.1cmの砂粒。

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
小皿	21-225	溝 2	口径 7.8	○丸みをおびた平底。口縁部はゆるやかなカーブをえがいてたちあがる。口縁端部は丸く肥厚する部分とストレートに丸くおさまる部分がある。 ○口縁部外面、ナデ。口縁部内面、内底面、磨滅のため調整不明。他は未調整。		色調 淡黄茶色。 胎土 0.1cmの砂粒。
	11-225		器高 1.75			
小皿	21-226	溝 2	口径 7.2	○平底。口縁部は外上方に直線的にたちあがる。口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他は未調整。		色調 淡黄色。 胎土 0.1cmの砂粒。くさり礫。
	11-227		器高 1.1			
小皿	21-227	溝 2	口径 7.4	○上げ底。口縁部は外上方に直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。		色調 淡灰褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。0.5cmの小石。
	11-227		器高 1.1			
小皿	21-228	溝 2	口径 9.1	○底部は欠失。口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他はナデ。		色調 黒灰色。 胎土 0.1cmの砂粒。
			器高(1.2)			
小皿	21-229	溝 2 上層	口径 10.8	○底部は欠失。口縁部は大きく開く。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他は未調整。		色調 茶褐色。 胎土 0.1cmの砂粒。
			器高(1.9)			
皿	21-230	溝 2 上層	口径 13.6	○底部は欠失。口縁部は大きく開く。口縁端部は外方へつまみ出す。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他は未調整。		色調 茶褐色。 胎土 0.1cmの砂粒。
			器高(2.7)			
皿	21-231	溝 2 上層	口径 12.2	○底部は欠失。口縁部はゆるやかなカーブをえがいたのち、直立気味にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。内面ナ		色調 明赤褐色。 胎土 精良。
			器高(2.2)			

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
				デ。外面、未調整。	
椀	21-232	溝 2	口径 15.5 器高(3.9)	○底部は欠失。口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸くおさまる。 ○内外面ともヨコナデ。	色調 明赤褐色。 胎土 精良。
椀	21-233	溝 2	口径 14.4 器高(2.4)	○底部は欠失。口縁部は大きく開く。口縁端部は内傾して面をもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。 ○内面の暗文は細い。外面にも暗文がみられる。	色調 暗灰色。 胎土 精良。
台脚部	21-234	溝 2	裾部径13.5 器高(2.4)	○ゆるやかに開く裾部。裾部は垂直に下り、面をもつ。 ○内外面とも回転ナデ。	色調 灰白色。 胎土 精良。
壺	21-235	溝 2	口径 10.1 器高(2.3)	○口頸部のみ残存。筒状の頸部。短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。口縁下には指頭圧痕が残る。	色調 淡褐色。 胎土 0.1~0.3cm 砂粒。
火入れ	21-236	溝 2	口径 18.4 鍔部径22.0 器高(4.5)	○直立する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。鍔部は小さく、水平に付く。 ○磨滅のため調整不明。	色調 紫黒色。 胎土 良。
擂鉢	21-237 11-237	溝 2	口径 27.9 器高(9.3)	○底部は欠失。外傾する体部。口縁端部から1cm前後下方を強くなることによって、口縁部に外傾する面をつくる。 ○口縁部内外面、ナデ。体部外面、ヘラケズリ。内面、ナデのち、縦位の擂目(31本以上)。	色調 灰白色。 胎土 0.2~0.4cm の砂粒。
羽釜	21-238 11-238	溝 2 下層	口径 21.7 鍔部径25.6 鍔幅 1.9	○底部は欠失。外傾気味に直立する有段の口縁部。鍔部は内彎しながら水平にのびる。体部は張り出さず、口縁部の方が大きい。	色調 暗灰褐色。 胎土 0.1~0.3cm の砂粒。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
			器高(9.5)	○口縁部内外面、ナデ。体部外面、ヘラケズリ。内面、刷毛目。鍔部内外面、ナデ。	須恵質に近い瓦質。 口縁部、鍔部、体部上半、外面に煤付着。
羽釜	21-239	溝 2 上 層	口径 19.9 鍔部径26.4	○底部は欠失。内傾する有段の口縁部。鍔部は水平にのびる。体部は丸みをもつ。	色調 黒灰色。
			鍔幅 1.9	○口縁部内外面、ナデ。体部外面、ヘラケズリ。内面、刷毛目。鍔部内外面、ナデ。	胎土 0.2~0.3cmの砂粒。
			器高(6.1)		
羽釜	21-240	溝 2	口径 21.4 鍔部径27.2	○内傾する有段の口縁部。鍔部は水平にのびる。	色調 黒灰色。
			鍔幅 2.0	○口縁部内外面、ナデ。体部外面、刷毛目。鍔部内外面、ナデ。	胎土 0.1~0.3cmの砂粒。
			器高(3.9)		
羽釜	21-241	溝 2	口径 24.9 鍔部径30.6	○わずかに内傾する有段の口縁部。鍔部は水平にのびる。	色調 黒色。
			鍔幅 2.2	○口縁部内外面、ナデ。体部外面、ヘラケズリ。内面は磨滅のため調整不明。鍔部内外面、ナデ。	胎土 0.1~0.3cmの砂粒。
			器高(5.0)		
甕	21-242 11-242	溝 2 下 層	口径 26.6 器高(6.0)	○短く外折する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。体部は大きく張る。 ○口縁部内外面、ナデ。体部外面、平行タタキ(4本/cm)。内面、ナデ。	色調 灰白色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
					須恵質に近い瓦質。
甕	21-243	溝 2 上 層	口径 34.7 器高(5.9)	○体部から内彎したのち、外反する口縁部。口縁部は大きく肥厚し、丸みをもつ。 ○口縁部内外面、ナデ。体部外面、平行タタキ(2本/cm)。内面、横方向の刷毛目ののちナデ。	色調 灰色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕	21-244	溝 2 上 層	口径 34.5 器高(6.3)	○内傾気味にたちあがったのち、外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。	色調 灰色。 胎土 0.1cmの砂

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 徴	備考
				○口縁部内外面、ナデ。体部外面、平行タタキ(2本/cm)。内面、横方向の刷毛目のちナデ。		粒。
練鉢	22-245	土壌1	口径 27.8 器高(5.8)	○口縁部、体部上半残存。外傾する口縁部。口縁端部から1cm前後下方を強くなることによって、口縁端部に外傾する面をつくる。 ○口縁部内外面、ナデ。体部外面、横方向のヘラケズリ。内面、刷毛目。	色調 黒灰色。 (口縁部のみ灰色)。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。	
羽釜	22-246	土壌1	口径 25.3 鍔部径37.7 鍔幅 2.9 器高(9.4)	○大型の羽釜。内傾する口縁部。鍔部は水平にのびる。 ○口縁部内外面、体部内面、ナデ。体部外面、横方向のヘラケズリ。	色調 暗灰白色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。	
甕	22-247	土壌1	口径 34.6 底径 26.2	○腹部は欠失。直立気味に立ちあがったのち、外反する口縁部。口縁端部は丸く肥厚する。底部は上げ底。 ○口縁部内外面、ナデ。体部外面、平行タタキ(1本/cm)。体部、底部内面、刷毛目。底面下半外面、ヘラケズリ。(ヘラケズリは平行タタキの後に施す)外底面の周辺はヘラケズリ。中央はナデ。	色調 黒褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。	
甕	22-248	土壌1	底径 29.0 器高(10.1)	○口縁部、体部上半、底面は欠失。 ○体部、底部上半外面、平行タタキ(2本/cm)。底部下半、底面外面、ヘラケズリ。(ヘラケズリは平行タタキの後に施す)内面、刷毛目。	色調 灰褐茶色。 胎土 0.1~0.5cmの砂粒。	
小皿	23-249	土壌2	口径 8.8 器高(1.9)	○底部は欠失。体部からなだらかに開く口縁部。 ○口縁部内外面、体部内面、ナデ。外面は未調整。	色調 灰黒色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。	

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
小皿	23-250	土壌 3	口径 6.3 底径 3.8 器高(1.0)	○平底。口縁部はゆるやかなカーブをえがいてたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、内底面、ナデ。外面、未調整。		色調 明赤褐色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
小皿	23-251	土壌 3	口径 7.8 底径 6.2 器高(1.7)	○丸みをおびた平底。口縁部は外反してたちあがる。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。他はナデ。		色調 淡黄褐色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
高杯	23-252	土壌 3	器高(4.6)	○脚柱部残存。中空の脚柱部。 ○内外面とも、磨滅のため調整不明。		色調 明赤褐色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
擂鉢	23-253	土壌 3	口径 31.2 器高(6.7)	○口縁部、体部上半残存。外傾する体部。口縁端部から1cm前後、下方を強くなることによって、口縁部に外傾する面をつくる。 ○口縁部内外面、ナデ。体部外面、ヘラケズリ。内面ナデののち、縦位の擂目(17本以上)。		色調 灰白色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
練鉢	23-254	土壌 3	口径 30.1 器高(4.7)	○口縁部、体部上半残存。外傾する体部。口縁端部から1cm前後、下方を強くなることによって、口縁部に外傾する面をつくる。 ○内外面とも剥離のため調整不明。		色調 灰白色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。 外面に煤付着。
羽釜	23-255	土壌 3	口径 27.2 器高(5.2)	○わずかに内傾する有段の口縁部。鍔部はほぼ水平にのびる。 ○口縁部外面、鍔部、ナデ。内面はナデの上から一部刷毛目。体部外面、ヘラケズリ。		色調 灰白色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。 体部外面に煤付着。
甕	23-256	土壌 3	口径 36.7 器高(7.1)	○内傾したのち、外反する口縁部。 ○口縁部内外面、ナデ。体部外面、平行タタキ(1本/cm)。内面、横方向のヘラミガキ。		色調 黒茶色。 胎土 0.1~0.3cm の砂粒。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴			備考
				○形態	○技法	○文様	
小皿	23-257	土壙4	口径 9.1 器高(2.4)	○大きく外傾して開く口縁部。 ○内外面ともナデ。			色調 明黄茶色。 胎土 0.1cmの砂粒。
杯	23-258	土壙4	口径 15.4 器高(2.9)	○丸みをもってたちあがる口縁部。 口縁端部は丸くおさまる。口縁部 内面には沈線が1本めぐる。 ○内外面ともナデ。			色調 明赤褐色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
杯	23-259	土壙4	口径 8.1 器高(3.4)	○杯蓋をさかさまにした身。口縁部 はやや外方へ開く。口縁端部は尖 り気味。 ○底部外面 $\frac{1}{3}$ 、回転ヘラケズリ。 $\frac{2}{3}$ 、 ヘラ切り未調整。他は回転ナデ。内 底面中央には一定方向のナデを加 える。			色調 灰色。 胎土 やや粗。 最大0.4cmの小石。 焼成 良好、堅緻。
杯	23-260	土壙4	口径 7.7 器高(2.8)	○杯蓋をさかさまにした身。口縁部 はやや外反して開く。口縁端部は 丸くおさまる。 ○内外面とも回転ナデ。			色調 暗灰色。 胎土 粗。 焼成 良好、堅緻。
擂鉢	23-261	土壙4	口径 27.9 器高(5.1)	○口縁部、体部上半残存。外傾する 口縁部。口縁端部から1cm前後、 下方をなでることによって、口縁 部にやや直立する面をつくる。 ○口縁部内外面、ナデ。体部外面、 横方向のヘラケズリ。内面、刷毛 目ののち、縦位の擂目(14本以上)。			色調 黒色。 胎土 0.1~0.3cm の砂粒。
甕	23-262	土壙5	口径 18.0 器高(2.9)	○口頸部のみ残存。外反する口縁部。 ○頸部外面、平行タタキののち回転 ナデ。他は回転ナデ。			色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。
擂鉢	23-263	井戸1	口径 23.1 器高(5.0)	○口縁部、体部上半残存。外傾する 口縁部。口縁端部は丸く肥厚する。 ○内外面ともナデ。体部内面ナデの のち擂目(5本以上)。			色調 黒灰色。 (光沢あり) 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。

()は残存値

器種	捕図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徹
甕	23-264	井戸1	口径 26.9 器高(5.0)	○内彎したのち、外反する口縁部。 口縁端部は丸く肥厚する。 ○口縁部内外面ともナデ。体部外面、 平行タタキ (2本/cm)。内面、刷毛 目。	色調 灰白色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
小皿	23-265 11-265	建物4 (H.11)	口径 8.1 器高(1.3)	○平底。口縁部は外上方へたちあが る。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、内底面、ナデ。外 面、未調整。	色調 淡赤褐色。 胎土 0.1cmの砂 粒。
小皿	23-266	建物4 (H.11)	口径 7.6 器高(1.3)	○底部は欠失。口縁部は外上方へた ちあがる。口縁端部は丸くおさま る。 ○内外面ともナデ。	色調 淡褐色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
小皿	23-267	建物4 (H.11)	口径 7.5 器高 1.3	○底面にゆるやかな凹凸がみられる。 口縁部は外反する。口縁端部は丸 みをもつ。 ○口縁部内外面、内底面、ナデ。外 面、未調整。	色調 淡黄色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
皿	23-268 11-268	建物4 (H.11)	口径 11.3 器高(2.8)	○丸底。大きく開く口縁部。口縁端 部は丸くおさまる。 ○口縁部外面、ヨコナデ。底部外面 未調整、指頭圧痕が残る。内面は 磨滅のため調整不明。	色調 灰白色。 胎土 やや粗。 0.2cm程度の黒色 砂粒。 外面の炭素の吸着 が少ない。
擂鉢	23-269	建物4 (H.11)	口径 22.7 器高(2.9)	○外傾する体部。口縁端部は丸く肥 厚する。 ○内外面、ナデ。体部内面、ナデの のち擂目 (6本以上)。	色調 灰色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
小皿	23-270	建物5 (H.14)	口径 9.4 器高(1.0)	○丸底気味の平底。口縁部は外上方 にたちあがる。口縁端部は丸くお さまる。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 明赤褐色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。

() は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	微 ○文様	備考
小皿	23-271 11-271	建物5 (H.14)	口径 9.8 器高(1.5)	○底面にゆるやかな凹凸がみられる。 口縁部は外上方にたちあがる。口 縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、内底面、ナデ。他 は未調整。		色調 淡黄茶色。 胎土 0.1~0.2cm の砂粒。
杯	23-272	建物5 (H.14)	口径 12.2 受部径14.2 たちあがり高 1.3 器高(2.8)	○たちあがりは内傾気味に直立する。 口縁端部は丸くおさまる。受部は やや上方にのび、端部は丸くおさ まる。 ○底面外面 ^約 は回転ヘラケズリ。他 は回転ナデ。		色調 暗灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。
甕	24-273	ピット1		○口縁部のみ残存。小破片のため法 量は不明。 ○口縁部内外面ともヨコナデ。		色調 淡赤褐色。 胎土 精良。 口縁部外面に煤付 着。
甕	24-274	ピット1		○口縁部のみ残存。小破片のため法 量は不明。 ○口縁部内面、横方向の刷毛目。外 面ヨコナデ。		色調 明赤褐色。 胎土 精良。
杯	24-275	ピット2	口径 14.2 受部径16.6 たちあがり高 1.3 器高(4.2)	○たちあがりは内傾した後、直立す る。口縁端部は丸くおさまる。受 部は水平にのび、端部は丸くおさ まる。底部は丸みをもつ。 ○底部外面 ^約 は回転ヘラケズリ。他 は回転ナデ。 ○底部外面にヘラ記号。		色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。
杯 蓋	24-276	ピット3	口径 13.0 器高(1.9)	○天井部中央は欠失。丸みをもつ天 井部。口縁部は上外方へ上ったの ち、端部に至って下外方へ拡張す る。 ○内外面とも回転ナデ。天井部外面 に不定方向のナデを加える。		色調 灰色。 胎土 密。 口縁部内面に他の 須恵器の熔着がみ られる。重ね焼き

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	備考
					時のものと思われる。
羽釜	24-277	ピット4	口径 20.4 鍔部径26.6 鍔幅 2.7 器高(4.7)	○内傾する有段の口縁部。鍔部は水平にのびる。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部外面、ナデ。他は磨滅のため調整不明。	色調 暗灰色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
椀	24-278	ピット5	口径 14.9 高台径 4.6 高台高 0.3 器高 5.5	○ほぼ完形品。口縁部はわずかに外反して開く。高台の断面はほぼ三角形。全体にゆがんでいる。 ○口縁部内外面、体部、底部外面、ナデ。内面、横方向の暗文。見込みの暗文は平行線。高台は貼り付け。外面、ナデ下には指頭圧痕が著しい。	色調 暗灰色。 胎土 精良。 口縁部内面の一部、炭素が斑点状に剥離している。
甕	24-279	ピット6	口径 38.0 器高(4.7)	○口縁部は短く、内傾し、上端で幅広い平坦な面をもつ。鍔は器体の上部に水平に付く。鍔は小さい。 ○口縁部内外面、鍔部、体部外面、ヨコナデ。内面、横方向の刷毛目。	色調 淡黄褐色。 胎土 0.1~0.3cmの砂粒。
小皿	24-280	ピット7	口径 9.5 器高(1.5)	○丸底。底部からなだらかなカーブをえがいて口縁部に至る。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、ナデ。底部内面、磨滅のため調整不明。他は未調整。	色調 淡茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
小皿	24-281	ピット8	口径 5.8 器高(1.2)	○丸みをおびた平底。口縁部は外反気味にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、内底面、ナデ。他は磨滅のため調整不明。	色調 明赤褐色。 胎土 0.1cmの砂粒。
小皿	24-282	ピット9	口径 5.7 器高(1.0)	○おそらく、ゆるやかな凹凸のみられる底部。口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさまる。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 茶褐色 胎土 0.1cmの砂粒。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕形土器	25-283	堆積層 第4層	口径 31.3 器高(5.4)	○大きく外反する口縁部。口縁端部は上、下に拡張する。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、縦方向のヘラミガキ。体部内面、横方向のヘラミガキ。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。最大0.5cmの小石。角閃石、金雲母。 生駒西麓産。
甕	25-284	堆積層 第3層	口径 16.7 器高(5.2)	○くの字に外反する口縁部。口縁端部は丸く肥厚する。体部は張り出さない。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面、縦、斜方向の刷毛目。体部内面上位、横方向の刷毛目。下半は指頭圧痕が残る。	色調 明黄茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕	25-285	堆積層 第3層	口径 13.8 器高(3.4)	○くの字に外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。 ○内外面ともヨコナデ。	色調 淡灰褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。くさり礫。
甕	25-286	堆積層 第3層	口径 33.8 器高(5.8)	○くの字に外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 明茶黄色。 胎土 0.1cmの砂粒。くさり礫。
杯	25-287	堆積層 第3層	口径 7.1 器高 4.2	○ほぼ平底。口縁部はわずかに外上方にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。 ○口縁部内外面、内底面、ナデ。外面、未調整。	色調 明茶黄色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。
甕	25-288	堆積層 第3層	口径 18.2 器高(4.7)	○なだらかに外反する口縁部。口縁端部は下方にわずかに拡張して、全体に丸くおさまる。 ○内外面とも回転ナデ。	色調 灰色 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。
杯	25-289	堆積層 第3層	高台径 9.4 高台高(0.5) 器高(1.3)	○高台部残存。底部端に、断面四角形の高台が付く。高台は外側で接地。 ○外底面中央、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。底部内面中央には一定方向のナデが加えられている。	色調 灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。

()は残存値

器種	挿図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特 ○形態 ○技法 ○文様	徵 ○文様	備考
広口壺形土器A	25-290	表 採	口径 19.6 器高(2.7)	○大きく外反する口縁部。口縁端部は下外方に拡張する。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。 ○口縁部内面、円形浮文。	色調 灰褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。くさり礫。	
壺形土器	25-291	表 採	口径 29.1 器高(3.2)	○くの字に外反する口縁部。口縁端部は下外方にわずかに拡張する。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 明茶褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。	
壺形土器	25-292	表 採	口径 41.2 腹径 45.4 器高(13.0)	○くの字に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はやや張る。 最大径を腹径にもつ。 ○口縁部内外面、ヨコナデ。体部外面上半、刷毛目。下半、縦方向のヘラミガキ。内面、ナデ。	色調 淡黄茶色。 胎土 0.1~0.3cmの砂粒。	
底部	25-293	表 採	底径 7.0 器高(2.4)	○平底。 ○内外面とも磨滅のため調整不明。	色調 暗茶褐色。 胎土 0.1~0.4cmの砂粒。角閃石、金雲母、くさり礫。 生駒西麓産。	
底部	25-294	表 採	底径 7.8 器高(2.8)	○突出する平底。底面は厚ぼったい。 体部に向って大きく張り出す。 ○底部外面、縦方向のヘラミガキ。 外底面ナデ。他は磨滅のため調整不明。	色調 淡灰褐色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。くさり礫。	
底部	25-295	表 採	底径 5.5 器高(3.6)	○わずかに上げ底。底面は厚ぼったい。 ○底部外面、ヘラミガキ。他は磨滅のため調整不明。	色調 淡黄茶色。 胎土 0.1~0.2cmの砂粒。くさり礫。	

() は残存値

版

版

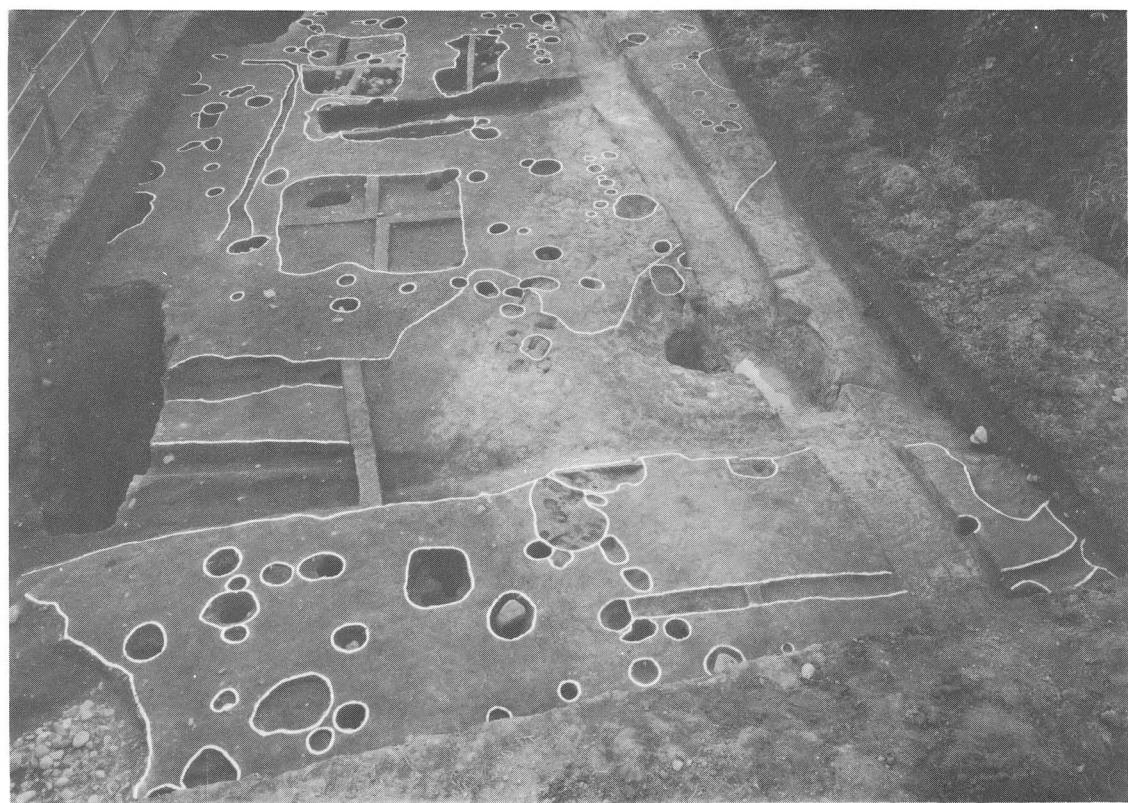
図版1



中野遺跡航空写真



調査区近景 西より



遺構全景 東より



溝2 遺物出土状況 南より



井戸 西より



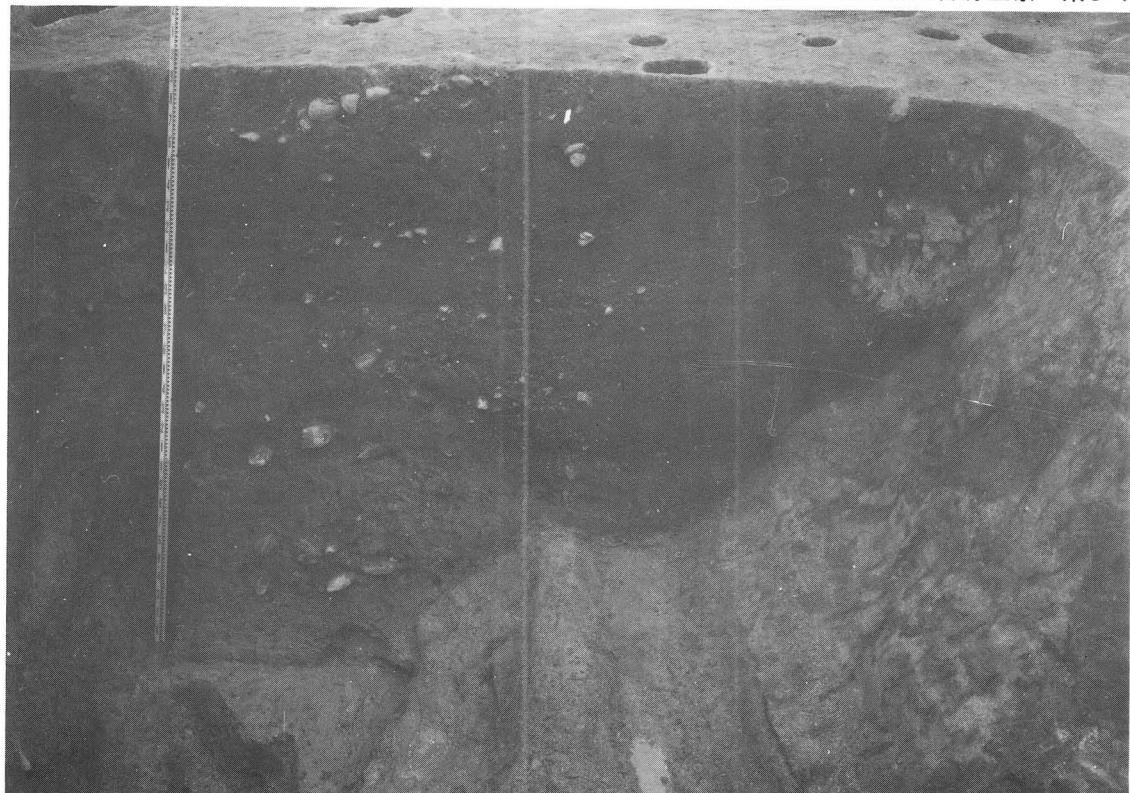
土壤 1 北より



土壤 1 遺物出土状況 北より



溝1 掘り込み部分全景 東より



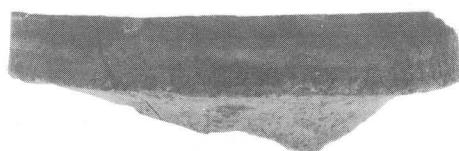
溝1 西側断面 東より



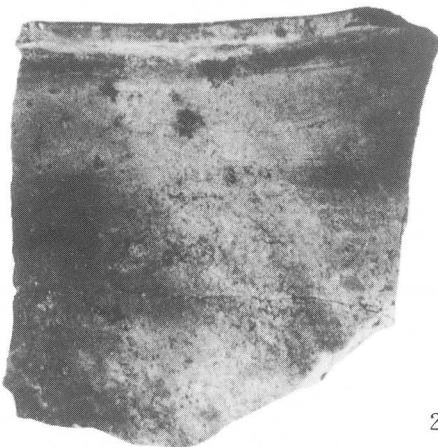
4



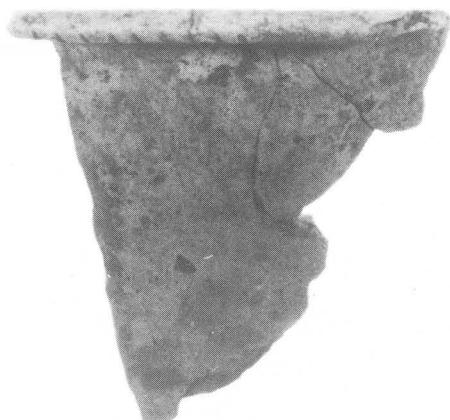
5



14



20



15

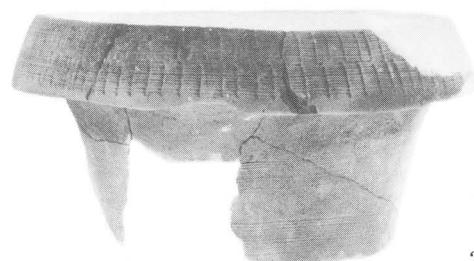


16



23

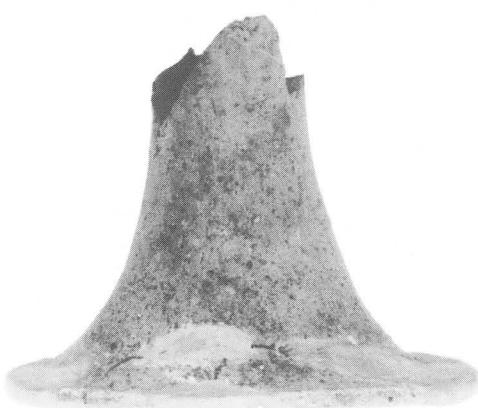
試掘時溝 1 出土土器・溝 1 第 6 層出土土器



28



32



33



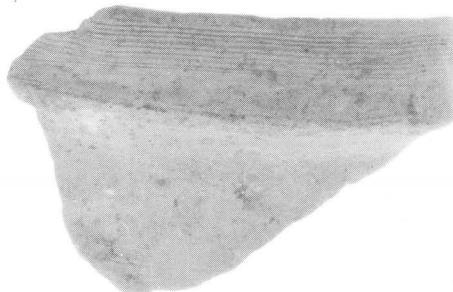
44



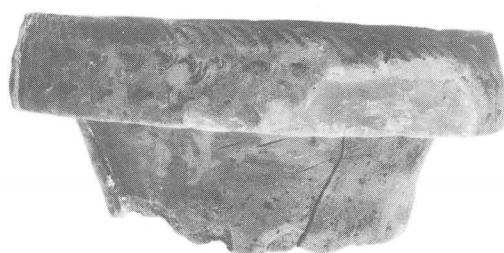
43



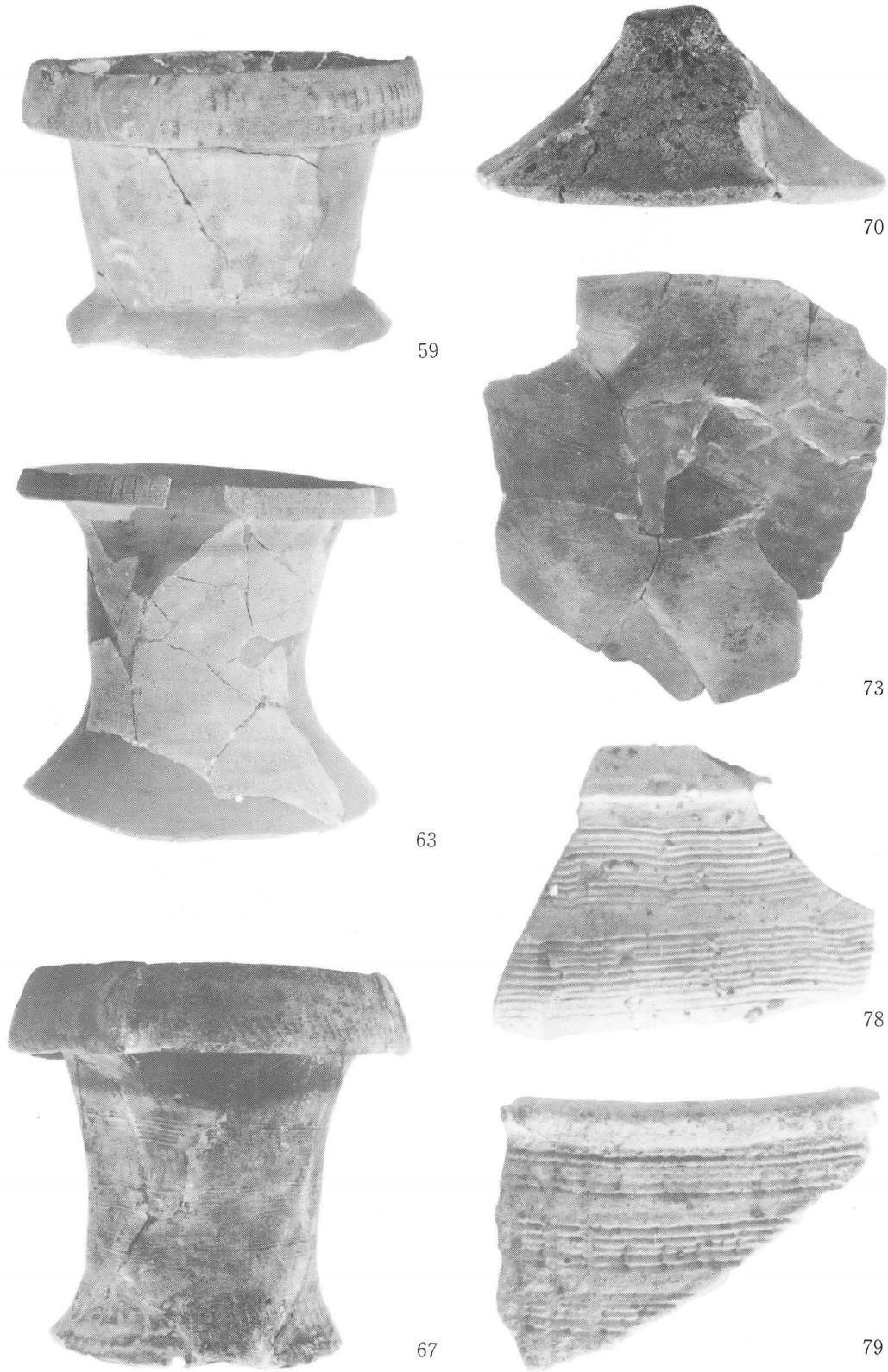
47



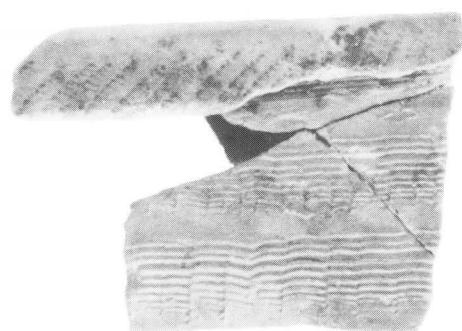
57



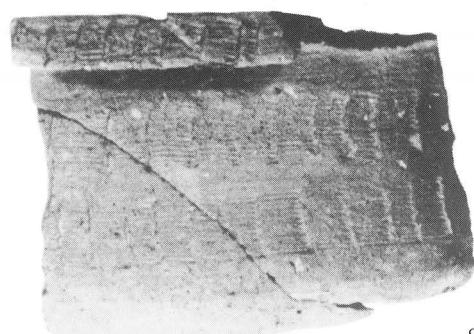
58



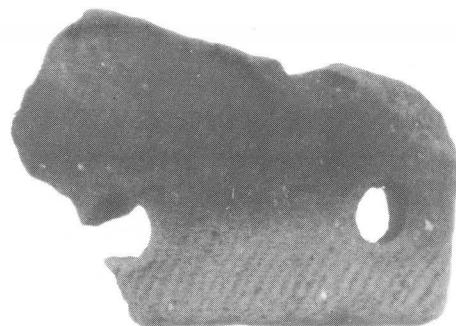
溝1第4層出土土器



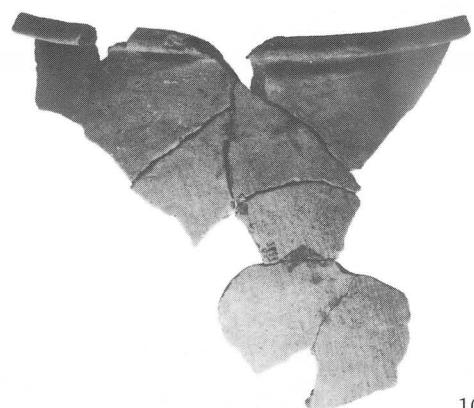
80



82



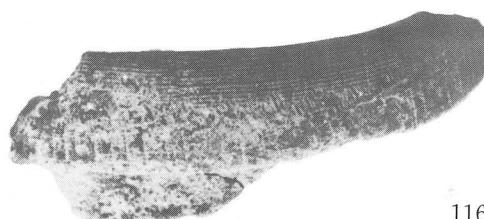
85



102



87



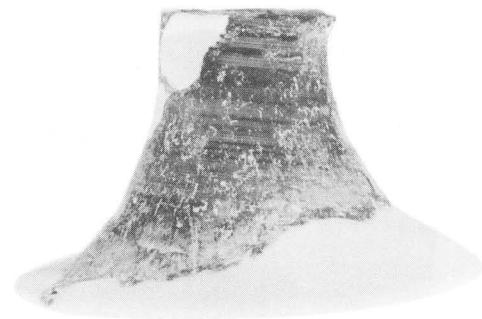
116



118



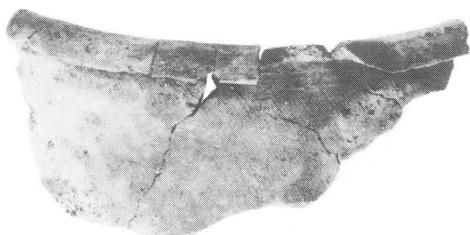
125



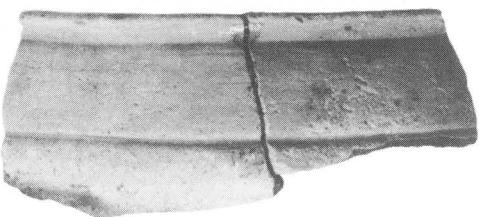
126



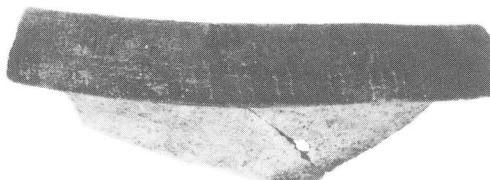
178



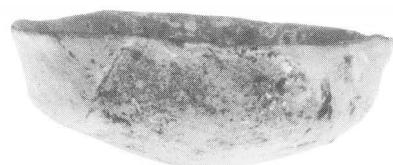
127



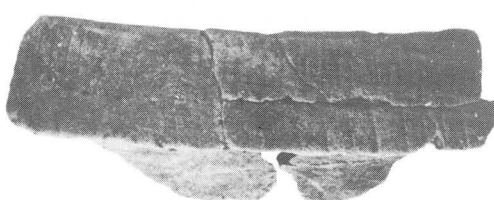
191



143



198



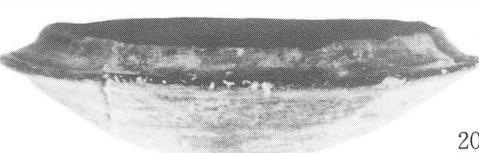
144



205



145

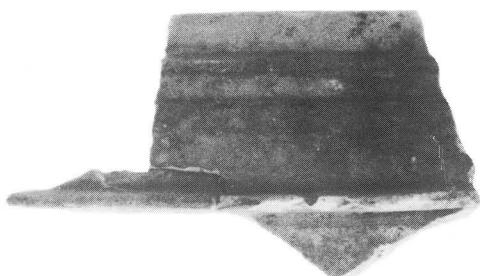


206

図版11



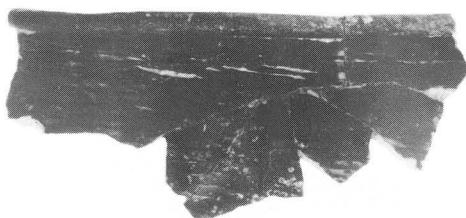
225



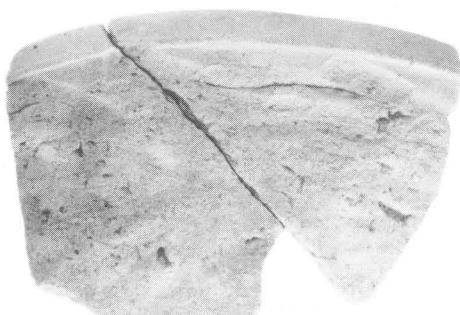
246



227



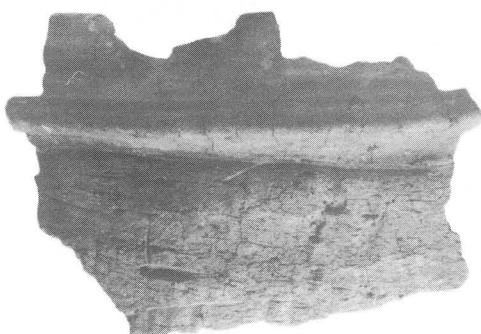
247



237



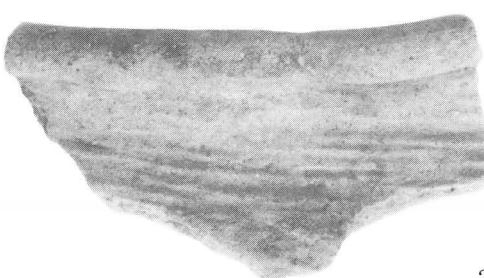
265



238



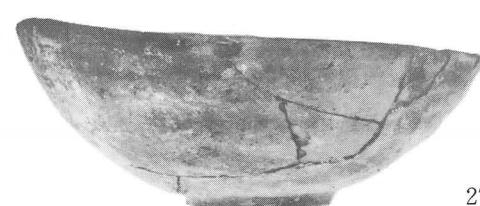
268



242

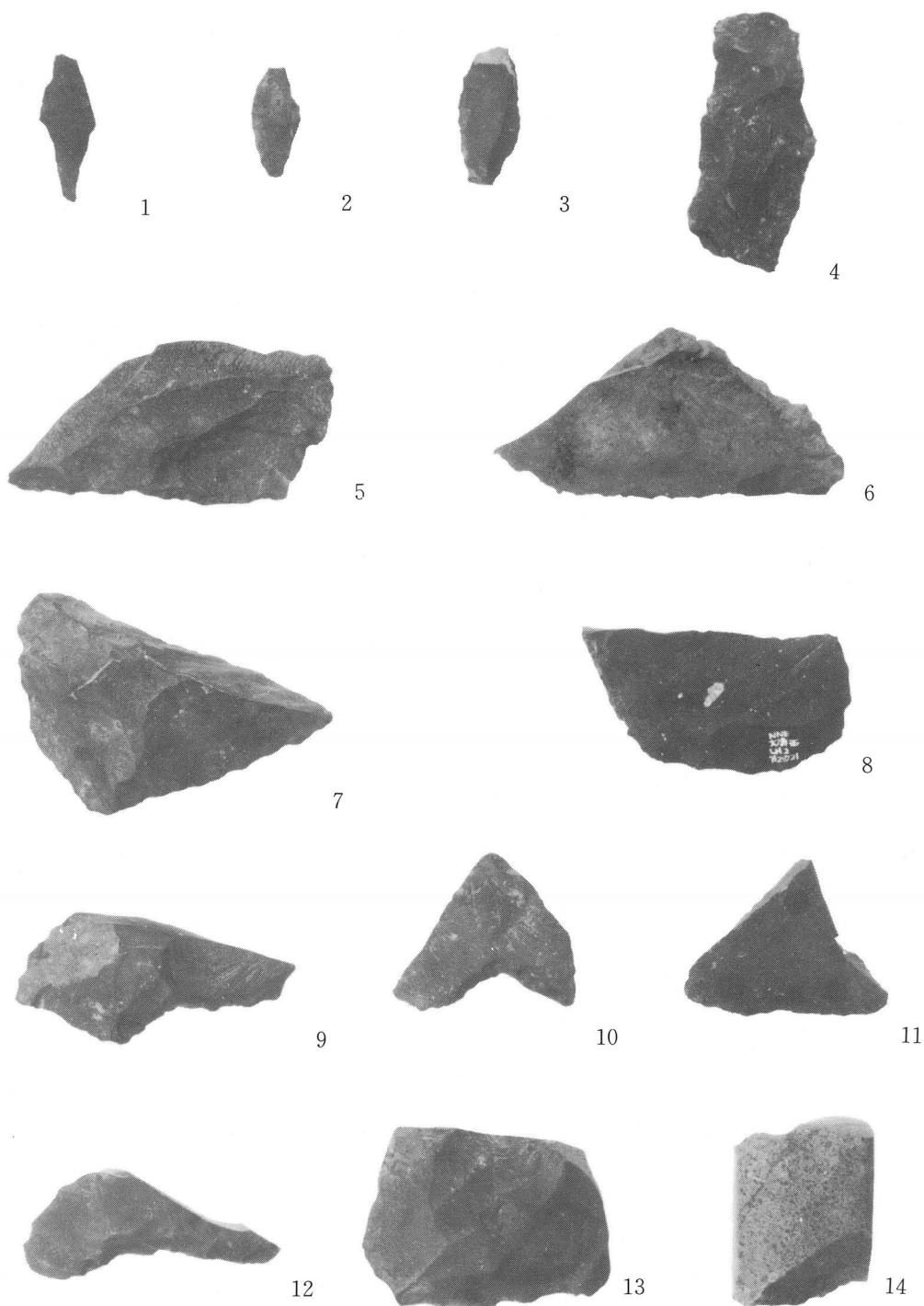


271



278

溝2、土壤1、建物4、建物5、ピット5出土土器



溝1出土石器



19



20



21



22



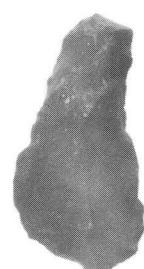
24



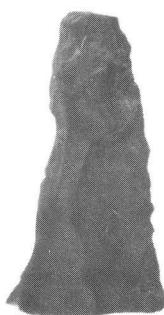
25



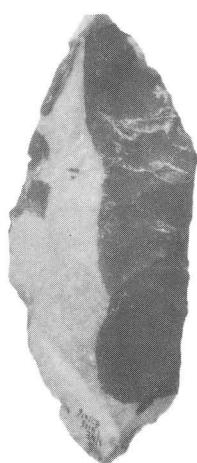
26



27



28



29



30



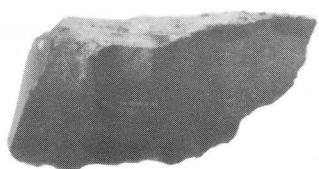
31



32

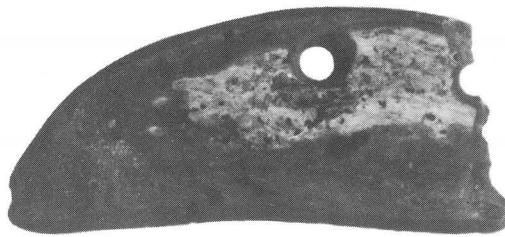


33



34

その他の遺構、推積層出土石器、表採石器



15



17



1



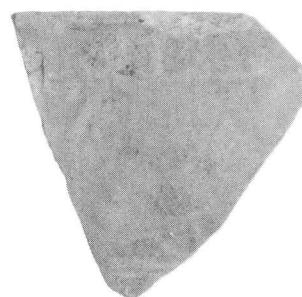
2



18



1



2



3



4

溝1出土石器・紡錘車、溝2、土壤3、土壤1出土瓦

付図 1

宮林古墳墳丘測量図



富田林市埋蔵文化財調査報告 10

発行年月日 1984年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 明 朗 社

1984. 300

